

# 村雨と提督の小笠原旅行記

fire—cat

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※題名変更しました。

提督の世界とつながった鎮守府から来た艦娘が提督の旅行にくつついていくお話。

……来週（2018/07/24）に1航海で小笠原行くので、その旅行記。

なので本編は7/25日以降の更新です（タブレットでの入力は苦手なので、公開してもいつもの通り誤字脱字ルビ振りで再修正する恐れは120%あります）

注意：この作品は艦娘が出てくる時点でフィクションであることは明白です。また録

画等を基にしていますが会話内容等は加工してあります。イベント名や建物名については……察してください。

※ 村雨と小笠原旅行 in 2019 は諸事情により完全非公開としました。  
またこの措置に伴い本作は完結とします。

# 目次

村雨と小笠原旅行 in 2018

7月26日——旅行第3日目 前編	50
7月25日——旅行第2日目 後編	39
7月25日——旅行第2日目 前編	31
7月24日——旅行第1日目	18
プロローグ4	12
プロローグ3	8
プロローグ2	1
プロローグ	

7月26日——旅行第3日目 中編	62
7月26日——旅行第3日目 後編	65
7月27日——旅行第4日目 前編	83
7月27日——旅行第4日目 中編	94
7月27日——旅行第4日目 後編	101
7月28日——旅行第5日目 午前	107
7月28日——旅行第5日目 午後	117

7月28日	旅行第5日目	昼間	128	7月30日	旅行第7日目	午前	201
7月28日	旅行第5日目	午後	150	7月30日	旅行第7日目	午後	216
7月28日	旅行第5日目	夕方	165	7月31日	エピローグ		223
7月29日	旅行第6日目	未明	174	251			
7月29日	旅行第6日目	午前	181	小笠原DAY in 2018			
7月29日	旅行第6日目	午後	185	小笠原DAY 前半			263
				小笠原DAY 中編			276
				小笠原DAY 後半			286
				旧「艦娘と提督の小旅行」あとがき			
7月29日	旅行第6日目	夜間		後書き	旅行 その裏で		題名

変更前の「艦娘と提督の小旅行」のあとが  
きなので読まなくて結構です ————  
301

村雨と小笠原旅行 in 2018  
プロローグ

とある世界のとある場所——。

「ちっけった。軍艦、軍艦、朝鮮！」

「朝鮮、軍艦、ハワイ！」

子供から10代半ばぐらいまでの少女がじゃんけんをして楽しんでいる。

それをじゃんけんをしている少女たちよりは年上に見える女性たちが微笑ましげに見守っている。

「いや〜元氣だねえ。そんなに外の世界って気になるもんかねえ」

「まあ、あの子たちにとっては気になるんでしょうね」

「しっかし、なんであんな穴があんな所に空いてたんだらうね。提督の世界に行ける穴なんて代物が、さ」

件の穴が見つかったのは偶然からだった。

「ん？ なにこれ？ カール？」

それを拾ったのは一人の重雷装艦。

「北上さん、それは？」

「んん。何か拾った」

「〇ール？ 聞いたことありませんね。これって——」

心当たりない代物を見て、その正体について言葉を交わすも、

「こういう怪しいものは明石に訊くのが一番っしょ」

片手に怪しげな袋をヒラヒラと掲げながら、鎮守府に籍を置く唯一の工作艦の下へ向かう。

「ねえ、明石。何か知らない？」

「えくと、……ひよつとして。……いやいや、常識的にあり得ないし、何かの悪戯？」

持ち込まれた袋を見ながらブツブツと考え込む工作艦。

「なんなのさ。心当たりあつたら教えてよ」

ブツブツと己の世界に入り込んだ明石に苦言を呈する北上。

「んと、前に一度だけ提督がいる世界の映像が入ったことあつたでしょ？」

「ああ、あれね。どこかの街のカメラからだと思つてたら提督がいる世界のカメラの映像だつて解つて驚いたもんね、皆」

「えっ！ ちよつと待つて。その流れだとこれつて提督の世界の？」



「ええ。それも提督の物かと」

何でわかるのかと訝しげな声に

「提督は最後まで気が付かなかったようですが、あの時の映像にはアルフォンシーノ方面への作戦指揮の様子も写っていました。映像から確認するに、提督があちら側から指揮を執る際の画面は如何どうやらかなり簡略化されている事も解りましたが、他にも提督の執務室というか、この場合は私室でしょうね、その様子も写っていましたよ。覚えてますか？」

「そんなこともあったね。随分私達の顔がコミカルになつてて無然となつてた娘も多かったもんね。序に提督の顔を初めて見てがっかりしてた娘も。……ああ、そう言えばこの袋があつたわ、確かに」

そう言いながら自分の片手にぶら下がる袋を見て不思議そうに首を傾げる。

「でも、なんでそんな代物がここにあるのさ」

「それなんですよね……。普通に考えるとあの映像を見た誰かが面白半分に袋を作つて置いてたとしたら」

「でも、直前まであそこに何もなかったよ？」

「ええ。誰も近くには居ませんでしたし。それに中身が入っていますよ、これ」

「へ、あけ……。提督の物なら勝手に開けるわけにもいかないでしょうね」

僅かに躊躇いを見せた明石が頭を振り、

「北上さん、それを拾った現場に案内してもらえませんか？ ひよつとすると……ひよつとするかもしれません」

「ん。ああ、ひよつとしたら向こうに行けるかもつて？ まつさかあ」

半信半疑ながら現場に向かう一行。

「まさか本当にあるなんて思ってもみなかったよね」

勝負が佳境に入ったらしい、じゃんけんグループを見ながら当時を振り返る年長者達。

現場についた一行が付近を調査し、その姿に興味を持った艦娘からカー〇の話が鎮守府全体に広がり大騒動になった挙句、不審な穴が見つかったのは深夜の事。

最小限の警備を残し、その夜は撤退し改めて翌朝、その穴の様子が確認された。

長門や飛龍達が穴の直径を目算してみた結果、重巡洋艦娘や戦艦娘、空母娘では艀装を外しても入ることが困難だろうと判断され、初期艦である五月雨の次に建造され練度も飛龍の次に高かった夕立が非常時にも対応できると見込まれ調査を命ぜられる。

「ふくん、これが？」

そう言うときひよいと上半身を穴に潜り込ませる夕立。

「夕立、何か見えたか？」

見守る長門の声に

「ん〜。多分、納戸に繋がっているっぽい。……ん？」

何かを見つけたらしい夕立が身体を伸ばし

「こんなのあった」

と差し出す。

そこには――

『一番くじ艦これ ―第三次作戦 空母機動部隊 見参！― E賞艦娘オリジナルクリ

アポスターA2サイズ 深海棲姫 全1種』

と書かれていた箱。

「これは……」

封が切られていない箱に描かれている絵を見て眉を顰める長門

「……提督は深海棲艦と繋がっていたのか？」

「んなわけあるか〜い。深海棲艦じゃなくて深海棲姫と書かれとるじゃろうが。……っ

て、もっと質悪いわ」

「……あほくさ。提督の世界とうちらの世界じゃ色んなものが違うって言ってたじゃ

ん。高がポスター一つで深海棲艦と出来てたなんて――」

後から聞こえてくる漫才を後目に「あと、こんなのも」と2つの円筒形の紙筒を差し

出す夕立。

——「艦これ」運営鎮守府 公式カレンダー2017 / 「艦これ」運営鎮守府 公式カレンダー2018——

「……提督、貴方という人は……」

カレンダーをめくりながら、長門が頭を振る。それに対し那智が

「まあ、提督とここは別世界だからな、価値観も色々違うのだろう。それに提督が我々を指揮するには文字から察するにこの運営鎮守府とやらの属さないとならん様だしな。ここが我々でいうところの大本営なのだろう。そこが公式に出しているものだ、提督としては購入する義務もあるのだろうな」

そんな会話を背に再度上半身を潜り込ませる夕立。

(さつき、いい匂いがしたっばい。お菓子だったら……)

「あ、こら。夕立、もう駄目だ」

そんな夕立に気が付いた長門が腕を伸ばし抱きかかえる。

「あ、長門さん。離して。もうちよつとだけ」

「駄目だ。この穴がいつ消えるかわからん。こんなところでお前を失っては提督に申し訳が立たん」

「むっう」

頬を膨らませる夕立を指で突きながら

「安全が確認されて、提督の許可が出たら行けばいいだろう」

「ぼー」

そんなやり取りを聞いていた艦娘達から不満の声上がる。

夕立ばかりじやずるい。私達も提督の世界を見たい。

そして——じゃんけん大会が始まる。しかし、練度が50に届いて居なかつたり遠征にしか出撃せず提督との接点が残らない軽巡洋艦・駆逐艦・海防艦達から辞退が相次いだ為、練度50以上の軽巡洋艦と駆逐艦で演習や出撃に何度も出た者が対象になった。

「あ、どうやら決まったようですね」

先程から少女たちを見守っていた鳳翔の視線の先には、がつくりと膝をつく夕立。

勝者は——村雨。

## プロローグ2

「良かった。何とか勝てて。夕立には悪いけど、お姉ちゃんとしては妹が直接知らない男性に会いに行くなんて認めません」

「正直、村雨が勝つて良かったわ。陽炎型の長女としては浜風や長波には危ない目にあつて欲しくないもの。あのスタイルだし」

「そうそう。本当は私か時雨が勝ててればよかつたんだけどね。村雨のスタイルだと浜風や長波と同じ被害に遭わないとも限らないからさ」

「僕の幸運もあまり当てにならないなかつたみたいだね。村雨、気を付けるんだよ？ 提督が奨めてくる物の蓋が空いたりしたら口に入れちゃだめだよ？」

「もう。心配しなくても大丈夫よ、こう見えても大和さんと同じ練度はあるんですからね。お酒なんて奨めてきたら逆に酔いつぶしてあげるわ」

「……慢心ダメ。絶対」

「——!!」

いきなり耳元から聞こえてきた声に思わず身が竦む。

「もう。赤城さん!!」

食堂でワイワイとしている駆逐艦達の一団の背後からそっと近寄った赤城が村雨の耳元で囁く。

「駄目ですよ、村雨ちゃん。慢心は禁物です。いま、完全に無防備でしたね」

「これは——ひゃん」

村雨の豊かな双丘を背後から揉みしだく手。

「ほっほっ。なかなか立派なものをお持ちですなあ」

「ちよつと、やめ——アン」

「おんや。感度ええのう。うちが男だったら危なかつたんじゃ？」

顔を真っ赤にする村雨に、周囲からも「村雨、油断大敵」やら「提督も男なんだから」やら声が掛かる。

小さなお祭り状態だった騒がしい夜が明けて——。

「じゃあ、村雨、気を付けてね」

唯一の結婚艦である飛龍や提督不在時に鎮守府を纏める長門を始め、大淀、明石、夕張に、最初に穴を見つけた北上と大井、心配したり残念がったりする姉妹、提督からの指示でよく艦隊を組む五十鈴・潮・浦風・浜風・長波達に見送られ、穴に飛び込み——。

直後にカフェオレ色の髪が飛び出る。

「あ、そうそう。向こうのお金とかってどうするの？ 何時まで向こうに居られるん

だっけ？ それと、私がこつちに連絡とるときはどうすればいいの？」

聞いておくの忘れちゃった。と、穴のふちに手をかけ、よつこらしよ。と這い出て確認をとる村雨。

顔を見合わせる一同。

「え？ ……決まってなかったの？」

思わぬ沈黙に聊か頬を引き攣らせる村雨。

軽く咳ばらいをしながらその場を代表して大淀が、

「そうですね……色々知りたいこともあるでしょうけど、鎮守府を長く空けて欲しくないの……遅くとも7月31日の正午には戻ってきてください。それと、向こうのお金ですが、奮発して55000コイン出します。村雨の財布に入っていますから無駄遣いはしないで下さいね。今持っている旅行鞆には財布や着替えが入っていますが、艤装に空のドラム缶を搭載しています。お土産とか資料があったらドラム缶の中に入れてくださいね。それと応急修理女神が乗り込んでいます。使うことはないでしょうけど、念のため。それと提督にお会いしたら旅行鞆の中にある白い封筒を渡してください。それで多分大丈夫だと思います。あ、あともう一つ。明石からのお守りです」

明石が村雨にお守りを握らせ、耳元で囁く。

「提督に押し倒されて万が一最後まで行ってしまったら、これをすぐに飲んでください」



ね。妊娠の可能性はなくなりますが」

大淀からの諸連絡をメモしていた村雨が明石からお守りを渡されると同時に耳元で囁かれた最後の言葉に頬を染める。

「ちよ！ ……有難うございます、明石さん」

思わず大声が出かけたが、何とか抑え込む村雨。

「コホン。それじゃ、改めて。村雨、提督の観察任務に行ってきます」

## プロローグ3

「あちい……。身体のラードが溶ける……。この部屋クーラー効いてんの？」

とある会社の一角で机にうつぶせになりながらそんなことを言う男の頭を丸めた書類でポコッと叩く同僚。

「明日からの3連休はもつと暑くなるらしいぞ。……。もう少ししたら小笠原だろ？」

あっちの方がもつと暑いんじゃないのか？」

「……あっちの方がむしろ涼しいんですね、これが。少なくとも35度なんていかないんで」

「へえ。小笠原まで何時間だっけ？」

「船で24時間ですよ。一昨年までは25時間半かかってましたけどね」

そんな会話に、周囲の人が混じる。

「なに？ 2等で24時間？」

「いや、それは初めての旅で懲りたんで、その後は1等でのんびりですよ。前は4人部屋何で知らない人もいましたけど、一昨年から2人部屋で相部屋無しになりました。行くのは一人ですから独り占めですよ。差額が結構とられますけどね」

「成程なあ。ま、気を付けて行つてくるんだな。台風で帰れないなんてならないように」

「台風来たら逃げ帰るだけですよ」

「何時からだつけ？ 来週？」

「いやいや、24日出航です。明日からの連休は準備ですよ」

そんな会話をしているうちに終業を知らせるベルが社内に響く。

終業のベルが鳴ると同時に彼方此方で帰り支度が始まる。10分経たないうちに最後の一人が部屋の扉に鍵をかけ、宿直室に声をかける。

「2階店じまいです。お疲れ様です」

「おう。お疲れ。あ、そう言えば今年も小笠原——」

似たような会話と応えを返し、男が会社を後にする。

「あちい。ほんとに溶ける……」

地下鉄までの短い道のりを這う這うの体で移動する。

改札をくぐると折良く入線してくる車両。

「ふいふ。生き返る……」

車両に乗り込み冷房の直下に移動し、近く——1m四方——に誰もいないことを確認したうえで——スメハラは御免である——パタパタとシャツを仰ぐ。

何度か路線を乗り換え、自宅に帰つたのは19時も半ばを過ぎた頃。

「さくてと、あ、小笠原の案内来てるな」

一通り目を通し、食事を済ませるとPCを立ち上げる。

ブラウザを起動し――。

「そろそろ戻って来たかね、天龍達は」

眩きながら始めたゲームは『艦隊これくしょん』

当初はのんびりモードで週2回立ち上げればよかったぐらいの偽提督だったが、最近  
はイベントにも少しだけ参加するようになっていた。最も3海域以上クリアしたことは  
ないが。

「名取達も戻って来たか。演習も終わったし。後は羽黒達が艦隊演習から戻ってくれ  
ば、今日は終わりだな。……今週もあ号もい号も無理だったか、やれやれ」

暫くして男はPCの電源を落とし、欠伸をしながら隣の寝室に移動していった。

翌朝――。

「右よゝし。左よゝし。……よつと。ここが提督の世界かあ」

カフエオレ色の髪が天井から覗く。

「提督がどんな人かまだわからないから、なるべく気付かれないようにしなくちゃ」

そつと足元を確かめながら天井から降りる村雨。

「……あれ？ 思ってたより片付いてる？ 変ねえ……映像ではもつと汚かったのに」

村雨の知るところではなかったが、毎月半ばの突発的片付け症候群——溜まった燃やせるゴミを纏めて自分の農地に設置してある廃棄物の処理及び清掃に関する法律とダイトキシシン類対策特別措置法に対応済の焼却炉で焼却するだけ——発症直後であった事と金欠、旅行の準備が重なり、部屋の中はかなり閑散としていた。

「……えっと、家具や本と機械の他は旅行鞆とリュックが一つ。ひよつとしてどこかに旅行予定なのかな？」

部屋の真ん中に鎮座するトランクとリュックサックを見つつ首を傾げる村雨。

「まあ良いか。……後は……あ、ワインセラー発見。……こつちの世界はどんな銘柄があるのかな」

ワインセラーに近づく村雨。我に返り、歩みを止める。

「いけない、いけない。提督を探すが先でした。……隣の部屋かな？」

足音を立てないようにそつと廊下を歩き、

「人の気配は……ここからしかしないわね」

扉を開く。

「寒っ！ えつと……19℃？ 冷蔵庫って言ってもおかしくないわよ。提督ってそんなに暑がりなの？」

冷房が効きすぎている部屋を窺う。

「ベットに寝ているのが提督かな？ それにしても、本だらけで足の踏み場もないじゃない。……秋雲ちゃんが好きそうな本だったら燃やしてあげる」

転がっている本を指でつまみながら、ページをめくる。

「フムフム……『逆説の日本史』？ こっちは日本の城に……こっちは日本の国立公園図鑑……こっちは……冒険活劇かな？ あ、夕立達が好きそうな恋愛小説……」

目ぼしい本を流し読みする村雨。

「これは、『スウエーデンの政治』？ 『物知りになる本』？ 『世界の軍用銃』？ 『艦隊これくしょん — 艦これ — 艦娘型録』？ これは私達の事が載ってるんだ。あ、式もある。こっちは……『艦これスタイル 参』に「艦これスタイル 肆」か。……もしかして提督って手当たり次第本読む人？ 性格全然分らないけど……エツチな本が見当たらないのは……隠しているのよね？」

流し読みしながらもベットの人物から目を離さない村雨。

「……それにしても随分煩くしちゃったけど、全然起きる様子ないわね……。起きるの待っているだけなのも詰まらないし……。あ、そうだ。何か料理作ったら匂いで起きるかも。……朝食と言えば茶粥と御御御付おみおつけと卵と香の物……材料あるかなあ、提督ずばらそうだし」

部屋に入った時と同じように足音を立てずに部屋を出る村雨。

階下にも人影がない事を確認して台所に入り、冷蔵庫を開け中を確認する。

「えっと……お味噌はある。卵も……期限は切れてないわね。じゃが芋にトマト？  
キャベツにコンニャク、豆腐。後は……凍っている豚肉？ お魚に……。あら？ 漬け  
物がある。他には……この紫の実って何？ ……あ。小さいけど甘くておいしい。提  
督が起きてきたら貰っちゃおっと。うん、これだけあれば作れるかな。番茶もあるし。  
……意外と材料が揃ってたわね。それじゃあやってみよ〜」

## プロローグ 4

——どこからともなく漂ってくる香りに目を覚ました男が寝ぼけ眼で階段を下る。

「………何だ、この香り」

匂いの元を辿り台所へ。そこには――。

「あ、おはようございませす。提督。御飯はもう少しでできますから少しお待ちください。エプロンお借りしました」

カフエオレ色の髪を持つエプロン姿の娘がコンロの前でお玉をかき混ぜていた。

「………いかん、疲れているな。飯作ってもらおう夢見るとは」

そう呟き階段を上がる男に

「提督？ 寝ちゃだめですよ」

お玉を持ちながらコトンと首を傾げるカフエオレ色の髪を持つ娘。

「………本気で医者行ってくるか。夢と現実が曖昧になつて……」

「ひっどーい。現実ですつてば、現実」

ガスを止めベットに潜り込もうとする男を追いかける。

「はいはい。………変な夢だ。寝なおすか」



その声を見殺しし頭から布団をかぶり、そのまま二度寝に入る。

「んもう。せつかく用意したのに。こうなったら根競べなんだから」

男が暫くして目を覚ます。

「おはようございませす、提督」

自分を覗き込むカフエオレ色の髪を持つ娘が目映る。

「……まだ寝ぼけてるのか」

男は眩くと再び眠りかけるが、そうはさせじと娘が揺さぶる。

「起きてください。提督、提督ってば。……あんまり聞き分けが悪いとご近所中に聞こえるように叫びますよ！」

その声に

「……俺の妄想や夢じゃないのか。……で、嬢ちゃん、飯作っていた様だから空き巣とかじゃないと思うんだが、そんなコスプレして目的はなんだ？ 現金ならないぞ、まじで」  
そう言いながらベットから抜け出す男。同時に枕元に常備している二尺の六角鉄棒を寝巻にしている作務衣の懐にしまい込む。

「……だから、私は！」

そう言えば自己紹介していなかった。と気が付く。

「私は村雨です。白露型三番艦の」

「もう少し、まともな嘘つこうな。嬢ちゃん」

「もう、どうしたら信じてくれるんですか、提督」

「いや、信じるもなにも……」

男に悪戯心が沸く。

「ん〜信じて欲しいなら、自己紹介してくれないか？ ゲームの村雨の台詞通りに」

「もう……。それで信じてもらえるなら」

軽く咳ばらいをし

「はいは〜い、お待たせ！ ……そう？ ごめんなさい！ でも、これから村雨のうんと

いいところ、見せたげるっ！ ——提督」

「ほう。よく似ているなあ」

そう言いながらも、確りと一昨日に改装したばかりの改二の台詞と自分の提督名を出されたことに男は若干の驚きを隠せないでいた。

（……この提督名は艦これ以外で使っていないんだが。この嬢ちゃん、どこで調べたんだ？）

「この台詞で合ってますよね、一昨日改二になりましたから。それと、これで信じてもらえました？ ……まだ駄目ですか」

男からは未だ不審の念が感じ取られる。

「ん〜 あ、そうだ。この手紙読んでもらえますか？」

大淀から託された封筒の存在を思い出し手渡す。

「……嬢ちゃんが我が家に侵入してきた理由でも書かれているのかな？」

左手で封筒を受け取る男。

男が手紙を読みふけ――。

「……ありえん。ありえんが、これは……」

頭を何度も振り――大きな溜息を吐く。

「……確かめたいんだが、本当に艦これの村雨だと言うのか？」

「ですから！」

自称村雨の抗議を遮るように

「幾つか質問するが、良いか？ ……村雨の鎮守府はどこにある？ 鎮守府のドックと

艦隊の数は？ 初期艦は？ ケツコンカツコカリを結んだ艦娘は誰と誰で、その順番は

？ 村雨が所属している艦隊名は？」

その問いに一つづつ答える『村雨』。当然どれも男の記憶通りである。そして最後に――。

「えっと、私が所属している艦隊の名前は……五十鈴さんが旗艦の爆乳水雷戦隊です。

……もういいですよね？」

自身が属している艦隊名は小声で頬を染めながらも答える自称村雨。

「……全部あつているな。さすがに認めるとするか。……彼方此方で読むSSと同じ現象が起きるとは未だ信じたくないが」

「やつと認めてくれましたか。……提督って頑固なんですね」

「直ぐに信じる方がどうかしているだろ。普通は、異世界に繋がるのはお話の中だけだ」  
 「はあ。まあ良いです、取り敢えず信じて貰えたなら。それより、朝食、には遅すぎますね。とにかく食事にしましょう」

娘が作った茶粥、じゃが芋・コンニャク、豆腐・豚肉を具にした御御御付、大根おろしを添えただし巻き卵と香の物の早い昼食<sup>ブ</sup>または遅い朝食<sup>ラ</sup>を済ませ、改めて『村雨』が来訪した事情を尋ねる。

そこでも一悶着あつたが、業を煮やした娘が強硬手段に訴え、穴から大淀を称する黒髪の娘と夕張を称する緑髪（染めたのか？）の娘を呼び出し、洗る男を穴に押し込んで謎の空間で話し合いを持つ。男が穴の淵から秘かに、大淀を称する娘が言う『艦これ世界』を眺め、艦娘と称するピンク色の髪と赤い目の少女（夕立）達に見つかりかけたり娘達が男を録画した映像を見せたりと2時間に渡り話し合いを行った結果、男がようやく納得をした。

「……やつと納得していただけましたか、提督」

黒髪の娘——大淀がやや呆れながら疲れたような声を出す。

「まあ、これだけ色々と見せられたり、妖精(?) 達に触れあったり、装備を触ったりすればな……。序でに言うのと、この部屋というか空間から変な電波も出てなかったしな」

そう言つて内ポケットより盗聴器発見器を取り出す男。

「へえ。そんな小さなもので発見できるんですか?」

緑髪(元々の色だった)の娘——夕張が興味津々の様子で覗き込む。

「まあな。こいつは海外から個人的に輸入した品だよ。盗聴電波識別機能と実際に盗聴されている音声を受受することができて、電波を発しない隠しカメラの位置も特定してくれる代物さ。……夕張、近い」

男が自分の胸を親指で叩いた意味に気付き、自身の胸元を抑えながら頬を赤く染め離れる夕張。

「そんなに興味あるなら、こいつをあげるから色々弄つてみたらどうだ。同じものは持つてるから遠慮しなくていい」

男の「あげる」という言葉に表情を一瞬輝かせ、慌てて否定するが、次の「同じものは持つてる」という言葉で遠慮なく貰う事にした夕張。

ご機嫌で引き上げる夕張や大淀を若干呆れた視線で見送りつつ、カフェオレ色の髪の毛——村雨が問いかける。

「良いんですか？ 提督。結構高いですよ、あれ」

「まあな。本体価格6万ちよいと言ったところか。……ゲームだつて思つていたから色々無茶もできたんだが、色々話したり鎮守府の様子を実際に見たりするとな。何かしてやれないかなつて思つてな、あれがなんかの役に立つならいいさ。もう中破進軍とかオリヨクルとか無理かもな」

最後は聞き取れなかったが何を思ったのかは想像がつき、そんなことを話す男を甘いと思いつつ悪い気はしない村雨であつた。

「ところで提督、この部屋の旅行鞆とかがあるのは、どこか旅行にでも行かれるのですか？」

「ん？ 来週の火曜日から6日間の小笠原旅行にな。それと、その取つて付けたような改まった言葉遣い何とかならないのか？ 艦これでの口調と違うと違和感がある」

「せっかく提督とお話するから改めてみたのに。わかりました、いつも通りにしますね。それと6日間も旅行なの？ ……どうしよう。私7月31日には戻るから、提督1週間もないのね。でも良いかつ……それじゃあ留守は私に任せて、楽しんでくださいね」

「は？ 新聞とか止めてるから、ここに居てもつまらんど？ 近所の目もあるから、一人では残せないからな。出直してきたらどうだ？」

「うん。……そうしたいのはやまやまなんだけど、日程とか考えたらダメなのよね。8月中旬には大本営から大規模作戦が告知され……あつ、何でもない、忘れて」

内緒にするように言われていた事を口にした事に気付き慌てて口をふさぐ村雨「ふくむ。ダメなのか。……一緒に行ければ良いんだが、もう追加申込できないからなあ。来るのが判っていれば二人分で申し込んでたんだが」

村雨が口にしたかけた大規模作戦の事には触れない男。

「……提督、私、どこか宿に泊まりますから、心配しなくても良いですよ?」

「金はあるのか?」

「大丈夫ですよ。お金も55000コインありますし」

「はあ? ちよつと待て。コインって、ちよつと見せろ。ここじゃ使えないかも知れない」

村雨が差し出す財布の中身を確認し天を見上げる男。

「提督? どうしたの?」

「村雨。……もう一回大淀か夕張か明石に連絡とつてくれ、至急だ」

溜息を吐き、村雨に大淀たちへの連絡を頼む男。

「どうしました、提督?」

大淀たちが先程の空間——艦これの世界と男の世界の間に出来た空間——に集まっ

たところで男が口を開く。

「村雨にコインを持たせたのは誰だ？」

「え？ 私ですけど、何か問題が？」

大淀が首を傾げる。

「こつちじゃコインなんて使えないことは知らなかったのか？」

大きな溜息が漏れる。

「え？ 提督は結構コインを集めていらっしやったのでてつきり何らかの方法で使えるのかと」

「……それは、模様替え用の家具を購入するためだ。執務室の家具が替わっていただろ？」

「ああ、その為でしたか。いつの間にかお風呂になってたり、気が付いたら布団が敷かれてたりしているなって思ってたんですよ」

「……大淀、君はこつちの世界の読み物ではしっかり者に書かれていることが多いのに。……事実は小説よりも奇なりというやつか」

「失礼ですね。……村雨の生活費どうしましょう？」

「せめてこつちの貨幣に似ていれば、何とかなつたかも知れんが……あれじゃどうにもならん」



「あれ？ 提督にお世話していただければ良いんじゃない？……？」

「済まんが、24日から6日程旅行で留守だ。村雨が何処かに泊まるというから金があるのか聞いたらコインがあるとされてな。さすがに給料日前で旅行となると色々物入りで村雨に渡せる金がない」

「我々も提督の世界のお金なんてありませんし……」

「……旅行先に村雨を連れていければいいんだが、申し込んだのは一人分だからな。部屋は宿も船も2人部屋なんだが、費用を振り込んでしまったから追加申込は無理なんだ。旅行会社の申込書もデータで保管だからすり替えもできん」

「……困りましたね。……ん？ 追加じゃなければいいんですか？」

「まあな。部屋数が増えるわけでもないから追加じゃなければそんなに影響はないだろうな。……あ、当然同室なのは村雨が嫌がらなければの話だ」

「私は別に構いませんけど、提督、良いんですか？」

「構わないが……大淀、何か方法があるのか？」

「ええ。……ちよつとコレを」

大淀の仕草から方法を察する男。

「できるなら構わないが……下手を打たないでくれよ？」

その言葉を最後に互いに元の世界に戻る。

「大淀、手があるの？」

鎮守府に戻った大淀に夕張が尋ねる。

「ええ。……あつちの大本営経由で提督が申し込んだ旅行社の情報を書き換えます。此方もあちらも電子網だけは同じ方式で良かったですね」

大淀が目の前を機器を操作しながら、夕張に応えを返す。

「なかなか……難しいですね。コインは、似たような名前の仮想通貨と呼ばれているものに代えられましたが……向こうの大本営には入れるんですけど、そこからが……」

それから4日後、食堂で進捗状況を明石達に聞かれた大淀が目の下に隈を作りながら答える。

「でも、もう少しで入れそうです。銀行の方もパスワードの方式が判りましたので、今晚中には、ね」

「……見つけましたよ。……ここを……こうして……ここを書き換えて……よし、終わり。此方も……このログとこのログとこのファイルを消して……向こうの大本営に入った記録を削除……よし……あ、どこか障害を起こしてしまいましたか？ ……このファイルとパッチファイルを削除してつと。終わりましたよ。提督に連絡を取ってください」

心配げに見守る夕張達になつこりと笑い——そのまま倒れ込む。

「大淀!？」

慌てて駆け寄る明石達。

「後、村雨ちゃんに……渡し……下さ……」

メモ書きを手にしたまま大淀が意識を失ったかのように静かになる。

慌てて二人が大淀の顔に耳を近づけると寝息が微かに聞こえてくる。

「……寝ているだけみたいね」

「良かった」

「じゃあ村雨ちゃんに連絡してきますね」

メモを手元に部屋から出る夕張。それを見送り――。

「お疲れさま。大淀」

優しく毛布を掛ける明石。

「提督、大淀さんが無事書き換え終了させましたって」

連休明けから旅行準備を男と一緒に進めていた村雨がホツとした様子で男に声をかける。

「そうか、間に合ったか。良かったな、村雨」

「ええ。……良かった」

連休明けから一緒に過ごしているうちに幾分距離を詰めた二人だった。

「あ、そうだ。村雨、旅行中はその提督呼びは禁止だ。変人扱いはされたくない」

「え？ いきなり何？ 提督でなかったらなんて呼ぶの？ パパ？」

「パパ呼びは絶対にやめろ。間違いなくとつ捕まる」

「もう、面倒ね。じゃあ、人前ではお父さんで良い？ 二人の時は……提督って本当の名前なんだっけ？」

「おいおい。今頃か？ ……金指。金指憲広だ」

「ん。じゃあ、憲広って呼ぶね。……ノリでも良い？」

小さく舌を出し悪戯気に宣言する村雨であった。

## 7月24日——旅行第1日目——

「提督！ 提督！ 提督つてば！ 起きてよ、も〜！」

激しく男の身体を揺さぶる村雨。

「バスの時間まで20分しかないんだから」

その声に飛び起きる男。

「嘘だろ!? 目覚まし鳴らなかったのか!？」

「ほら〜。早く支度して。ほらほら」

村雨が男の寝巻に手を伸ばす。

「ちよ、ちよっと待て」

慌ててその手を止める男。

「時間ないんだから、早く!」

「だから、寝間着に手を伸ばすな! スポンを降ろそうとするな!」

「じゃあ、40秒で支度して!」

「つたく、昨日の映画の影響だな。解ったからさっさと部屋を出る」

慌ただしく身支度を整え、ブレーカーを落としガスと水道の元栓を締め、戸締りを確

認しバス停に着いた時にはバスは発車寸前だった。

「間に合った。大丈夫か？」

「もちろん。この位は大丈夫よ」

「あら？ ご旅行ですか？」

バスに乗り込むと居合わせた近所の老婦人が声をかけてくる。

「ええ。毎年恒例の」

「ああ、小笠原ですか。あら？ この娘さんは？」

「ああ、親戚の娘ですよ、長野の。この娘の父親が今母島にいるらしいので、送る序でに旅行も」

「良いですね。お嬢さん、気を付けて行ってらっしゃいね」

「はい。ありがとうございます」

はきはきとした返事に目を細める老婦人。

自分の頭が手が載せられていることに気がつく村雨。

「……えっと、この手は？」

「良く挨拶ができました。っ」

自分を子ども扱いする提督のわき腹に肘を叩き込む村雨であった。

「やっと着いた。あれが、乗っていく船？ 思ったよりおつきいね」

「そう、あれが、おがまる。あれで24時間の船旅をするわけだ」

浜松町駅からトランクを転がし歩いて竹芝港へ。そこに停泊している船を指さし燥ぐ村雨。

「おが丸？ 可愛い名前」

「もちろん愛称だよ？ 正式名称はおがさわら丸。三代目だな」

興味津々な眼差しの村雨。

「あの船つてどれくらいの大きさなの？ 速度は？ 積載量は？」

矢継ぎ早に質問をして来る村雨に苦笑しながら資料を手渡す。読みふける村雨が、暫く後に顔を上げる。

「お父さん、何時乗船？」

「ん？ ちよつと掛かるよ。まず受付して、このトランクをチツキで預けるから」

「チツキ？ 何で？」

「トランクを二つも置くとさすがに狭いからね。大事なものはこっちのバックに入れて  
いるよな？」

「もちろん」

「なら良い。……ちよつと奥で待つか？」

奥にあるものを見せようと水を向ける男。

「ん？ 良いよ」

弾む足取りで奥に向かう村雨。そして――。

奥の第二待合所についた村雨の正面にガラス越しに6頭のイルカのオブジェが飛び込んでくる。

「わあ。 可愛い。 これを見せたくて奥に？ ありがと、お父さん」

燥ぐ村雨。

「あ、さつきロッカーに写真が貼ってあったけど。 あれって伊豆諸島？」

「ああ。 ラッピングロッカーな。 伊豆七島の名所が貼ってあるんだ。 これから行く小笠原は伊豆じゃないから無いけどな」

小笠原の写真はないという返事に眉が下がる村雨。

「なんだ。 無いの？ 残念」

「お楽しみ、だ」

「ちよつと荷物を見ててくれ。 と言ひ残し、男が一旦席を離れる。

(去年食べて美味かったからな。 薬味も効いてて……)



待合の出店で、朝食を購入する男。

「お、呼ばれたぞ、村雨。荷物持っていくぞ」

「え？ 列が出来てるけど、良いの？」

「700〜500番台は早いんだよ、特二等以上だから」

バックを背負って船に乗り込む。

「5※※号室だから……」

船員に案内され、カードキーを翳す。

扉を開け中に入る二人。

「へえ。思ったよりは……」

ベットの硬さを確認する村雨。些か燥いでいる様な其れを温かい目で見つめながら男がテレビをつける。テレビがついたことに気づいた村雨。

「何何。何見るの？」

「決まってる。救命胴衣の付け方」

「え〜？ 毎年来てるんでしょ？ 知ってるんじゃないの？」

「こういうのは心構えもあるからな」

「ふくん、じゃ私も見た方が良いよね」

そう言つて提督の隣に腰掛ける。

「ん？ 村雨は艦娘だから……。おい、近い。当たつてる」

「ええ。何が当たつてるの？ 村雨、よくわからなくい」

「解つててやつてるよな！」

クスクスと笑いながら拳一つ分離れる村雨。

「軽い悪巫山戯じゃない。あ、それとも、村雨に欲情しちゃつた？」

「馬鹿言つてんじやない。見るならしつかりと見なさい」

「はーい」

暫くして救命胴衣と船内の避難経路の説明を見終える。

「そろそろ出航か。外に出るぞ」

「え？ なになに。何かあるの？」

「運が良ければな」

外に出た二人が甲板に近寄ると、ツアー参加者達が下に向かつて手を振っていた。

「何だろね、お父さん」

「ん？ 多分……。あれだろな」

「なに？」

「行ってみればわかるよ」

ツアー参加者の隙間から村雨が下を覗く。

「なんか変なのが手振ってる」

男も手摺の隙間から覗き込む。

「お。キャプテンたちばなじやなくて、おがじろうがいたか。運が良いな、村雨。小笠原のキャラクターだ」

「へえ。おがじろうっていうの？ こっちだとあんな着ぐるみも有るんだね。……。ちよつと可愛いかも」

「……。まあ円らかな眼とか愛嬌ある顔だよな」

村雨の感性がちよつとわからなくなる男であった。

夕方——夕日が水平線に沈むのを甲板から見ながら半日を振り返る二人。

朝食代わりに購入した寿司に村雨が嵌った事。

レインボーブリッジをくぐり抜けた時の村雨の燥ぎ振り、羽田空港から飛び立つ旅客機を見て軍用機と勘違いしたあと、民間機となかなか信じず、タブレットで検索し納得した後は、外国にもわずかな時間で気軽に旅行できるこちらが羨ましいと語りしんみりとしてしまった事。村雨が展望ラウンジで早速カクテルを注文したのを慌てて自分が村雨に注文する様に頼んだと言い繕いスタツフに未成年者に注文させない様に。と注意された事——カクテルは個室に持ち帰り、村雨が美味しそうに飲み干しました。

村雨が肩を寄せ、

「今日は面白かったね、お父さん。……連れて来てくれてありがとう憲広」

その小さく、男の耳に微かに聞こえた後半部分に笑みを浮かべる。ワシワシと村雨の髪を乱暴に撫で。

「もう、髪が乱れちゃうじゃない」

そう言いながら消えゆく夕陽を見つめる村雨。日が沈み切ると

「行こう。お父さん」

そう弾む足取りで先頭に立ち船内に戻る村雨の表情は髪に隠れて見えなかった。

7月25日——旅行第2日目 前編——

とある船室では、夜明け前から騒動が起こっていた。

「村雨。落ち着いて深呼吸してくれないか？」

村雨が胸元を掛け布団で隠しながら後ずさって行く。

「提督……。信じてたのに」

俯きながら震える声で裸身を男から離していく。

「ちよつと待て、本当に覚えがない。何で……何がどうなつて同衾していたんだ……」

男が昨夜を振り返る。

確か……。夕食を摂つて、部屋で小笠原レモンを使ったチューハイを二人で飲んで……。村雨がシャワーを浴びると言つて部屋を出て……。その間にベッドに潜り込んで……。分からね、その後の記憶がない。いつ手を出したんだ？ 確かに柔らかさで目が覚めたが。

「……」

俯き肩を震わせる村雨に男が謝罪の言葉を口にしかけ——。

「……村雨、す」

クスクスと笑い声が漏れ聞こえる。

「……まさか、お前……。またか、またなのか」

「ごめんなさ〜い。だつてさ、昨日シャワー浴びて戻つて着たら提督ぐつすりなんでもん。こんな美少女と一緒になの」

「……だから上半身裸トッブレスの下着姿で潜り込んだつてか？ 村雨、服を着てちよつとここに来なさい」

男が出す剣呑さに村雨が素早く着替える。

「提督、御免なさい」

男の傍に近寄るも、男が手早く村雨を組み伏せる。

「いいか、あんまり異性を揶揄つているとどういう目に遭うか……。こういう目に遭うんだ」

馬乗りになつた提督に脚を広げられ頭の後ろで両手を押さえつけられる村雨。

「村雨、お前駆逐艦にしては良い身体だよな。そのボタンが弾け飛びそうな胸も、折れそうな華奢な腰も、むしろぶり付きたくなる尻も、男を誘つてやまない。お前はそれに無頓着すぎる。いや、それを承知で誘つていたんだよな。答えてやるよ」

激しく首を振るも次第に自分の胸元に近づく男の手への恐怖と男の欲情に火をつけてしまった後悔で硬く目を瞑る。

「ごひゃご」

自身の片方の頬を引っ張られる痛みには思わず目を開く。胸元に延びていた手は自身の頬を抓り上げていた。

「何てな。村雨、これに懲りたら二度と揶揄うのは止めるよ?」

目に涙を浮かべ頷く村雨。

「全く。何でこんな風になったのやら。初めの頃は随分警戒していたから寧ろ安心して  
いたのに」

「……提督が悪いんですよ」

微かな声は男の耳には届かなかつた。

ギクシヤクとした時間もあつたが、朝食を摂る頃には関係も今まで通りになり、和気藹々と第4層の食堂へ二人で出かける。

「お、お父さんはパン? それともご飯?」

「ん。……今朝はご飯かな。だし巻き卵……はないから、厚焼き卵か。それと真薯と味噌汁に、海苔と言ったところか。先代の頃はパンだったんだが。クロワッサンも手作りプリンも美味かつたからな」

「へえ。それも食べて見たかつたな」

「んで村雨は、パン派か?」

品物を受け取り精算を済ませる。

「うん。鎮守府でもパンなんだ」

「へえ。艦娘も色々好みが違うんだな」

「うん。だから私達だけじゃなくて、暁ちゃんや朧ちゃんたちとも触れ合つて欲しいかな。つて。あの娘達、あんまり提督と話ができないって詰まんなそうにしてるから」

「うーん。善処はしてみるが……。良いのか？」

「私は改二にまでして貰つたしね。でも、指輪が貰えるならもつと嬉しいかな」

「ま、それはおいしい、な」

食べ終わると二人で席を離れる。

9時も半ばを過ぎると前方に弟島が見えてくる。

甲板で村雨と写真を撮っていた男が村雨の肩越しに指差す。

「弟島が見えて来たからそろそろ荷物纏めて下船の準備だ」

「え？ もう？」

「10時過ぎたら下船口は一杯になるからな」

「うわー。荷物一杯」

「まだ少ない方だな。もう少し経つてたら階段の方まで並んでた筈だ。まだピークじゃないからかな？」



「え？ 後ろの方までいるのに？」

「後少しかな」

男が時計を確認すると、乗員の手で下船口が開かれる。

早速外を覗く村雨。

「わあ。いかにも南国って感じ」

外の流れる景色に燥ぐ村雨。

「あれは西島だな。……となると、もうすぐか」

「そうなの？ 何だかワクワクしちゃうな」

それから30分程経ち、船が着岸し下船が開始された。

「とくちやくく」

「コラ。ちゃんとマットの上を歩きなさい。大切な事だからな」

「いつけない」

村雨が戻ってマットに靴底を浸す。外来種を持ち込まない為にブラシで泥を落とし、海水に靴底を浸す事で種子の発芽を抑える。自然を守るには重要な事だが、世界遺産登録当初は『靴が濡れるの嫌』という人がマットを避ける事も多かった。最近は避ける人が少なくなったらしいが。

二人で宿からの迎えを探し程なく見つける。宿の看板の下に行き、名前を確認してもらう。

問題なく済んだということは、無事書き換えと振込が終わっているという事で、大淀に改めて感謝する二人。

チツキで預けた荷物を受け取ると

「ではお荷物を持ってこちらの車へ」

と案内される。

宿に案内され、部屋に入る。

ベッドと水回りを確認し、荷解き。

「ねえ、提……憲広」

「どうした？ いきなり」

「ん。今更だけど私達ってどう見えるのかなって。どう見ても親子には見えないと思うんだ、私達」

「そうだろうね。訳ありとは思われていそうだ。……親子に見えないなら」

男が茶目つ気を出し、

「村雨の私服姿は大人びているから年の差婚か。位には思われるかもな。詮索はされないだろうけど」

村雨を揶揄う。

「年の差夫婦か。……良いかも」

「ん？ 何か言ったか？」

「別々にい」

「ま、子連れ結婚の親子って見られるのが現実的だけだな」

「……詰まんないの」

宿の送迎車で街中に出て昼食をとる二人。

「も、憲広。どこに行くの」

「村雨、お前、急に大胆になったな」

腕を絡めてくる村雨を見て若干戸惑う。

「良いじゃない。どっちにみられても。本土の知り合い居ないでしょ？」

「まあ、今更だしな」

「それで、憲広さんは、村雨をどうエスコートしてくれるのかな？」

「……駆逐艦をエスコートする提督か」

「私じゃご不満？」

「いえいえ。……まあ、まずはコーヒー買えるか確認かな？」

「え？ いきなりお土産？ 気が早くない？」

「ボニンコーヒーは人気だから、ここ10年一度も買えないんだ。……この時期、買えるといいんだが」

ボニンコーヒーを取り扱う店に入るとコーヒーの在庫を確認するが、やはり品切れであり、9月過ぎの販売になるという事であった。

「残念。私は飲めないのか、コーヒー。種は買って貰ったけど、育つかわからないし。残念だなあ」

「ん？ 飲めないなんて言っていないぞ。これから軽く腹ごしらえする喫茶店で飲めるから」

「そうなの？ 良かった。じゃ、行こ行こ。早く」

男の腕を引いて行く村雨の姿に道行く人からは、温かい視線が投じられていた。

「ここ？ ハートロックってお父さんがいつも泊まってる宿でしょ？ ここにあるの？」

「言わなかったか？ 喫茶店と土産屋も併設されているって。というわけで、喫茶店で腹ごしらえだ。村雨、何か食べたいものあるか？」

「えっと、良く分からないからお任せ」

「なら……。あ、新製品出てるのか。なら、このスパイシーサメバーガーと普通のサメ

バーガーと小笠原コーヒーを二つ」

「え？ サメ？ 鮫って食べると臭いよね？ 食べて大丈夫なの？ 後、ボンコーヒーと小笠原コーヒーって違うの？」

「ああ、こここのサメはオナガザメを使ってるからね。臭みなんてないから美味しいよ。淡泊な味だしどちらかという和白身魚系かな。後コーヒーは同じものだよ。ボニンは小笠原を現した辰巳無人島の無人からなまったものだから。お。来た来た」

食べ終えた二人が次に向かうのは。

「うわあ。急な階段。全部で何段だろ」

「数えてみるか？ お詣りするしな」

「よし。数えてみるね。1、2、3、……」

途中の踊り場に差し掛かった時、男が村雨の肩を掴む。

「きゃ！ なに？」

「しつ 静かに。……アカガシラカラスバトだ」

「え？ あの前にいる鳥？」

「そう。カメラカメラ。……村雨も撮っておいたらどうだ？」

「あ、羽根を広げてる。日向ぼっこかな？」

二人で暫く眺めていると、突然羽ばたき頭上を飛びすぎる。

「うわっ」

「きゃっ」

二人が振り返ると枝に止まっているアカガシラカラスバト。

ビックリしたと二人で顔を見合わせクスクスと笑い合い――。

「あ、今何段だっけ。忘れちゃた。数え直し？」

「ほら行くぞ」

「あ、待ってよ」

無事お詣りを済ませ階段を下り、ビクターセンターにアカガシラカラスバトの目撃を報告するかと考えていた男の耳に微かな音が聞こえてきた。隣を見ると村雨が頬を染

めている。

「なんか食べに行くか。ハンバーガーだけじゃ腹減るしな」  
「うん」

腕にしがみつく村雨であった。

## 7月25日——旅行第2日目 後編——

「アハハだ、アハハ」

「アハハって……。何だか高価そう」

暖簾が掛かった小料理屋風の構えを見た村雨。

「値段相応かな。来る度に入っているから大体の値段はわかる。だから安心しなさい」

「はい。じゃ、入ろ」

店に入りカウンターへ。

メニューを渡されるも、さっさと決める男。

「えつと、島寿司と亀玉と亀刺し……。後は、アカバの姿揚げと味噌汁を二人分。あ、ス  
ターフルーツも二人分で」

少々お待ちくださいと待つ事暫し。

「亀って食べられたの？」

そんな村雨の疑問に店主が亀料理について説明する。

亀料理の歴史、島の煮込み料理などの食文化、捕鯨が禁止された時に亀食も禁止とな  
り小笠原が世界遺産に指定された時に亀料理が問題になった事、亀の保護活動も盛んで



あったことから食文化として問題なしとなった事——。

店主の説明を聞きながら男がふと後ろに視線を投げると、小笠原を扱った番組の海洋センターの保護活動の場面が放映されていた。

店主が、

「保護動物程、美味しいんですよ。カメ美味しいでしょ」

と冗談を飛ばし、居合わせた客が数名、男も含め苦笑する。

「うん。この亀の玉子って、濃くって美味しいね」

村雨は玉子を気に入った様子で、もう一皿追加していた。

島寿司を食べ終えていた男に、店主が

「お客さん、ずいぶん長くいましたね」

と声をかける。

「え？ 今日来たばかりですよ。次の便で帰る予定です」

「あれ、去年もいたよね」

「ええ。いつもは9月なんですけどね」

「ああ、だからずつといたように見えたのか。あれ？ 今回は一人じゃないの？」

「ええ。これと一緒です」

「お、隅に置けないね、こんな綺麗な娘さん捕まえたのか」

「アハハ」

店主の軽口に苦笑する男。その隣で顔を赤くしている村雨に、店主から二言三言声がかかる。

「デザートのスターフルーツを食べ終え、店を後にする。」

「んー満足満足」

軽く伸びをして周囲を素早く見回す村雨。誰もいないことを確認し男に腕を絡める。

「ね、憲広。次はどこ行くの?」

「ん? ビジターセンターに行くよ? アカポツポ見つけたから報告しないとな」

「アカポツポ?」

首を傾げる村雨に、言い忘れていたかと男がアカガシラカラスバトの通称だと説明する。因みにアカガシラカラスバトの若鳥はクロポツポと呼ばれている。

「え? 報告義務あるの?」

「義務じゃない。報告された情報を元にデータベース作っているらしいからな、協力しないとね」

「じゃ、行きましよ行きましよ」

村雨に腕を取られながらビジターセンターに向かっていると、内地に比べて随分涼しいと感じる。

先ほどの店でも言われたが、内地はサウナ状態で10分も歩けば汗でぐっしよりになるのに、ここではうつつすらとしか汗をかいていない。村雨も気付いていたらしく、

「思つてた以上に涼しいのね、小笠原つて。私たちの世界でも平和になつたら行けると良いな。作戦中でも良いけどね」

「いや、こんなに涼しいのは初めてかな。いつもはもつと暑かつたような気がする」

行幸記念の石碑と公園を過ぎ、建物が見えて来る。

「あ、こつちも良さそう」

そう言つて浜辺に歩みを進める村雨。

「おおい。水着着てたか？」

「着てないけど泳ぐわけじゃないし、良いじゃない」

「別に良いけど、俺はビジターセンターに行くから。後で砂を落としてきなさい、砂まみれだと入れないからな」

「そうなの？ じゃあ後で行こつと。良いよね」

「ん、良いよ」

村雨の頭に手を置く男。

「もう。また」

言葉とは裏腹にくすぐつたそんな表情の村雨が男の手を振り払うことはなかつた。

受付でアカポツポ——アカガシラカラスバトの目撃情報とその場所と時間を報告している間に村雨は小笠原の歴史を眺めていた。

「あ、山城さんだ」

模型に目を留める村雨。

「こっちは……天山と零式艦戦52型か。52型って此処にも来てたんだ」

「ふんふん。二式水戦に零式水上偵察機ね。水偵には皆よくお世話になってるね」

模型を見ながら歩みを進める村雨。

「あ、この辺は知ってるわね」

墜落した米軍の攻撃機や爆撃機の模型を見たり、開拓時代の住居や戦前の道具を見ていく村雨。教師の年収が約8000円、総理大臣の年収が約80000円の時代に戦前の島民の平均年粗収入が漁師で4500円以上、農家で7000円以上と比較的豊かであった事や疎開後は殆どが困窮し昭和28年には疎開した島民の85%が生活困難世帯になった事、戦後生まれた子供達も返還後に英語から日本語に言語が変わったことで言葉

に苦勞した事などを説明したパネルを読み進めるうちに村雨の目には、うつすらと涙が浮かんでいた。

「……ごめんなさい」

村雨の様子がおかしい事に気がついた男がそつと近寄る。

「どうした？」

浮かぶ涙をそつと拭い、肩に手を置き抱き寄せる。

「うん、何でもないの。ちよつとね」

「そうか」

頭をひと撫でし、そつと離れる男。

村雨は暫くその場に佇んでいた。

暫く返還50周年記念の写真展や島民が未だに帰島出来ていない硫黄島の戦前の写真パネル等を見て過ごし、建物を後にする。

目の前の砂浜に移動して並んで腰を下ろし見るともなしに海面を見つめる。

「さつきはごめんなさい。びつくりさせちゃって」

「気にすることはない。艦の記憶でも思い出したんだろ？」

無言で頷く村雨。

「何かの切っ掛けで、急に蘇って来るんだよね。山城さんと違って私はそんなに小笠原

には縁がないと思つただけどね」

「そうか。小笠原出身の乗員でもいたのかな」

「いてもおかしくはないのかな」

お互いに無言のまま時間が過ぎる。

「行く、と、憲広」

暫くして立ち上がり砂を払う村雨。手を伸ばし男を引つ張り上げる。

「……なあ、村雨。普通逆だよな。男の立場がないんだが？」

仏頂面で零す男に笑みを浮かべ

「良いじゃない。たまには。ね？」

そう言つて身体を翻す。

大通りの物産店を覗きながら買い物をする二人。序でに土産も買つておこうと土産物屋——MARUHIと隣のアサヒ薬局に立ち寄る。

「えつと、ラム酒ゼリーに、グアバジュース。バナナに、シャシャンポ？ あ、このパツクも良いかな。ビスケットに、グミに、塩は……いいか。那智さん達にはお酒が良いかな。……深海熟成ラム酒にゴールドラム酒？ どっちも5000円もするの？

もゴールドは10年物か……よし、買つちやお。金剛さん達は……あ、この返還50周年記念Tシャツ良いかも」

持ちきれぬのかと疑問に感じる量の土産を次々と買い漁る村雨。精算時に店員が隣の男に気の毒そうな視線を投げる。

「——円になります。2000円以上お買い上げなのでこちらのエコバッグをサービスでおつけします」

抱えきれない程の土産を購入した二人が人目につかないところに移動する。村雨が艤装を展開し装備のドラム缶に次々と土産物を投入して行く。

「……便利だな、このドラム缶。島から帰る時に俺の土産やトランクも入れてくれないかな」

「良いよ。ただ、私の分とは分けてね」

「おっと。買い忘れた。村雨、ちよつと先にB. I. T. C. ——Bonin Islands Trading Company——（小笠原生協）でカップ麺と缶詰選んで置いてくれ。台風ができてるらしいから念の為な」

そう言つて男が農協に行くとか村雨もBITCに向かう。

「えつと……カップ麺はこれかな。缶詰は……。SPAM？ これと、サバ味噌とイワシで良いか。……あ、デザートチーズがある。これも買っちゃお。お父さん、まだかな」  
肩が叩かれ振り向く村雨。

「待たせた。何買った？ ……もう2個くらい買つて置くか。余ったら船で食べても良

いしな。あ、飲み物忘れてたな。こいつも買っていないこう」

追加してカップ麺を購入し、歩いて宿に向かう。

戦前に掘られた清瀬隧道を抜けると水産センターの目の前に出る。

「寄ってくか？」

「何がいるの？」

「小笠原の海洋生物だな」

「亀とか？」

「亀は海洋センターだな」

「そっちの方が見たいかな」

「うくん。今回は厳しいかもな。台風次第だけど。明日は祭りに行く予定だしな。明後日には台風直撃らしいし。村雨だけで行ってくるか？」

「冗談？ 一人で行ってもつまらないもん。台風かあ。行けなかつたら仕方ないか」

水産センターを素通りし、一路宿に向かう。

「到着。あ、飲み物買って行くからちよつと待って」

鍵を受け取り部屋に戻る。

生協で購入したアルコールやタイやタイから輸入されたタピオカ入りのココナッツミルクドリンクやアメリカから輸入されたグアバ入り果汁飲料などを冷蔵庫に詰めて行く。



「村雨のアルコールも買ったし、夕食にアルコールは頼むなよ?」

「ええ。せつかくの旅行なのに」

「ダメ。見た目未成年には飲ませられません。船の中を思い出せ」

不満な表情をした村雨だったが、渋々納得する。

夕食時——宿のオーナーから思いがけない言葉が発せられる。

「台風が近づいている為、このまま行くと27日東京発の便が欠航する恐れが非常に大きいです。7月27日の便が欠航した場合ですが島が出るのが8月1日の便になります。欠航が決まり次第、島の防災無線から連絡がありますので聞き逃しのないようお願いいたします。それと延泊される方いらっしゃいますか?」

その言葉を受け、あちこちから質問の声と延泊希望の声が上がる。

「まいったな……。どうする?」

延泊の希望をした男が村雨に問いかける。

「どうにもならないよね、これ。……鎮守府には31日昼までに戻るように言われているけど。……どうしよう」

「俺は何とかなるけど、村雨は拙いか? 大淀達に連絡は……無理か」

頷き、微かに不安な表情を浮かべる村雨の頭を一撫でし、

「謝って済むものなら一緒に頭下げてやるから」

その言葉に困ったような笑顔を浮かべる村雨。

「うん。……気にしてても仕方ないよね。美味しいもの食べて、忘れちゃお」

(……どこぞのSFじゃないが問題は、期日を過ぎて帰ったら戻れなくなっていた。なんてなっていたらどうするか、だな)

夕食を済ませ、部屋に戻った二人

「林檎のコンフォート美味しかったね、憲広」

「うん。あれは美味かった」

「あっちでも間宮さんに作ってもらおうかな」

「まったりとした時間が過ぎ——。」

「そろそろ寝るか。村雨、どうする?」

「え? うん、……寝ようかな」

ベッドに潜り込む男の脇に入り込もうとする村雨。

「おい。朝言つたよな」

「……添い寝してほしいな、お父さん」

「……添い寝しないと眠れない年じゃないよな。今朝まで添い寝してなかったよな」

「ケチ」

「プイツと頬を膨らませ隣のベッドに潜り込む村雨。程無く寝息が聞こえてくる。」

ベッドから身を起こし、その寝顔を覗き込む。

「全く。綺麗な寝顔だよな。不安なんだろうが、添い寝なんかしたら理性が持たんわ。すぐに別れるんだから、そういう事は、な」

そう呟き、村雨の顔にかかる髪を梳くと自分のベッドに再び身を沈める男。

——直後に目を開けた村雨に気づく事はなく。

## 7月26日——旅行第3日目 前編——

朝——激しい雨音とともに目が覚める。

隣のベッドで寝ている村雨を起こさないようにカーテンの隙間から外を覗くと土砂降りの光景が飛び込んできた。

「あちやー。中止かな、これは」

男が呟き、ふと隣を見ると髪を解いた村雨がすやすやと枕を抱え横向きに眠っている。その顔にかかる髪をそつと梳くと、悪戯心を起こした男が携帯でその寝顔を写す。

保存した写真を見て、後で見せてやろうと満足げに頷くと、村雨を起こさないようにそつと部屋の玄関から外へ出る。

階段を降り、外へ出ると風も強く大粒の雨が降っている。

「台風の直撃は未だだったよな。これも台風の所為かな」

そんなことを呟きながら暫く空を見上げていると、人の気配が近づく。

「あ、憲広。お早う。起きたら部屋に居ないんだもん。どこ行っちゃったかと思った」

「ああ、村雨か。お早う。何、村雨が可愛い寝顔でぐっすり寝てたんでな、起こさないように出てきた」

「もう。そんなことばかり言つて。……やつぱり夕立が来なくて良かった」

そう呟くと傍の男と同じように空を見上げる。

雲が立ち込め雨が止む気配はない。

「お祭り中止かな？」

「どうだろうな。中止だとは思うんだが……」

二人で空を見上げ、

「戻るか。これ以上いると濡れ鼠になつちまう」

朝食は和食。

食後のコーヒーまで終えた二人が部屋に戻る。

「何時から開始だつて？」

「昨日M A R U H Iで聞いた時は9時開始だと」

「えっと、今が7時半だから、そろそろ着替えて準備しておかないとね」

「バスは8時13分だから、準備するか」

「じゃ、着替えてくるね。覗いちゃダメだからね」

「誰が娘の着替え、覗くか！ さつさと着替えて来い」

「はーい（未だ娘扱いか。でも、もうちよつとかな）」

村雨が着替えを持って浴室に入ると、男が溜息を吐く。

「全く。次から次へと。……いつまで持つかな」

浴室からノックの音が聞こえる。

「どうした？ 何かあつたか？」

そう問いかけると、中に入つて。と促す声。疑問に思いながらも扉を開けると

「じゃ〜ん。本邦初公開。村雨の生水着姿だよ……つて、無言でドア閉めないで」

羽織つていたバスタオルを広げながら宣う村雨に頭痛を覚え無言でドアを閉める男。

「痛い。村雨、お前はいつからアホの娘になつたんだ？ それとも俺の理性をガリガ

リ削つて楽しんでるのか？」

「えー。だつて最後は海に入るんでしょ？ だつたら最初から水着を着ておこうか

なつて。ダメ？」

「まあ良いか。早く着替えてな。俺も着替えるんだから」

「じゃあゆつくり着替えようかな？」

「ここで着替えてやる……」

「ヤバつ。間に合うか？」

時間間際になり階段を駆け下りる二人の姿があつた。

7月26日——旅行第3日目 中編——

バスに滑り込んだ二人。

「ねえ、ほんとにこの雨止むのかな？」

雨に濡れた身体を拭きながら村雨が傍らの男に問いかける。

「どうだろうなあ」

そんな会話に乗り合わせた島の人達から声が掛かる。

「お二人さん、観光客？」

「ええ。貞頼祭の見物に行こうかと」

「ああ、いいねえ。でもこの雨だもんねえ。中止の放送はないからやるとは思うけどね」

「大丈夫よ。貞頼さんの時は絶対雨止むから」

「とにかく行ってみればわかるわよ、私たちも行くんだから」

バスが境浦に差し掛かると雨の勢いが弱まり、扇浦への最後のトンネルを抜けるとすっかりと小ぶりになっていた。

「ほらね」

やがてバスが扇浦に止まり、乗り合わせた人たちが次々と降りていく。

「ここからどうするの?」

周囲を見回し村雨が問いかける。

「ん? 9時からか……。今が8時半だから、ちよつとあるなあ」

そう言いながら男が小笠原神社への参道を眺めていると、三々五々法被を着ている関係者がテントや神輿を神社へと運び上げていく。

「先に神社にお参りするか」

二人で神社へ詣でる。

「この細い葉っぱ、滑るね」

村雨が参道に溜まっている細長い葉を指さす。

「ん? ああ、モクマオウか。トクサバモクマオウだったかな? 葉っぱが分解されにくいから、結構積もるんだよな。ほら、海岸のあれもそうだし」

「あ、ほんとだ。あんな所にあつて枯れないの?」

「聞いた話だと、あの木は塩やシロアリにも強いらしいよ。腐りにくいし、成長が早いって戦前に薪にするために植えたらしいんだけどね」

「そつか。今じゃ薪なんてそんなに使わないから、増える一方なんだ」

「そう言う事。伐採もあちこちでやってるらしいけど、住宅街じゃやってないんだと。」



あ、ここで去年はアカポツポ見たんだよな」

「今年はいないのね。人も多いから隠れちゃったのかな？」

そんなことを話しながら、開拓の碑を見て男が村雨に読めるか問いかけたり、島バナナの木の説明文を読んだりしているうちに境内へと差し掛かる。

「あ、結構集まつてるね」

「へえ、初めてここが開いてるの見たなあ。んじやお参りしますか」

二礼二拍一礼でお参りをすると、次第に関係者と思しき人々が参拝に訪れて来た。

「もう始まるみたいね」

「そうらしい。ちよつと待つてるか。しつかし……本当に晴れてきたなあ」

空を見ると雲の間から太陽が顔を覗かせている。

「本当に晴れてきた」

9時も過ぎると制服を着た海上自衛隊員や警察関係者、村の関係者も参列し、修祓と祝詞があげられ玉串奉奠とお囃子の奉納が行われる。

お囃子も終わると観光客も一緒に礼拝した後に直会の御神酒を振る舞われる。自分の後方からちやつかり列に並ぶ村雨を確認し、苦笑を隠せない男。

「成人して……いる、よね？」

お神酒を手渡す前に年齢を確認されるも、  
「はい。一月前になりました」

と村雨が笑顔で答えると、盃が渡される。  
盃を傾け返すと男の隣に戻る。

「……お前なあ」

「ええ。良いじゃない。お祭りなんだし、縁起物でしょ？それに私、艦娘だし。竣工して  
20年なんてとつくに過ぎてるもん」

最後の方は男の耳元で秘かに囁く。

「あ、お二人さん、来てたんだね。相変わらず熱いねえ」

土産物を購入した序でに祭りの詳細を教わった店——MARUHIの店主が二人を  
見つけ、男の背をバシバシと叩く。

「アンタら、あちこちで噂になってるよ」

妙な事を言われたとばかりに男が目を瞬かせる。

「アンタ、いつも九月頃一人で来てたのに、いつもと違う時期にこんな可愛い娘と一緒に  
来てるからね」

店主の続きにそう言う事かと納得するも、有名人でもない只のおっさんがそんなに覺  
えられているものかと疑問に感じる男。

「アンタ、もう十何年も同じ時期に来てるだろ、その帽子姿で。そりゃ覚えられさ。セ  
ンターの子とあそことあそこの店主が話題にしてたよ。未だ店に行つてないんだろ？  
後で行つておやり」

来島する度に通つている店の名前をあげる店主。そう言われれば今回は未だ行つて  
なかつたなと気が付き、後で行きますか。と男が呟く。

「じゃあ、楽しんでおいで」

そう言い残し、店主が笑顔で立ち去る。

「始まるみたいよ、お神輿」

村雨のその声に振り返ると、揃いの法被を着た担ぎ手の他に背広や制服姿の関係者も  
一緒に神輿を担ぎあげている。

掛け声とともに坂道を降り、声が遠ざかる。

「あれ？ 行かなくて良いの？」

動かない男に疑問を抱き振り返る村雨。

「御朱印頂いてからな」

そう言う男は御朱印帳を掲げる。

「あ、そうか。そつちもあつたわね」

「そ。ここの御朱印は年一日しか頂けないからな。今日だけなんだ」

「へえ。今日だけなんだ。貴重なのね」

暫く後に御朱印を頂き、神社を後にする。

海岸のレストハウスでは神輿が二基、白や赤と言った島の草花で裝飾され、いかにも南国を思わせる飾り付けになっていた。

「うわゝ綺麗」

そう歓声を上げ、村雨が神輿に近付く。

飾り付けを奨められ、早速飾り付けをしている人たちに交じって楽しそうに花々を神輿に飾りつける村雨。

「良いお嬢さんじゃないか」

そんな楽し気な村雨を見ている男に声が掛けられる。

「あ、お久しぶりです」

声の主は何時も参加しているツアーの船長。その姿を見て挨拶を交わすも、ふと思  
う。

「あれ？ 船長、台風養生は？」

「ん？ これからやるよ。毎年貞頼さんには顔を出すんだが、見たことのあるでかい身体があつたんでな」

男に手を振る村雨を見て

「何だ？ ついに新婚旅行もここか？」

「アハハ、だつたらいいんですけどね」

「違うのか？ 傍から見るととても違ふとは見えんが。……まさか」

男を軽くにらむ。

「浮気や遊びはいかんぞ？ そういう奴は俺の船には金輪際乗せん」

「手も出してないので浮気や遊びでもないんですけどね。知り合いの娘ですよ」

「ほんとか？ 只の知り合いというには随分親しげだな。……訳アリか？」

「まあ……。ちよつと」

言葉を濁す男に

「色々ありそうだが、部外者からは何とも言えん。ただ、悔いのないようにな」

ポンポンと男の肩を叩くと、

「ほれ、煮込みだ。お嬢さんと食べろ」

そう言つて亀の煮込みを二椀差し出す。

「しつかりやれよ」

「そう言い残しあいさつ回りに出かける船長。

「あく楽しかった。あれ？ それなに？」

「ん？ ホレ、亀の煮込み。食べるだろ」

「うん。もちろん。……えつと」

箸を取ったものの、その見た目から躊躇する村雨に煮込みをかき込んでいる男が映る。

恐る恐る箸を伸ばし口に入れる村雨。

「あ、美味し」

「うん。美味いよな。この祭りの亀の煮込みが一番美味いって農協で聞いたけど、たしかに美味いわ、これ」

亀の煮込みは生臭いと思っていた男。だが、この煮込みはどう処理しているのか臭みが全く消え、牛や豚とは違ったモツの弾力と旨味が引き立っている。

「……ちよつと行つてくる」

「あ、私も」

レストハウス横の配布所に並ぶ二人であつた。

「関係者集まれ」

そんな声とともに関係者が集まり、神輿が担がれる。

ドッコイ ドッコイ ドッコイ ドッコイ

掛け声とともに坂道を進む神輿。

坂道の途中から扇浦でも比較的新しい建物が並ぶ地区に入る。

あちこちの建物から水が掛かる。

「すごいね、水があちこちから撒かれてる」

そんな風に神輿の後ろを他の観光客と一緒に歩いて行く二人。

時々観光客が神輿の担ぎ手に引つ張られる。

笑つてみていた二人だったが――。

「ちよいとアンタ、入りなさいよ、荷物は持つててあげるから」

そんな言葉と共に神輿の担ぎ手に引つ張り込まれる男。

ずつしりと肩に重みが押し掛かる。

（思つてた以上に重い……）

数10mも進む内に、誰か交代してくれないかと周囲を見回す男に笑顔で囁し立てる

村雨がうつる。

（もうちよつと頑張るか……）

水が彼方此方から掛かり、神輿が揺さぶられる。

ドッコイ ドッコイ ドッコイ ドッコイ

(肩が痛い……)

「ホレ、もうちよつと。頑張れ」

関係者から声が掛けられる。

それから暫く後、休憩となり――。

へトへトになり、座り込む男に

「お疲れさま。よく頑張りました」

村雨が男の首筋に缶ビールを当てる。

「お、ありがとう。これは？」

「みんなに配ってるから、貰って来たの」

村雨も手に持った缶ビールを開け二人で飲み干す。

「途中から前に入ってきたおっさん、もうちよつと頑張つて欲しいよね」

そんな声が聞こえてくる。

顔を上げると、男の前後で担いでいた10代後半から20代前半と思われる女性グループだった。



「そうそう。背丈が違うからって腰曲げちゃってさ。あれじゃ力入らねえっての」

「まあ、あつちの外国人も同じだけどね。あつちはイケメンだから許しちゃう」

そんな言葉を最後に笑い声があがる。

「……ちよつと一言言つてくるね」

そんな村雨を留める男。

「仕方ないわな、実際ヘトヘトだしな」

「でも」

そんな二人に法被を纏った関係者から声が掛かる。

「おお、ご苦労さん。よく頑張ったな。ちと頑張り過ぎたんじゃないか？ 明日は筋肉

痛だぞ。頑張ったのは、コレか」

そう言つて小指を立てる。

「いや、20年ぶりに担ぎましたよ。良い経験でしたけど、肩痛いですね」

苦笑する男。

「そりや疲れたろ。これでも飲みな。アンタも」

そう言つてビール缶を手渡し立ち去る。その先には同じように神輿を担いでいた観

光客の姿。

「村雨、今度は担いでみたら？」

「うん。そうしてみる。……あの子たちに目にも見せてやるんだから」  
「ほどほどにな」

休憩も終わり休憩場所を提供した宿のオーナーに礼を述べ神輿が再び担がれる。

「村雨は……あ、いたいた」

先程の女性達の間で担ぐ姿があつた。

ドッコイ ドッコイ ドッコイ ドッコイ

威勢のいい掛け声上がる。

坂道を下り、上り坂に差し掛かる。

何度か神輿が揺らされる。

「さつきより勢いがあるね」

観光客やカメラマンから声上がる。

「うん、右のほうが揺れ幅があるかな？」

（……村雨、頑張ってるな）

周囲の声を聞きながら村雨の姿を探す男。

そこには若干肩を浮かしながら、腕だけで神輿を揺らす姿が。

「ちよ！ なに？ この娘、すごい」

「嘘、持てな！」

「なんなの」

一緒に神輿を担いでいる外国人観光客の肩に合わせ腕を上下する度に周囲の担ぎ手が引つ張られる。

「おっと、この動きについて行けるのか、お嬢さん。おい手前ら！ 負けんじゃねえぞ」  
おうつと男衆から声上がる。

ドッコイ ドッコイ ドッコイ ドッコイ

掛け声にも力が入り、一段と揺れが大きくなる。

「もうダメ……」

「あゝついていけない」

そんな声とともに女性たちが手を放し、担ぎ手が代わっていく。

「ほらほら、あんたも入りなさい」

男も村雨の後ろに引つ張られる。

後ろを振り返り微笑む村雨。

「ほらほら、一緒に、ね」

ドッコイ ドッコイ ドッコイ ドッコイ

周囲の建物から水を浴び、神輿は坂を下り海辺に出る。

水をたつぷりと浴び、神輿の担ぎ手の服はびったりと体に張り付いている。

再びの休憩があり、二人でビールを飲んでると法被を纏った関係者から声が掛かる。

「二人とも頑張ってるねえ。どうだい、二人で参加した感想は？」

そんな問いかけに村雨が

「え？ やっぱり二人で担げるって良いですね。これからも一緒に担ごうね、ね？」

そう言うのと男の腕にしがみつくと村雨。

そんな姿に周囲から冷やかしの声が飛ぶ。

やがて扇浦のレストハウスに神輿が戻る。

「ここで一旦昼食にしまゝす」

そんな声と共に神輿が下ろされ、ビールやスポーツドリンク、麦茶や亀煮・赤飯等が振る舞われる。

「は〜い。亀の放流会はこっちです」

そんな声が聞こえ、村雨が

「ちよつと行つてくるね」

と浜辺に降りる。

男が亀煮を片手に浜辺の様子を見てると、

「あれも20年後にはこうなるんだよなあ」

といった声が傍らで起こる。声のした方を向くと亀の煮込みを持った男性が笑いな

がら浜辺を見ている。

「子ガメが放されて20年回って産卵する。そして亀漁で捕まっってこうなっって俺たちに美味しく食べられる。孵化した子ガメはまた放されて。と、美味しいサイクルだな」

その声を受け周囲で苦笑が広がる。

次第に雨がぼつりぼつりと落ちてくる。

亀の放流会が終わる頃には雨脚が次第に激しくなっていた。

「まいったな。もう傘いらな思っただが……」

次第に激しくなっってくる雨に、神輿はと見ると人が再度集まり、反対方面へと担がれ進む。

「今回は担げないなあ」

とバックの御朱印帳を濡らさないように傘を開く男。

「うくん。私も良いかな。あ、私も入れて」

と村雨が男に寄り添う。

「傘あるよな」

「良いじゃない。そんな気分なんだもん」

「はいはい」

神輿を見送る二人。

「あれ？ お二人さん、休憩？」

お囃子を担当していた関係者が声をかける。

「ええ。これがあるもんで」

と御朱印帳を掲げる。

「ああ、それは濡らせないね。まだ亀煮あるから食べてなよ。後は神輿の海入りだけだし。見ていく？」

「できれば、見たいですね。バスの時間は……14時13分か。ちよつと厳しいかな？」  
「うーん。台風も来てるしね。店とか閉まつちやうから、二人もお土産とか早く買つていた方がよいね。ま、ぎりぎりまで待つてなよ」

そんな声を最後に、お囃子も神輿の方へ出かけていく。

どうしようかと雨を避けレストハウスに避難していると村内放送が入る。

欠航確実と思われたおがさわら丸が、引き返す可能性もあるという条件付きながら出航する予定との事だった。

耳を澄ませ放送を聞いていた村民から、「まじか、よくその決定出たな」とか「いや、途中で引き返すだろ」といった声がかかる。

「どうかな？ 来ると思う？」

「台風が今の進路だと。途中で引き返すか、良くて1日は遅れるんだろうな」

「そうだよね。……31日に間に合うかな？」

微かに不安そうな表情をする村雨の頭を軽く男が撫でる。

暫くすると、神輿が返ってくる。

「子ども神輿が最初か」

子ども神輿は浜辺に近付くと浜の方に向きを変える。

「お、海に入るかな？」

「行(っ)行(っ)」

二人が浜辺に降りると、神輿が海に向かって進む途中であった。

「うわあ。すごいね。ほんとに海に入るんだ」

カメラに収める二人。

「うん、鎮守府に戻ったらみんなに見せなくちゃ。……あつちでもできるかな？」

呟く村雨の頭を一撫でし、

「さて、大人の方は……」

と振り返る男。

「止まってるね」

「ああ。止まったな」

時計を見ると、バスが来る時刻。

「うくん。時間切れかな」

「うくん、残念。また来年かあ」

そう海と神輿を見遣り2人がバス停に急ぐ。

「それにしてもひどい雨」

「全く。祭りが終わりに近づくと雨が激しくなるって、  
天気が良かったのは貞頼さんの  
神通力かね」

バスに乗り込み、そう祭りを振り返る二人であった。

「このまま宿に帰るの?」

「いや、買い忘れがあるから、青灯台あおとうまでね」

「は〜い」

バスの窓から外を見ると激しく雨が打ち付けていた。



7月26日——旅行第3日目 後編——

「次は青灯台あおとう前まへ。停とまりまます」

アナウンスと共にバスが止まる。

「到着つと。どこ行くの？」

「ん？ いや、髭剃り壊れたからね、T字の四枚刃買っておかないと、熊五郎になっちゃう」

「なくんだ。それだけ？ だったら宿で待っても良かったかな？」

「がっかりと言った表情な村雨。」

「村雨が一緒だからな、どこか……ああ、まだ3時前だから、何か軽く食べるか？」

村雨の表情が明るくなり、

「ケーキ！」

「ケーキ？ ん、わかった（TOMATONかハートロックかHALEだな。……島バナナのケーキあるのはハートロックだが、あれとTOMATONは出航日のお楽しみにしておくか）」

ケーキ♪ ケーキ♪ とご機嫌な村雨と一緒に買い物を済ませる。

「明日の台風は大きいって話だから……飲み物ももう少し買っておくか」

生協でネタとして Dr Pepper チェリーや A/W クリームソーダを購入していく。

精算を済ませ、向かいのスーパーへ。

「うおっと。混んでるなあ。買い出しと重なったか。良いや、次行こ」

列を見て、どうするの？ という村雨の視線を感じ買い物を諦める男。特に目的があつたわけではないのであつさり諦める。

向かいのアサヒ薬局に入り、四枚刃の T 字カミソリを購入。

「後は……あ、農協行こう。あれ食べるの忘れてた」

「あれって？」

「ついでのお楽しみ」

ほどなく農協に到着した二人。男がさつそく注文する。

「塩ソフトクリーム二つ」

「コーンですか、カップですか」

「コーンで」

出されたソフトクリームを舐めながら、買い物散策。

「このソフトクリーム、味が濃いね」

「ああ。上に掛かっている島塩で余計にそう感じるのかもしれないけど、濃いと思うな」  
「それで、買い物終わったの？」

「あ、土産で買い忘れてたのがあるからちよつと引き返す」  
「もう、慌て者」

農協へ引き返し、塩やジャムやカートを買ひ込む男。去年は無かつたオガスコ——タバスコ風味調味料や一時期人気となつた薬膳島辣油も買ひ込む。

「からいつすやからいつしよは良いか。村雨、買う？」

「買ったよ、それ」

「んじやいいか。後は……島バナナかな」

「そんなに買つちやつて……持つてくの、あつ、まさか」

何かに気が付いた村雨。仕方ないなあという態で買ひ物に付きあう。

精算を済ませると、物陰で艤装を展開する村雨。

「やつぱりこうなるのよね……。まあ良いけど、まだまだ余裕あるし」

男が購入した土産品を村雨のドラム缶に詰め込む。

「終わつたら行きましよ、ケーキ」

艤装を収納する村雨。

「はいよ。んじや行くか」

青灯台近くのH A L Eに立ち寄り、自慢の島のフルーツを使ったチーズケーキや島蜂蜜をかけた自家製ヨーグルトを堪能する2人。

「ここも変わったよなあ」

「そうなの？」

「ああ。昔は確か空き地だったんだよな。車が止まっていたりしたけど」

「何時頃の話？」

「確か……日食の時はあったような気がするんだよな。だから2008年頃かな？」

日食が2009年だったから。あの時はドコモ以外携帯が通じなくて大騒ぎだったな。

ドコモユーザーだから他人事で面白かったけど」

「もう、そんなこと言わないの、偽悪趣味なんだから。今はどこの携帯も通じるの？」

「2012年からドコモ、au、ソフトバンクは通じているな。……あ、思い出した、此

処出来たの2012年だ。震災の年にはこの店寄った覚えなかった」

「昔から来ているとそういう違いも判るのね」

「ああ、結構違う所が……そう言えばパパブツシユの植えたノヤシも枯れてたんだ」

「パパブツシユって誰？」

「米国の第41代大統領。第43代大統領がその息子でその名前もブツシユだから、親はパパブツシユ。来島した2002年に植えたらしいんだけどね、2012年には枯れ

てた。今じゃ跡形もなくなって他の木が植えられているな」

「あらま」

「2008年に撮った写真あるけど、帰ったら見るか？ そのこのペリーの石碑の脇にあつたんだ。幕に覆われていたんだよな」

「見せて！」

そんな取り留めのない雑談をしているうちに明るくなっていた空模様が再び悪化する。

支払いを終えた二人がバスを待っていると、ぽつりぽつりと降り出してくる。

「あ、ヤバッ。バスいつだっけ？」

「あと5分くらいね」

「ん〜。持つかなあ……」

バスに乗り込むのと同時に激しい雨が降り出す。

「——まで」

男が二人分の料金を入れ宿の名前を告げるとバスが走り出す。

清瀬交差点以降はバスに行き先を告げるとトンネル出口等の危険地域以外は停まって貰える。

交差点を過ぎ宿の前でバスが停まる。

「うわゝ。土砂降り」

傘をさす時間も惜しみ駆け出し、宿の受付に。

傘を返すと部屋に駆け込む。

「うわゝ。水着までぐつちより。着替えて来るね」

そう言うのと村雨は着替えをもつて浴室に入る。

「こりゃいかんな。俺も着替えるか」

男も室内で着替えかけ、村雨に声をかける。

「村雨、俺も着替えるから出るときは教えてな」

変な事故を防ぎ手早く着替えたところに村雨から声が掛かる。

「出ていい?」

「良いよ」

男の答えに扉を開ける村雨だったが顔を覗かせるだけで出ようとしな。

「どうした?」

「うん。……ボタン取れちゃった。着替え取りたいから、ちよつと外に行ってもらえる

?」

「とつてきてやろうか?」

「え? だ、ダメ。見ないでよ?」

「ハイハイ。外に出てるな」

男が苦笑いして外に出る。

「飲み物買つてくるから、何か飲むか？」

「ごめんね。飲み物はお任せ」

階段を降り適当な飲み物を買つて、扉をノックする。

「入つても良いか？」

「良いよ」

中に入ると村雨は別の服に着替え、ボタンを取り付けていた。

「おや。ソーイングセットなんか持ち歩いてるのか」

「当然でしょ？ 持ち歩かない娘なんかいるの？」

どうだろうね。と言つたやり取りから鎮守府の雪風や時津風が私服をよく破き陽炎が縫直している事や扶桑や山城が鎮守府の皆の浴衣を作っている事、着物の娘はほとんどが私服は自分達で反物を買つて着物を作っている等、男の目に触れない様子に話が移り、やがて夕食時となる。

男が申し込んだのは夕食が付かないプランである。従つて夕食は別の場所で済ませる必要があるのだが宿が飲食店も経営している為、二人は一日目はそこで食事を済ませている。

「今日はどうするの?」

「この雨の中村雨を連れ出すのもなんだからなあ……。またそこで済ませるか」

激しい雨の中、村雨を連れて街中まで行くのを渋る男。村雨もまたずぶ濡れになるのはあまり良い気もしないので特に反対はせず、一日目と同じ店での食事となった。

「ん〜。昨日はバジリコパスタ、ハーブソーセージとチリビーンズ、アカムツと島オクラのグラタンにシャンディガフに林檎のコンポートのバナラ乗せだったから。今日は……」

「昨日は……島モロヘイヤと生ハムのパスタ、ニース風サラダ、林檎のコンポートのバナラ乗せに生パッションフルーツジュースだったから、今日は……」

憲広 鰹のカルパッチョ・島モロヘイヤと生ハムのパスタ・3種のチーズプレート・林檎のコンポートのバナラ乗せ・生パッションと島ラムのカクテル 村雨 尾長鯛のポワレ・ハルタマのジェノベーゼパスタ・林檎のコンポートのバナラ乗せ・生パッションフルーツジュース

「あ、私が食べたパスタね」

どことなく嬉しそうな村雨。

「昨日食べているの見てて美味そうだったからね。その他はなるべく注文が重ならないようにしてみた」



「え？ どうして」

「少しづつ交換、良いかな？」

「ん。良いよ」

「でも林檎のコンポートのバナラ乗せはお互いに外せないな」

周囲に人がいないのを良い事に和気藹々とした雰囲気の二人。

「うん。このカルパッチョいけるな。この生姜のソースが良い味出している。ほれ」

「ポワレも良いよ。はい」

自分が注文した品を少しづつ交換する2人。

最後に飲み物とデザートのエリンゴのコンポートのバナラ乗せが出される。

「うん。やっぱりこの林檎のコンポート、美味しい。しつこい甘さもないし」

「だな。バナラの濃い味もコンポートにあってるしな」

そうやって男が生パッションと島ラムのカクテルを口に含む。それを村雨が物欲しげに見つめる。

「ね、この生パッションフルーツジュースと交換しない？」

「こら、ダメだぞ。未成年が……」

窘める男に、

「ほんとにそう見えるの？ 未成年って」

「え？」

「憲広から見て本当に未成年……子供なの、私？」

思わぬ言葉に動揺する男。

「どうした？ 突然」

「……少し背伸びしてたかもしれないけど、旅行中は子供に見られないように頑張ってみたんだ。でもダメなの？ 子供なのかな」

「え？ いや、村雨がどうかじゃなくて、駆逐艦の扱いは子供だ、ろ？」

「そんなの、あの絵で判断してるだけでしょ？ 実際の私達の姿知らないよね」

「まあ、普通はな」

「もう一度聞くけど、憲広から見て本当に子供にしか見えないの？」

男が黙り込む。意識がカクテルから離れた事を察し、

「隙あり！」

村雨が男の手元からカクテルを奪う。

「あ、こらー！」

「ごちそうさま。代わりにこつちをどうぞ。村雨の口づけ済だよ？」

「こらー！ お前、今のはこの為か！ 本気で考え込んだぞ」

男が猛然と抗議する。

「……本気だよ。答え、30日までには聞かせてね」

儂い笑みを浮かべそう言うのと席を立ち、男を残し立ち去る村雨。

その言葉を受け、男が考え込む。

それは閉店まで続いていた——。

## 7月27日——旅行第4日目 前編——

男が雨風の音で目覚めた時、隣のベッドで眠っていた村雨の姿は無かった。

「村雨……」

\*\*\*\*\*

昨夜、村雨から思いがけない言葉を聞いた男が部屋に戻って来た時、すでに村雨は夢の世界に旅立っていた。

スヤスヤと寝息を立てる村雨の顔に掛かる髪を梳いているうちに、出会ってからの思い出が浮かんでくる。

出会った翌日に初めて一緒に買い物をした事。服、食材、小物……。村雨はその度に燥いでいたが、自分を警戒しているのは明らかだった。だが当然の事、その身持ちの固さは寧ろ好ましいとさえ思っていた。

休み明けから仕事に出かける自分をいつも笑顔で見送る姿。いつもは週末にもなると疲れていた筈が、村雨の笑顔を見ると不思議と活力が沸き——。

娘の様なものだと思っていた存在が何時からかわわっていたのだろうか？

「……村雨、お前にあそこまで言われちゃもう逃げるわけにもいかんわな。戻るまでに

は答えを出さないとな」

髪を梳いていた手を止め——その手は何かを躊躇うかのように空を彷徨う。

「おやすみ」

\*\*\*\*\*

「あ、起きたんだ」

そんな声と共に村雨が髪を拭きながら浴室から出てくる。

「なにになに？ 村雨が見当たらなくて泣いちゃった？」

ベッドに腰掛ける男の姿を見つけ悪戯気な表情を浮かべると傍らに腰掛けるなり、よしよしと男の頭を掻き抱き撫でる村雨。

湯上りの甘い香りが男の鼻腔を擦り、柔らかい感触が頭を包み込む。

柔らかさを意識した男の顔が赤らむ。

照れ隠しに男が発した、

「お前ね……自分の格好、解っているよな？」

その言葉に自分の姿を見——バスタオルを纏っただけであることに気付き慌てて距離を取る。

「あのな……自分で仕掛けて真っ赤になる位ならやるなよ……」

赤くなっている男以上に、真っ赤に身体を染め俯く村雨に、些か呆れて声をかける男。

「だって……」

微かな声。

「ほら。さつさと着替えて、飯行くぞ」

「……は〜い」

階段を降りると、途端に激しい雨が二人を叩く。

「こりやたまらん」

慌てて食堂に駆け込む二人。

「うわっ。もう濡れてる。シャワー浴びたばかりなのに」

村雨が濡れた自分の身体をハンカチで拭く。

「全く、良く降ってるな。そろそろ来たのかな？」

窓から外を窺おうとするも、台風養生の為すでに窓にはシャッターが下ろされていた。

朝食を摂っていると、宿のオーナーから昼食用におむすびを用意していると声が掛かる。

「どうするの？」

「まあ、昨日買ったカップ麺と缶詰で良いかな」

「そっか。せっかく買ったんだもんね」

食後のコーヒーを飲み、部屋に駆け戻る。

「いや、濡れた濡れた。村雨、大丈夫か？」

「ん？ 大丈夫だよ」

そう答えながら浴室に入り、ドライヤーで髪を乾かす村雨。

やがて、防災無線から村営バス全線運休と青灯台岸壁閉鎖、夜明道路通行止めの知らせが相次いで流れる。

「ホントにどこにも行けなくなっちゃったね」

窓から外を眺めている男の傍らに立ち、同じように窓の外を眺める村雨。

「……で、今日は何するの？」

「……寝てるよ。筋肉痛で肩と腰がな」

「大丈夫？ ちょっと見せて」

村雨が男の上着を脱がせ肩を覗くと、肩が赤くなり青あざができています。

「あんなら、赤くなっちゃってるよ？ 無理するから」

男の様子を見ていた村雨が、良い事を思いついたとでも言うようにポンと手を打つ。

「あ、そうだ。憲広、そのままベッドに横になつて。そう、うつぶせで」

上着を着た男が横になると、えいという掛け声とともに、村雨が男の腰にまたがる。

「おいー！」

突然、柔らかな感触とぬくもりを感じ、焦る声を発する男。

「良いから、そのまま、そのまま。これから村雨がオイルセラピーを始めちゃいます」  
そう言うのと、男の上着を脱がす村雨。

「おい！」

男の焦る声を見殺し胸元からマツサージ用のオイルを取り出し掌につける村雨。

「村雨！ 冗談なら止めろ」

「冗談じゃないから。そのまま大人しくしててね。疲れていそうな憲広へのプレゼントだよ」

村雨の言葉に男が大人しくなると、村雨が両手の平を軽くこすり合わせてオイルを温め、男の腰に手を置き両手の平で脊柱を挟み密着させる。

「冷たくない？ 大丈夫？」

「ん？ ああ、大丈夫だ」

その声を聞き両手の親指と人差し指で三角形を真ん中に作るように手を置き、肩にかけて優しく滑らせる。

「どう？ 凝ってるところない？」

村雨が男の首の付け根まで手を滑らせ軽く掴み、凝っている個所を確認する。

「ああ。その辺かな」



身体の位置をずらし、人差し指を首の脇を半円を描くように滑らせる。男が痛がっていないことを確認し親指を立てて首から肩にかけて強く押しながら指を滑らす。

同時に肩から首に手を返しながら指の甲で優しく押していく。

オイルを足しながら首の両脇の強張りを解きほぐす様に親指と人差し指の指先で揉み解す。

「どう? 痛くない?」

頷く男。

男の肩に掌を置き、時には優しく時には体重を掛けながら揉み解していく村雨。

「どう? 気持ちいい?」

「ああ。良いな……」

半分眠りながら男が答える。

肩から腕に、背中から腰に掛けて丁寧に揉み解す村雨。

「憲広? ……あらら、寝ちゃった」

いつの間にか静かに寝息を立てている男の顔を覗き込む。

男が完全に寝静まっているのを確認し、言葉を紡ぐ。

「……昨日はごめんさい。大淀さんから書き換えが終わった連絡があつた時に一緒に注意されていたことがずっと気になつてたんだ。あの穴についていつ消えるか解らないん

だって。7月中は大丈夫そうだけど、それ以降は解らないって。ただ、私達の世界と貴方の世界で何らかの繋がりがあれば穴は消えないらしいの。それで男女の繋がりを持つとうって少し焦ってたんだ。……親娘の繋がりでも繋がりは繋がりだけど、男女の仲の方が繋がりが強そうだったから。……私は提督と男女の仲になっても後悔しないけど、提督はどうなのかな……」

静かに語る村雨の言葉に応えはない。

7月27日——旅行第4日目 中編——

欠伸と共に男が目覚める。

「あ、やっと起きた。もうお昼よ、随分良く寝てたわね。疲れてるの?」

窓際で本を読んでいた村雨が声をかける。

「ああ、すっかり気持ちよくなって寝てたらしい。ありがとな、村雨」

「どういたしまして。あ、そうそう。雨、止んできたみたい。風は相変わらずだけどね」

「ほお。逸れたかな? どれどれテレビでも見るか」

ニュースをつけると丁度台風情報が報じられていた。

「お、これは大神山展望台のカメラか。うくん、予想よりは激しくないな」

「そうなの?」

「ああ。7、8年前の台風に遭った時には宿の人に昭和57年に台風が直撃した時はヤギが飛ばされたのを見たって話も聞いてるしな」

「ヤギ!? ヤギって、メーメー鳴くあのヤギ? ヤギも飼い主さんも気の毒に……」

「ん? ああ、違う違う。飼っている訳じゃなくて、ノヤギが飛ばされたんだと。そう言え、ノヤギこの頃見なくなったな。駆除成功したのかな?」

「え？ そのノヤギと飼われているヤギって違うの？」

「言わなかったか？ ノヤギは元々家畜として放牧されてたんだ。第二次世界大戦中は聳島列島以外はオガサワラオオコウモリみたいに食べ尽くされたらしいんだが、その辺って聞いたことあるか？ まあオガサワラオオコウモリは、他の島で生きていた個体が飛来して復活したけどな」

「ヤギの話は聞いたことないけど、まあ大体の想像はつくわ。私は小笠原の事は知らないけど、南方の島では似たようなことが起きてたし。それで？」

「んで、戦後にまた聳島列島のヤギが父島とかに食料として放されたわけだ。でも食料として利用されなくなつて結局野生化したんだと。その野生化したヤギがノヤギっていう訳」

「ああ、野生のヤギって言うか野良ヤギでノヤギなのね。それで駆除って……？ ああ、わかった、そう言う事ね。ヤギって生えてる植物食べ尽くしちゃうから、94%ある固有植物を保護する為でしょ？」

「正解。ま、勝手に連れて来られたヤギも迷惑だけだな。ムニンツツジって固有種なんかノヤギに食べ尽くされて自生してるのは1株だけだからな。前に原木見たけど、周囲を金網で何重にも囲われてたんだ。周りには栽培されたのが植えられてたけど」

「世界で此処だけにしかない植物か……。それは大事だもんね」

そんな取り止めのない話をしつつ天気予報を見てみると、台風の進路が昨日の予想より東側にずれている事に気が付く男。

「針路が東側にずれてるな。これなら雨風は激しくは無さそうだ」

「あ、ほんとだ。昨日は貞頼祭だったもんね。貞頼様の神通力かな？」

「またサイパン辺りから台風が北上して来て直撃したら、これは貞頼祭りの時季だったから逸れたって判るだろうな」

「じゃあ、当分わからないね、で、船来そう？」

「これなら今日出港のおが丸も引き返さないだろうな、多分。かなり揺れても航路からは外れそうだし。……台風に向かっていくから帰りは寝ていくけどな、俺」

「揺れるんだ。……私艦娘だから酔わないわね。酔ったらお世話してあげるね」

「その時は期待しているよ」

顔を見合わせ笑いあう二人。

「それで、お昼はどうするの？ 雨、止んできたし出かける？」

「……バスもないのに出かけるのか？ 序でに言うとう風が強いから街の店はほとんど休みだぞ？」

「そっか。やっぱりカップ麺と缶詰ね。じゃあ、私これとこれ」

「なら俺はこれとこれ、あとこれかな」

「お湯足りる？」

「2個なら大丈夫だろ。後の分はまた沸かすよ」

食事の準備をしながらチャンネルを変える。

「どこも週末は台風に警戒だつて」

被災地の様子や八丈島の様子などが中継される。

「あつちはこれからか……」

「あ。父島映ったけど……なんか見たことある場所の様な気がするね」

「ああ、今映つたら、ここ。あそこに漁港があるんだが、その家の屋根にカメラがあるんだ」

窓を指さす男。

「え？ ……ああ、あそこね。オレンジの屋根の上にアンテナと一緒にあるわね」

「おお!! よく見えるな。……そうだった。時々忘れるけど、村雨は艦娘だったな」

「あく。それって酷い言い草」

頬を膨らます村雨。その頬を突きながら、

「はっはっはっ。こんな風に頬を膨らませる仕草なんか何処からどう見ても普通の美

……痛っ!!」

顔を染めながら、自分を突く男の指に噛みつく村雨。

「痛つ。悪かった。離せつて。……ホントに仔犬みたいだな」

男の指を離し、ワンワンと可愛く吠える。そして悪戯気な表情をしながら男に「もう。いつも私を揶揄つて……。この、セ・ク・ハ・ラ・提・督」

後半を一言一句区切りながら男の耳元で囁く。

「ごふつ。村雨に言われると意外と効くな。……セクハラか。そう言えば『艦これ』していると母港に戻る度に「何で触るの?」とか「何なの、もう!」とか言われるんだが、アレつてそつちだとどんな扱いになつてるんだ?」

「あ、あれ。そうよね……。提督の気配を感じる度にあんな感触受けたら、あんな風に言われちゃうか」

出来上がったカップ麺を啜りながら村雨が気になることを言う。

「感触? つてなんだ?」

「えっと、秘書艦について提督の気配がしたなつて思つたら全身、それも服の上からじゃなくて素肌を直に素手で撫でまわされる感触がするの。……時々部分的に撫で廻されたりさつきみたいに突かれたりする感触もするんだけど、それはなんとなく原因が判つたから良いや。それで先週一緒に過ごして提督が何にもしていないのに飛鷹さん達が怒るの見てようやく分かつたけど、執務室が映る度にそうなつていたのね。鎮守府に帰つたら夕張さん達に報告しておくから。提督が私以外にはセクハラしている訳じゃ

なかつたつてことも」

「おい！ 私以外には。つてなんだ？ 私以外には。つて。村雨にだつてやつて……いたな。うん」

「ですよね、セ・ク・ハ・ラ・提・督」

「提督呼びは禁止だ、禁止」

「セクハラは認めるの？」

「さつき突いたのは客観的に見たらそうなるからな、悪かつた」

その言葉を聞き、村雨が

「じゃあ、お詫びとして一つ聞いてね」

その言葉に出来る事ならな。と男。

「じゃあ、私に全身アロマテラピートリートメントしてね。いつものオイルを持ってきてるのは知ってるよ」

先週言つてたでしょ、若い介護士にもやつてたつて。と村雨。

そのままベッドに仰向けに横たわると、掛け布団の中で、もぞもぞと身体を動かし、準備をする村雨。

男は何を言われたか理解できず、その様子を只呆然と見つめていた――。



7月27日——旅行第4日目 後編——

「なあ、これ以外には無いのか？ 流石に絵面的に非常にマズイんだが」

男が翻意を促すも頑としていう事を聞かない村雨。

渋々と男が室内を整えリラックスさせながら足から腰、腰から背中、背中から首、肩、腕、手首と手技を施していく。

「ハ・ハ・ハ・モ」

村雨が自分の胸元を指さすも

「そう言うのは結婚してから自分の伴侶に言え」

と拳の一撃で有耶無耶にし、手技を終える。

「村雨、終わりだ」

と大きく息を吐く男に

「あく恥ずかしかった」

と顔を赤く染めながら村雨が言う。

「……お前、戻ったら覚悟しておけな。遠征と演習に扱ってやる」

「ん？ 良いよ。そうすれば練度が早く上がるし、ケツコンカツコカリも早くなるもん

ね。新婚旅行はどこにするの？ 飛龍さんが通れる様になったら連れてってあげてね」

平然と切り返す村雨に男が降参と手を上げ、後片付けに入る。

「……旅行は穴が閉じなかつたら。だけどね」

「やれやれ、久しぶりに緊張した。……村雨お嬢様、これで宜しかったでしょうか？」

男がアロマトリートメントの片付けを終え、冗談交じりに声をかける。

「うむ。大儀であつた」

仰々しく応えを返す村雨。何方からともなく噴き出す。

「それで、どうだ？ 台風は」

身繕いを終え先程から窓を眺めている村雨に声をかける。

「もう過ぎたのかな？ さっきから風も収まって来たみたい」

「なら、もう大丈夫かな？ 外の自販機でアイスでも買ってくるか……村雨も食べるだ

ろ？」

「あ、私も行く。なんか変なの買ってこられても、ね」

階段を降り外に出る二人。

「うん。もう止んだな、これは」

雨も風も収まった様な状況に

「傘は要らんな」

そう言つて傘を持たずに出る二人。

「それで、どこにある自販機？」

「ん？ 福祉センター前にあつたから、すぐそこだな」

「あ、あれね、早く行こ」

自販機で購入したアイスを舐めながら宿に戻る二人。

と、突然打ち付けるような激しい雨が二人を襲つた。

「うわつ。痛てて。いかん、村雨走るぞ」

「うん、急ごう」

慌てて駆け戻る二人だったが、宿に戻る頃は二人とも全身ずぶ濡れで、村雨はイン

ナーまで透けている姿だった。

「うわく全身びちよびちよだよ。提督、大丈夫？」

「だから、提督呼びは」

やめろと言いかけ、くしやみを連発する男。

「もう。ほらほら、お風呂入つてね。風邪ひいちやうよ？」

「いいのか？」

「うん」

「それじゃ、先に入るな。つと。こいつ仕舞つといてくれ。村雨も風邪ひかないように

な？ 何時までもその姿は色んな意味で拙いから、着替えてなさい」

そう言い残し食べかけのアイスクリームを渡すと浴室に入る男。

男の言葉で自分の姿を確認し、インナーまで透けている事に気付き赤くなる村雨。「臙装と違って私服でこの恰好だと恥ずかしいね」

冷凍庫に二人のアイスクリームを仕舞い着替えを取り出す。着替えを持ち暫く考え込む村雨。

「そうだよね、身体冷えちゃうと風邪ひいちゃうよね……」

(しかし突然降られるとは、うかつだった。傘は持っていくべきだったな。村雨にも悪い事した。早く上がらないとな)

湯張りした浴槽の傍らでそんなことを考えながら頭を洗う男の耳に浴室に繋がる外の扉を開ける音が入る。

(誰だ？ ……いや、部屋には村雨しかないか。洗面所に何か取りに来たのかな)

続けて浴室の扉が開かれる音がする。

(？ 村雨？)

誰かが浴室に入り扉が閉じられる。

「憲広……」

浴槽に入って来たのはやはり村雨だった。男は髪をすすいでいる途中で振り返るこ

とができなかった。

「村雨。何の真似だ？」

「えへ。村雨が、ちよつとお背中流します」

「!! おい、村雨。悪巫山戯なら……!!」

「わ、私も風邪ひいちゃうから、一緒に入る？」

「!!」

髪を濯ぎ終わった男が硬直する。

「あ、大丈夫。私ちゃんと水着来てるよ？ ほら」

そう言われ、恐る恐る男が振り返る。

言葉通りに水着——先週、一緒に購入したフリルビキニの水着を着ている村雨。

「この状況でごちゃごちゃ言わないの。あ、憲広もこれ穿いてね。私、反対向いているから」

村雨が男の水着を渡す。

逃げ出すかと考えた男だったが、退路は完全に塞がれた為に観念して水着に着替える。

「……着替えたよ」

「じゃ、洗います」

そう言うのと村雨が振り返りボディソープをスポンジに取って背中を丁寧に洗い始めた。

顔を真っ赤にする男。

(さすがに村雨に洗ってもらうと緊張するな……。だが、どうしたんだ?)

背中の半分も洗った頃、村雨が話しかけて来る。

「提督」

村雨が口調を改める。

「どうした?」

村雨の口調が改まったのを感じ声をかける男。

「ありがとう。旅行に連れて来てくれて。遠征や出撃以外にこんな風に遠くまで安全に来られるなんて思わなかった。良い思い出ができて良かった」

「こちらこそ。だ。本当なら一人旅だったからな。台風じゃ寝るしか無かっただろうから、こんな風な思い出は出来なかったよ」

「提督……」

雰囲気を変えるように村雨が陽気な声を上げる。

「はい、終わり。じゃ、次は私ね」

さも当然といった様子で村雨が背を向ける。

男も雰囲気を変えたがったので思惑に乗り、

「はいはい。頭も洗ってあげるから、シャンプー流すときはしつかりと目を閉じるんだぞ」

態と幼子に言い聞かせるような声をかけ、身体を洗っていく。

「あ、子ども扱いした！ ……いいもん」

少し拗ねた様子を見せる村雨に、笑いながら髪をくしゃくしゃにする男。

（やれやれ。何とか、いつものようになったか……。だが、本気でいつまで我慢できるか……）

色々と気を使った入浴を終えると時刻は16時を回っていた。

「あ、見てみて。オーナーがインタビューされてる」

窓の外を見ていた村雨が乾燥いだ声を上げる。

「どれどれ？ お、ホントだ。写真撮っておくか……」

「え？ どうするの？ それ」

「ん？ どうもしないよ？ 記念にするだけ」

「じゃ、私も」

窓からカメラを構えて写真を撮る二人であった。

「やれやれ。すっかり止んだな」

「ホント。最もきつきは酷い目に遭ったけどね」

「傘は持つていくべきだったな。反省反省つと」

「本当に反省してね？ お父さん」

食堂が混んでいるので二人だけの時とは違う呼び方に戻す村雨。

「さてつと。今日はどうするかな」

「私は……」

憲広： ハルタマのジエノベーゼパスタ・ポークソテー・マスタードソース添え・デミグラスソースハンバーグ・林檎のコンポートのバナラ乗せ・自家製ミントのモヒート

村雨： バジリコパスタ・島唐辛子のチリコンカン・林檎のコンポートのバナラ乗せ・島の生フルーツジュース

「これ……辛っ」

チリコンカンを食べ、慌てて水を飲み干す村雨。

「……大丈夫か？ ほれ、こっちのハンバーグと交換するか？」

顔を真っ赤にしたまま頷く村雨。

皿を交換し、

「うん。確かに島唐辛子だ。食べてると暑くなるな」



村雨の手元に飲み物が水以外にない事に気が付き、ジンジャーエールと自分の分としてモスコミュールを注文する。

「……」

物欲しげに男を見つめる村雨。

（人がいなくなったらな）

口を動かし声を出さずに伝える。

嬉しそうに村雨が頷き——。

夕食を終えた二人が見上げると月が煌々と夜空を照らしていた。

「そうか。明日は月食があったな。……南西じゃ無理か」

「月食？ うくん、見てみたいけど、ここからじゃ無理ね」

部屋に戻り、洗濯機に洗い物を入れる。

「52分か」

「じゃ、それまで明日の準備ね？」

「ああ。土産物とか買い忘れは、ないよな？」

「ん。大丈夫」

洗濯を終えた二人が室内に干し始める。

「これって乾くかな？」

「多分無理だな。まっ、船室で干せるから何とかなるかな。インナーはともかく」

「外は……無理か」

洗濯物を干し終え、コーヒーを飲みながら明日の予定を確認する2人。

「じゃ、明日は海洋センターと水産センターを周るの？」

「ああ、15時出港だから時間は十分あるしな。出来れば世界遺産センターやBシップもな」

「そっか。楽しみね」

そう言うと村雨は欠伸を一つし、ベッドに入る。

「おやすみ」

「ああ。おやすみ」

そう言うと男が電気を消す。

7月28日——旅行第5日目 午前——

カフェオレ色の髪が揺れ、村雨が目を覚ましたのは午前4時の事だった。

隣のベッドで寝ている男を起こさないように窓を開け外に出る。

月食中の月が南西の山間に沈みかけるのを見ながら

「今日で小笠原も終わりか。……提督に言えなかつたな、穴の事。言ったら提督の事だから多分……」

目覚ましの音と共に男が目を覚ましたのは6時過ぎ。

傍らを見遣ると村雨の姿がない。

「ん？ 風呂かな？」

男の耳に声が入ってくる。

「あ、起きた？ 良い天気よ、ペランダに出たら？」

カーテンの隙間から笑顔でコーヒーを飲んでいる村雨の姿が映る。

男が着替えペランダに出ると、風は幾分強いものの眩しい位の晴天であった。

「いや、最後になって小笠原らしい天気になったなあ」

「そうなの？」

「ああ。今日は暑くなるな」

シカクマメとカジキマグロの天ぷら、ハルタマ（水前寺菜）の白和え、島オクラとパイヤの煮物にデザートのマングローと小笠原の野菜をおかずにした朝食を食べ終え部屋に戻った二人。

「今日はどうするの？」

台風中継を見ながら村雨が男に問いかける。

「ん〜。村雨がいなかったら8時までには土産物やトランクをフロントに預けたりしてたから忙しかったんだろうけど、村雨がいるからな」

「あく。私を運送屋にするつもり？」

「そう言いながらも艀装を展開しドラム缶の中に二人分の荷物とトランクを詰め込んでいく村雨。」

「荷物っていつも家に送るの？」

「ああ。なるべく荷物は持ちたくないからな。帰りはこのリュックだけだ。土産用の段ボール箱もトランクに用意して来ているんだ」

「あ、この段ボールってその為なの？」

「そ。今回は村雨がいてくれて助かったよ。大体3,000円位は浮いたかな」

「ふうん。じゃあその分で美味しいもの食べられるね」

「アハハ、お手柔らかな」

そう言いながら財布の中身を素早く確かめる男。

フロントで夕食代等を精算し、リュックを背負うと、オーナーから

「ここに置いて置けば14時半までには待合に届けるよ」

と言われ、カメラや貴重品を取り出したリュックを預ける二人。

「これだけ？ トランクとかは？」

「ああ、纏めて宅配の受付に持っていきました」

「何だ。電話すれば集荷もやってただけだね。まあ流石ベテラン慣れてるね」

その言葉に苦笑する男。

「それじゃ、お世話になりました」

8時20分頃にチェックアウトするとバックを片手に散策に出かける二人。

「どこ行くの？」

周囲に誰もいないことを確認し村雨が男の腕を抱え込む。

同時に、村営バスが8:30から運転を再開すると村内放送が流れる。

「バスが動くみたいね？」

村雨が男を見つめる。

「どこ行く?」

「ん? そうだな……海洋センターで亀でも見るか」

モモタマナやバナナの木を横目に海洋センターに向かう。

「あ、そうだ。去年行けなかった所があった。ちよつと寄り道するな」

「うん。良いよ。どこ行くの?」

「ん? ……海軍墓地と咸臨丸墓地」

「海軍墓地? ここにもあるの? じゃあお参りいかないかね」

脇道に逸れ山道を登る二人。

「ハイハイ」

「ああ。初めて来られたな……」

手を合わせ参拝するうちに零れ落ちる村雨の涙を拭う男。村雨が堪え切れず男の胸に縋るのをかい抱き、背中をポンポンと叩きリズムを取り落ち着かせる。村雨が落ち着くと参りを済ませ、山道を降りる二人。

咸臨丸墓地に向かうも

「あちやく。これは無理かな？」

昨日の台風の影響か、墓地に向かう途中に水が流れ小さな川ができていた。

「渡つても良いけど、ウズムシいるかもな……。やめよう」

「え？ やめるの？」

「うん。ウズムシがな」

「ウズムシ？」

「うん。ニューギニアヤリガタリクウズムシって言ってカタツムリを食べるんだ。小笠原のカタツムリが結構絶滅寸前になっているんだが、こいつが原因なんだ」

「それがいるの？」

「現実とは言えないけど、泥の中にいるからね。運び屋にはなりたくないかな」

「うくん。残念だけど、私もやめるね。そのウズムシがいるのって父島だけなの？」

「ああ。だから持ち出さないように泥落としマットとか海水に浸したマットとかあるんだ」

「船に乗る前と降りた時のマットってその為？」

「あれは外来種を持ち込まないようにだな。帰るときに通るマットがウズムシ対策な」

「そうなんだ。私も鎮守府に持ち込まないように気を付けないと」

そんなことを話しながらも来た道を戻る。

「ちなみに、この道を奥に行くのと昨日通行止めだった夜明道路になるんだ。山登りするけど上の方に海軍通信隊送信所の跡地とか首無し尊徳像とか展望台があるんだが、今日は時間ないから行かないかな？ バスは通ってないからね」

「そうなんだ。台風がなかったら行きたかったかな」

「綺麗な場所だからな。……帰ったら写真見るか？」

「え？ 写真あるの!? 見る見る」

「そりゃ伊達に10年以上通ってないからな。一昨日話した今じゃ枯れたブッシュ元大統領の植えたノヤシとか4年前の台風で倒れて無くなった東京や沖ノ鳥島までの標識とかあるよ。休業中の『森の喫茶店』から撮った二見湾とかもね」

「えく。見たい！ 鎮守府にも持って帰りたい！」

「帰ったらメディアに焼いておくよ。……あるよな？ CDとか見られる奴」

「あるよ。2010年頃まではこつちもあつちも技術の進歩が一緒みたいだからDVDも見られるよ」

「ん。じゃあDVDに色々焼いておく」

そんな話をして道を歩いていると甘い香りが漂ってくる。

「あれ？ 甘い匂いがする」

村雨が鼻をひくつかせ、



「どこから来てるんだろ」

と周囲を見回す。

「ん？　そこにグアバがあるし、あそこにヤシの木があるな。それと村雨の斜め前の家の庭にバナナの花が咲いている」

「え？　あ。ホントだ」

「ついでに言うと、その家にも香りはしないけどバナナが成っているな」

「え？　あ、ホントだ。よく判った……って知っていたのね？」

「もちろん。原付で何回も通ったからね……急な山道も。どこに何が生えているかくらいは解るよ。実を食べていい木もね」

「そうなの？　来年は案内してね？」

坂道に差し掛かると二人の前に

「うわ。鈴谷さんが見たら、『なくんか、マジヌメヌメするう』とか『うわつ、キモツ！』とか言いそうね、これ」

アフリカマイマイが5、6匹屯している光景が飛び込んできた。

「写真、写真つと」

男がカメラを構える。

「……よくそんなの撮れるね」

そう言いながらも写真を撮る村雨。

長いスロープを下ると大きな木が何本も目の前に現れる。

「あ、オウギバシヨウ」

「お、タビビトノキ」

顔を見合わせる二人。

「扇芭蕉でしょ？」

「旅人の木だよ？」

男の言葉に首を傾げる村雨。

そんな仕事を撮る男。

「同じ木だよ、オウギバシヨウもタビビトノキも」

笑いながら種明かしをする男に

「？ あ、引っかけたの？」

「村雨の可愛い顔頂きました」

と、カメラを掲げる。

「もう、また青葉さんみたいな事して」

「青葉っていつもこんな感じなの？」

「うん。色々撮って貰ってるんだ。幸い鎮守府から轟沈は出てないけど、いつ起きるか解らない……って、提督を信用しないわけじゃなくてね」

「いや。それは正しいよ。前に瑞鶴が大破したのにうっかり進軍させてしまつてな。あの時は物凄い恐怖があつた。幸い沈まなかつたから良かったものの……」

それまでの雰囲気を一転させ、男が村雨に向き合う。

（あ、あの時ね）

村雨の脳裏に上旬の進軍が思い浮かぶ。

沖ノ島沖への定期的な戦闘哨戒中に瑞鶴が大破した際、普段は撤退命令が出る筈が進軍命令が発せられたことがあつた。

あの時は瑞鶴・翔鶴とも悲壮な顔で進軍し、他の随伴艦も蒼褪め何も会話を交わさなのまま会敵した。幸い翔鶴航空隊と足柄達の奮戦があり瑞鶴には一発も命中させることなく敵艦隊を撃滅させたが、その後が大変だつたと思ひ出す村雨。ようやく提督からの撤退命令が発せられ、瑞鶴を庇いつつ辛うじて敵の追撃を振り切つた部隊が母港に戻り意識を半ば失いかけた瑞鶴を入渠させた後に旗艦を務めた足柄が怒りを頭にし、鎮守

府全体が提督を拒否しかけたことがあった。かくいう自分も提督の指揮に不信を抱いていたが、妹の五月雨や夕立、古参の多摩達の説得もあり、提督が以後数日姿を現さなかつたこともあり何らかの突発的事故だったのだろうとして沈静化したのが、瑞鶴が轟沈していたらどうなっていたかは全く分からなかつた。

「提督」

周囲に人影がない事を確認し、村雨が艦娘として己の提督に話しかける。

「あんな指揮はもう二度と執らないでください。提督はご存じ無い事ですがあの時の鎮守府は提督に対する不信感で崩壊寸前だったんです。もし瑞鶴さんが轟沈してたら、私は艦装だけおいて姿を消していました。脱走ではなく艦娘が持っている権利ですから。そうなくても暫くは艦装妖精さんがいるので提督が指揮を執ることはできますが、何れは……」

村雨のその言葉に改めて、

「村雨。鎮守府に戻ったら皆に伝えて欲しい。今後如何なる場合でも大破進軍は絶対させないし、轟沈者を出すことはしない。万が一にも轟沈者を出した場合は提督は引退する。」

そう伝える男。

「村雨、君が来るまでは、ゲームだから。と思っていたところがあつたのは否定しない。

だがな、もうそうは思えない。実際に村雨と触れ合つて、身体の温もりや柔らかさを感じ取つた今となつてはな」

男の眼差しは真剣なものであつた。

男の言葉を聞き、頷く村雨。

二人の間に重い空気が流れる。

「行くう？」

そんな重苦しい空気を振り払うかのように村雨が歩き出す。

暫く歩みを続けた後。

「お、見えてきた。海洋センターだ」

重苦しい雰囲気振り払うかのように男も声を上げた。

## 7月28日——旅行第5日目 昼間——

「到着つと。どう？ このポーズ、決まったでしょ？」

海洋センターへの坂道を降りた村雨が、最後に軽く飛び跳ね着地する。

「おお。10点と言いたいが、ポーズが在り来たりだから7点位かな」

ポーズを決め振り返る村雨に男が軽く拍手して評する。

「むう。何か揶揄われてる気がする」

そんな村雨の頭を軽く撫でる男。

「よしよし。さて、行くか。……まだ9時半か。開いてるかな？」

玄関に回る二人だったが、「カメ教室開催中」の札が掛かった扉には鍵が掛けられていた。

「入れないみたい。どうする？」

「裏の水槽は見られるようだから、そっちに回ろう」

建物裏手の飼育エリアに回ると、同じ宿に泊まっていた親子と出会う。

お互いに挨拶を交すと、親子は、孵化したばかりの子ガメのいる奥の水槽に、二人は建物の傍にあるアオウミガメの水槽に足を運ぶ

「あ。ウミガメのおやつだった。ね、お父さん」

目を輝かせ男を見つめる村雨。

「ハイハイ」

男が1000円で『ウミガメのおやつ』——ざく切りのキャベツ——を二人分買うと、片手に村雨が水槽に近付く。

（あ、この亀、コータか。……さて、村雨は洗礼を受けるかな？）

男は水槽の亀の名前を確認するとカメラを構える。その様子に気付くことなく村雨が水槽に近付く。

「はいはい。そんなに物欲しげな顔しなくてもちやんと、わっ」

水槽を覗き込んでいた村雨にアオウミガメの「コータ」がヒレを使いバシヤツと水をかける。

「やつぱり食らったか」

水を掛けられた瞬間を写真に収めた男が笑いながら村雨に近づく。

「水掛けられた〜」

「村雨が早くおやつをあげないからだよ。このコータは人がよつてくるとエサをもらえてるって思ってるから、すぐにおやつを貰えないと水をかけるんだ」

村雨が顔をハンカチで拭きながら、おやつを撒いている男に

「……知つてたのね。教えてくれてもいいのに」

恨めし気に声をかける。

「そこに注意が出てるじゃないか」

笑いながら顎をしやくる男。

「ほら、子ガメのおやつも買ったから。拗ねてないで子ガメにあげてこい」

300円の『子ガメのおやつ』——細かい魚の切り身——を村雨に渡す。

「は〜い。……今度は大丈夫よね」

注意書きがない事を確認し、おやつを撒く村雨。

「あ、寄つて来た。可愛い」

子ガメに夢中になっている村雨と、その様子を写真に収める男。

「村雨、奥に行くぞ〜」

男が声をかけ歩みだし、足を止める。

「どうした……の？ っ！」

歩みを止めた男に近づき、展示されている海軍留式機銃に気が付く村雨。

同時に——涙が零れ落ちて来る。



「やだ……。 何で……」

慌てて拭うも、ポロポロと零れ落ちる涙。

「……村雨」

村雨の肩を掻き抱くと、その場を後にする男。

「落ちて着いたか？ 悪かった。あそこに海軍留式機銃があるのに気が付かなかった」

「うん。もう大丈夫だから。ダメね、どうしても海軍やあの戦争に所縁があるものだと涙が出てきちゃって……」

男に肩を抱きかかえられながらベンチに腰掛ける二人。

暫く海を眺め、

「うん。もう大丈夫。行こ？」

奥のウミガメ水槽に歩みを進める。

水槽を覗く村雨。

「わあ。この子ガメ、ふ化したばかりなんだ。ちっちゃい」

水槽の亀を見て燥いでいる村雨に飼育員が声をかける。

「稚ガメっていうんですよ。こっちの亀はまだ駄目ですけど、向こうの子ガメは手に

持つて記念撮影もできますよ?」

「え? 良いんですか? ……お・父・さ・ん?」

「ハイハイ」

記念撮影をした後、タイマイやアカウミガメの水槽を周る二人。

「この亀は何歳位ですか?」

水槽を清掃中の飼育員に質問する村雨に

「大体……18歳位ですね」

と答える飼育員。その言葉を聞き男が

(そうか。俺が初めて来た時にいた亀がこんなに大きくなっていたのか)

と時の流れを感じる。

「あく楽しかった」

子亀に触れたり、ウミガメのパピーウオーカーに申し込んだりとウミガメを満喫した

二人が海洋センターを後にしたのは9時も半ばを過ぎた頃であった。

「これからどこ行くの?」

「ん? 漁港をうろついてから水産センターかな」

「良し。行きましょ行きましょ」

弾んだ足取りで海洋センターを振り返る村雨。

「またね」

その言葉に

(またね? ……ま、良いか)

そう考える男には自然と笑顔が浮かんでいた。

海洋センターを出て海岸沿いの道を歩く二人。

「風、強いね」

「村雨、帽子を飛ばされないうようにな」

「大丈夫よ。紐かけてるし。あ、飲み物買ってこ?」

「そうだな……。何飲む?」

「んつと、あ、このドクターペツパーって美味しかったからこれにする。……憲広?」

ドクターペツパーという言葉に顔をしかめる男。

「村雨には美味しいのか……。まあ、好きだって人もいるからな」

マックスコーヒーも併せて購入し、ドクターペツパーを手渡す。

「それ、珈琲にしては甘すぎない?」

着いた初日、一口男から貰った際の甘さを思い出して眉を顰める村雨。

「フツ。これは珈琲じゃない。珈琲風味の練乳ミルクだ」

「……好みはそれぞれだけど、憲広も他人の事は言えないよね」

防波堤の上を歩きながら村雨が

「やっぱり海、荒れてるね」

海面の状況を下を歩く男に伝える。

「ちよつと揺れるかな」

「ちよつとで済むの？」

「……性能も先代に比べて良くなったし、2倍の排水量になったおがさわら丸に期待だ」  
「なるほど。そう言う事」

よつ。と勢いよく防波堤から飛び降りる村雨。

「……水色か」

その言葉に慌ててスカートを抑え込み、上目で男を睨む。

「……見物料はアイス一つね」

「安っ！」

「……憲広、曲がりなりににも私の上官だし。特・別・料・金」

港を過ぎ、宿の前にあった公園を横切る。

「あの鐘は何？　ちよつと見に行ってもいい？」

「……あれは慰霊碑だが？」

言外に行つても良いのかと問う。

「あ、じゃあ行くのは止める。誰の慰霊碑？」

「陸軍と海軍のだな」

「そっか」

後ろを振り返り、手を合わせる村雨。

福祉センター前でアイスを買ひ、舐めながら街に向かう。

「あ、あそこの建物、猫みたい」

前方に見えた建物に興味を持つ村雨。

「あれつて何？」

「ねこ待合所まちか」

「ねこまち？」

「ノネコつて言うのがいてな。ノヤギと同じなんだが、猫も野生化しているんだ。アカポツポとか食べられていているんだが、そのノネコを捕獲してアカポツポたちの繁殖を助けようつて動きがあつてな。ノネコを殺すわけにもいかなから捕獲されたノネコを収容する施設が必要だったんだ。それで作られたのが、このねこ待合所。因みにねこまちつて言うのは通称な。確か……初めて来たときは無かつたんだ、この建物は。日食の

年には出来てたから、2008年かな？ 建てられたのは」

「へえ。今は猫居るの？」

「さて。いない時もあるって話だけど、人がいるから今はいるんだろうな」

建物を掃除している人に話しかける二人。

話によると、今いる猫は7匹。昨日の台風の影響はなかったらしい。

色々教えて貰ったお礼を述べて街に向かう。建物の反対側に今までに東京の動物病院に送られた猫たちのイラストがあった。

「随分東京に行ったんだね。幸せになってると良いな」

「もう700頭を超えたら嬉しいからな。治療とか人に慣れる訓練をしたあとで相性とか見て里親に渡すらしい。前に里親のブログを見た事があった」

「え？ 何て名前？」

「確か……ミニ……何だったかな？ 忘れた」

「もう。帰るまでには思い出してね。ちよつと見てみたいから」

やがて目の前に覚えのある建物と隧道が見える。

「着いた。お父さん、行く行く」

何人か子供連れの観光客が水槽の周りを囲んでいる。

「あれ何してるの?」

「ああ、アカバの歯磨きだな」

「歯磨き?」

首を傾げる村雨に、

「そこに歯ブラシが置いてあるだろ? それをアカバの口の前に持つていくと、口を開けるから歯ブラシを入れて歯を磨くんだ。ただ、今だと開けないだろうな。飽きてるようだし」

「なんだ、残念」

「人が遊んだ後は避けなとな。おが丸が着いた直後が一番良かったのかも知れんが

……」

「磨いたことは?」

「……一度チャレンジしたら逃げられてな。後は見てるだけ」

少し遠い目をして話す男に、何にも言えない村雨であった。

同じように外にあるネムリブカの水槽を見た後建物の中に入る二人。

「凄〜い」

村雨がイタチザメの歯を見て燥ぐ。

「海に出るんだから見たことあるんじゃないのか？」

男が、艦娘が見たことないのも変だな、という疑問から問いかける。

「泳いでいるのは何回か見た事あるけど、歯が丸ごとある標本は見たことなかったの」  
そう言う事か。と納得する。

「手、入れても良いのかな？」

「顔入れても良いはずだけど、サメの歯つて縁にギザギザがあるからな。……って知ってるか」

「もちろん。それ位は解るわよ。海についてはお父さんより私の方がプロなんだから」  
「そりゃそうか」

中でカツポレやシマアジ、モンガラカワハギなどの魚の群れに燥ぐ村雨。

小笠原式深海たて縄漁の説明を熱心に見る村雨が

「……カ級あやヨ級つら釣り上げるのに使えないかしら」  
等と物騒な発言をしたり、

「あ、オオウナギだ。これ、鎮守府だとかば焼きにするのよね。二ホンウナギより味は落ちるけど赤城さんや加賀さんがよく捕まえてくるのよ」

と獲物を見るような目をした村雨の視線を感じたのか大ウナギがパイプに慌てたよ



うに引っ込んだり。

「うくん。面白かった」

内外を歩き回った二人が満足気に水産センターを後にする。

「次はどこ行くの？」

後向きに歩きながら、村雨が問いかける。

「ん？ そうだな……」

考え込む男。

村雨が前を向き直し、

「あれ、何やってるの？」

男に問いかける。

「ん？ トラップ交換……かな？」

「トラップ？」

「グリーンアノールの被害はビジターセンターで見ただろ？ あのグリーンアノールを

捕獲する奴」

「ふくん。捕まるの？」

「聞いてみないと解らん、それは」

「じゃあ、あの人に聞いてみよつと」

交換作業中の作業員に声をかけ疑問をぶつける村雨。

美少女からの問いかけに気をよくした様子の作業員から答えを得るとお礼を述べて、離れて待つていた男の元へ。

「聞いてきた。街中のトラップは良く捕まるらしいよ？ 色々と形も変わって来てるんだって。小笠原世界遺産センターに行くと言った詳しい事が判るって言ったけど、知ってる？」

「ああ、あそこか。そう言えばトラップとか侵入防止のフェンスの模型とかあったな」「じゃ、後で行きましょう？」

目の前に見えてきた二見港に寄り道をし、宅配便の受付所や船客待合所に立ち寄る二人。

静かな船客待合所を覗く村雨。

「まだ誰も来てないね。船もないし」

「……着くのは11時半だと」

「えっと、出航は15時半ね。いよいよ小笠原ともお別れかあ」

「さて、そろそろ何か食べに行くか？」

「うん。何処に行くのかな？ エスコート宜しくね」

海岸沿いの大通りに戻る二人。

「さてつと……何食べるかな。何が良い？」

「そうね……。まだ10時だし……。ケーキ？」

「ケーキ？ ……ふむ。じゃあ、そこかな……」

目の前のガジユマルのテラスを指さす男。

「え？ ハートロック？ サメよりもケーキが良いんだけど？」

「だから、ケーキをね」

「バーガーとかカレー以外に甘いものもあつたの？」

「そりゃあるだろうよ」

二人が会話を楽しみながら、ハートロックに立ち寄る。

「村雨はケーキで良いのか？」

「良いよ。場所つてガジユマルの下でも良い？」

「むしろ、そこが良いな……」

「了々解」

村雨に島バナナのケーキと生グアバジュース、自分の分に島蜂蜜とバニラを使ったアイスクリームと小笠原コーヒーを注文するも、コーヒーは売り切れ。代わりにばんじやくろ茶を注文する男。

待つている間に、ここに泊まった時は朝食をこの席で摂る事や今まで泊まった宿の話をする男。

女性スタッフが二人の注文を運んでくる。

「あ、お客さん、今年は9月じゃないの？ 9月ならコーヒーあったのに」

「ここ数年、宿で見かける顔見知りだった。

「今年はね。仕事の都合で9月は無理だったんですよ。で、せっかくだから祭りの時に来ようかなって」

「あ、それで。入港日も来てたよね？ うちの新作、どうだった？」

「あ、スパイシーサメバーガーですか？ 酸味と辛みが効いていて暑い時季には良さそうですね」

「そうでしょ。後、お客さんが一昨年言ってたレモングラスティーにミントを2種類加えたら面白くなるよって話、オーナーが試しに作ったら結構人気が出たのよ。今度大々的に売り出すって。良かったら買ってね」

「そりゃよかった。でも買うのは味見してからですかね、自分でも作るんで気に入らなかつたら買いませんよ？」

「言うわね。じゃ、絶対3袋は買わせてあげる。今度来るのはまた9月？」

「来年のですね」

「その頃ならまたコーヒーも出来てるから宜しくね」

「じゃあね。と手を振って去る店員。」

頬を膨らまし、村雨が男を睨む。

「随分親し気なのね……。私、放っておかれる趣味無いんだけど？」

「アハハ、名前覚えられてない時点で営業トークじゃないか」

「あの娘の名前知ってる？」

忙しそうに歩き回る先程のスタッフを指さす村雨。

「生協辺りで見かけて判る位には顔は知ってるが、下も上も知らん」

「一緒。でも向こうから話しかけられる位には覚えられているつと」

フォークでケーキをガシガシと突きながら差されたストローにブクブクと息を吹き込む。

「悪かった悪かった。これでも食べて機嫌直せって、ほれ、口開けて。あくん」

とアイスクリームを村雨の口元に近づける。

「あ、ありがと。あ、美味し」

顔を赤く染め差し出されたスプーンごと口に含む村雨。

「美味いだろ？ もう一口どうだ？」

目を瞑り口を開け催促する。

「お……」

携帯を取り出し村雨の口にスプーンを入れると同時にシャツターを押す。

「!! ちよー!」

その音に目を開けた村雨に携帯を構えた男が映る。

顔を赤らめ、膝を蹴飛ばす。

「おっと」

足を動かし躲す。

「……この……この……」

ムキになり村雨が何度か足を出す。

「村雨、食事中は大人しくな。……この餌をねだる雛みたいな顔もDVD行きだな」

携帯を見ながら呟いた男の言葉に顔を赤らめながら蹴りを出す。

「おっと。癖の悪い脚は、こうだ」

片方の足を使い村雨の足を挟む。すかさず片手を伸ばし、軽く攪る。

「……!」

手を振りほどき、再度足を伸ばす村雨。

目の前の料理を食べながら足下でのじやれあいは続く。

裏通りを歩く二人。

「やれやれ。来年どうするかな……」

「もう。恥ずかしいっただらありやしない。憲広が悪いんだからね」

お子様連れのお客さんもいますので、と女性スタッフから注意を受けた二人が慌てて店を出たのは5分ほど前の事であった。

「お前がそれを言うか」

些か呆れ気味の男に

「あんな騙し討ちみたいに写真撮るなんて」

なおも言い募る村雨。

「いや。ついつい」

「……消してね？」

「ダメ。消さない」

「消して」

「お断わりだ。村雨との大切な思い出の一つだからな、村雨のお願いでも消さん」

もう。と頬を膨らませる村雨であったが、その表情には笑みがうつすらと浮かんでいた。

入港時に昼食を食べた店を過ぎ、郵便局や役場を過ぎる。

「暑くなってきたね？」

「着いた時よりな。まあ、内地や9月頃の此処に比べれば未だ涼しいけど。暑くはなつて来たな」

「うう。あつちは暑いもんね、戻りたくないなあ」

「戻らないと帰れないだろうに」

「そうだけどお。こつちから直接帰ればいいのにな」

「……それは困るな。……もう少しだが村雨とはギリギリまで一緒に居たいしな」

後半は微かな声であつたが村雨の耳にはしっかりと聞こえていた。

「え？ 後の方、今なんて言ったの？」

「ん？ 一人分の空きの説明大変だからな。って」

ふくん。と口元を緩める村雨。男の腕を取りしっかりと挟み込む。

「暑い。離れる」

温もりと柔らかさを腕に感じ焦る男の腕をさらにしっかりと挟み込む村雨であつた。

「お、ここだ、ここ」

二人の目の前にクリーム色の建物が見えてきた。

「さつき村雨が聞いていた場所だな。小笠原世界遺産センター」

「へえ。どんな感じなの？」

「去年初めて来たときはオガサワラハンミョウを育てていたな。巣穴とかグリーンア



ノールの侵入防止策の展示をやった。入館料は無料な」

「へえ。ところで今、去年初めて来たって言ってたよね。一昨年は来なかったの?」

「4年前まではこんな建物は無かったな。一昨年は2日目の海で焼き過ぎて3日目から歩けなくてな。宿から殆ど出られなかったから建物が建てられていたのかは知らんが、開館したのは去年の5月頃だったはずだ」

「そうなんだ。って焼き過ぎ?」

「日焼け止めは全身に塗ってドルフィンスイムに参加してたんだがな。泳いでいるうちに流されて、塗り直しているうちにまた泳いでとやってたら1時間位で焼けた。夜から日焼けが酷くて歩けなくてな、医者も休みだったし、何とかそのアサヒ薬局に行って薬買って塗り捲ってたわ。赤い跡が消えたのは去年の12月頃だった」

「うわ。日焼け止め塗っておいで良かった」

「村雨、汗かいているから念の為塗り直しておいた方が良いぞ」

中に入るとひんやりとした空気が包み込み、ホツとなる二人。

「あ、ビデオ流れてる」

「小笠原のアノール対策……だな」

後ろから眺める二人。映像が終わり、再び最初から流れると前方の席に座っていた人が席を立つ。空いた席に二人が座ると程なく映像が流れる。

「……………、港の前だ」

見覚えのある風景が映る。

「あ、ここは亜熱帯農業センターか」

映像が終わり、席を立ち、館内のオガサワラハンミョウやマイマイの保護活動の様子やオガサワラハンミョウの巣穴をカメラで見ると二人。

「いないね、ハンミョウ」

「だな。巣穴から見えん……」

ノネコやクマネズミと言った外来種駆除の取り組みやノネコ対策のフェンス、グリーンアノール対策のフェンス等を触りながら、グリーンアノールのトラップがゴキブリホイホイに似ているのが偶然ではなかった等の説明を読み村雨が目を輝かせていた。

「村雨、こういうのに興味あるのか？」

「もちろん！ こういうの好きよ。小笠原のパンフレットも貰ったし、後はこの『島ネコマイケルの大引越』って本が欲しいかな。面白いから鎮守府の子たちにも読ませたいけど、お土産屋さん売ってないの？」

「ああ、これはPDFが公開されているよ。帰ったら保存して持って行ったら？」

「違法じゃないよね？」

「小笠原自然情報センターのサイトに掲載されているから違法じゃないだろ」

小笠原世界遺産センターを後にして農協に行くという男。

「どうしたの？ 買い忘れて何か買うの？」

「ん？ 何か面白いものがないか見るだけ。多分ないと思うけどな」

予想通り入港日に見た果実や野菜があるだけであった。

貞頼祭りで出会ったスタッフと会話を交わし、農協から出たところで港から汽笛が聞こえる。

「お。おがさわら丸が来たのか。11時半か。……村雨、ちよつと早いけど昼飯行くぞ。

店が混む」

男が村雨の手を引っ張っていく。

「あ、ちよつと。……こういう時は強引なんだから」

文句を言いながらも顔に笑みを浮かべ男に引っ張られる村雨であった。

## 7月28日——旅行第5日目 午後——

男が村雨の手を引き入った店は『Bonina』

「いらつしやい。つて、あんたやつと来たんだね」

そんなオーナーの言葉をかいて誤魔化す男。

「まあいいつか。ちゃんと寄ってくれたんだから。……おっと」

傍らの村雨に目を留め。

「アンタ、何処で引っかけたんだい？　こんな綺麗なお嬢さん。見たところ、まだ10代……いや、20代前半かな？　あんたとは一回り近くは離れているだろ」

行く先々で男の知り合いと思しき人に毎回の様に聞かれる村雨が、ふと茶目つ気を出す。

「会社の部下です。金指係長に強引に……」

その言葉に

「アンタ、部下に……つて、お嬢さん嘘言っちゃだめだよ？」

村雨がチヨロと舌を出すと

「ごめんなさい。ご想像の通りです」

満足そうにうなづくオーナー。

「良いお嬢さんだね。適度な茶目つ気もあるし、アンタも付き合いやすくて気疲れしないだろ？ それで、何にするんだい？ いつものかい？」

「ええ。いつものポキ丼2つで」

「あいよ」

間もなくゴマ油と醤油で和えた刺身と海藻がたつぷり入った丼が出てくる。

「はいよ、ポキ丼、お待ちどう。何か飲むかい？」

そんな言葉にパッションフルーツのジュースを注文する。

「ふう。食ったけど……もうちよつと入れるかな」

「私も、少し……」

ちよつとお腹減つちやつて。と村雨。

なら、あそこにするかと向かった先は入港日に入つた店。

「つらつしやい。つてアンタらか。祭りはどうだった？ 今日の便で帰りかい？」

「ええ。楽しめましたよ。台風もそんなに被害なさそうでしたし」

「いや、おが丸は来るとき台風に向かつてくるから縦揺れで大変だったろうな」

「そうなんですか？ と男の問いかけに」

「台風突つ切つて来たのは今回が初めてだな。今度の船長は度胸あるよなあ。さすが海

の男」

と、カウンターのお客様が答える。

「さつき聞こえたけど、貞頼さんに行つたんだつて?」

「ええ。初めて参加したんですけどね」

「そうか。上の方で工事してたろ。あそこの現場にいたんだよ、俺達。俺達も今日の便

で帰るんだ」

弾む会話。

「注文は?」

村雨に注文を取る店主。

「亀玉に、亀刺し、亀の唐揚げ」

村雨の注文内容に

「亀玉、気に入つたかい? これは亀の卵黄を——」

「そうなんですか? じゃあ、その味噌で——」

出された亀の玉子について会話が弾む。

男がアカバの唐揚げに亀刺、亀玉、ソデイカの刺身、デザートに店主の娘さんが奨めてくれたシャカトウとせつかくだからとタコの実のお酒を注文する。

出されたタコの実のお酒を見つめる村雨に、

「お嬢さん、未成年じゃなかったよね。少しどうだい」

と味見をさせてくれる。

「あ、これ甘くて美味しいですね」

「島ラムにタコノミを漬けた——」

「ご馳走様でした」

「ご機嫌な村雨と苦笑い気味の男が店を後にする。

「村雨、お前、ちよつと飲みすぎ」

村雨が試飲の範囲を超えて呑んだ為、纏めて精算を終えた男が一言窘める。

「良いでしょ」

頬を赤く染め何処かご機嫌な村雨が千鳥足で男の周りをまわる。

「……ちよつと酔い覚ましするかな」

公園に向かう途中、MARUHIの前で一時間ほど前に着いた便の観光客が通り過ぎる。

あれは凄かったね。とか、まだ揺れてるよ。といった声が残った。

「まっ。出る便は関係ないだろ。部屋で吐かれてなければ良いけどな」

吐かれたことってあるの？ という村雨の問いかけに、まずない。と返す男。

公園のお祭り広場を散策し、

「ちよつと甘いもの食べに行くぞ」

と男が村雨の手を引く。

「甘いもの？」

「TOMATONのアイス」

「TOMATON？」

「買った土産物もそこが作ったのがあるんだ。その本店にな」

午前中に寄った小笠原世界遺産センターを通り過ぎ、突き当りを右に進むと瀟洒な店舗が見える。

「わ、可愛いお店」

扉を開け中に入る。

「いらつしやいま……あ、最後の最後にやつと顔出しましたね？」

「ここも？」 と男を見上げる村雨。

「アハハ、台風が、ね」

「入港日に来てくれればいいじゃないですか。あら？ ……ついに年貢納めたんですね、歳の差婚ですか？」

「えつと……」

言葉を濁す男に代わり村雨が



「ええ。上司に落とされちゃいました」

と爆弾発言をかます。

え？ と顔を見合わせるスタッフ。そして――。

「さつきも同じこと言われましてね……」

村雨に拳を落とす男。

「痛いなあ、もう」

「お前がつまらん事言うからだろ」

まあまあ。と笑いながら宥めるスタッフ。

「可愛らしいお嬢さんじゃないですか」

カウンターの奥で肩を震わせ笑いをこらえるスタッフも。

「お、島ドーナッツ。まだあるのか」

早速買い込む男に村雨が首を傾げる。

「美味しそうだけど、そんなに買いこんで大丈夫なの？」

「美味しいし人気だからな。MARUHIや農協じゃ売り切れだったろ？」

そう言えばそうだったと納得の村雨。

「さてつと、パラミツのアイス……あ。新作出たのか。どれにするか」

男が「パクチー&セロリアイス」と「キャベツ&セロリアイス」に目を留める。

「前にパラミツのは食べたから……。このパクチー&セロリアイスを試してみるか。鳥キヤベツのアイスクリームも気にはなるが」

「じゃあ、私は島はちみつのアイスクリーム試そつと」

飲み物にローゼルのジュースとパッションフルーツのジュースを注文し、空いているイートインコーナーに腰掛ける。

「ふうん。キヤベツのジャムとかセロリのジャムとか色々あるのね。鎮守府でも作れるかな？ 間宮さんや鳳翔さん達が暁ちやん達が野菜を中々食べないって困ってたから」  
「このパクチー&セロリアイスとかみたいに氷菓子にしてみたらどうだ？ ……実はゴーヤだけは俺も苦手で、チャンプルよりも薄く切ったのを揚げたり、漬物とかバナナや牛乳と一緒にジュースにして飲む事が多いからなあ。無理に食べさせて苦手意識持たれるより少しでも食べられる事に——」

アイスが固くスプーンが通らないため、溶けるまでの間にジャムやカードを纏めて買う村雨。

「溶けた？」

会計を済ませコーナーに戻る。

「ホレ」

とパクチー&セロリアイスを差し出す男。

「意外と美味しいね」

「本当に予想外だった」

村雨が島はちみつのアイスクリームを舐め

「うん。これも美味しい。蜂蜜、瓶詰めがなかったのは残念だったな」

はい。と男に島はちみつのアイスクリームを渡す。

「うん、島はちみつの良いな、程よい甘さで。パラミツも良いけどな」

その言葉に、あつちでパラミツのナッツ差し上げますってあったよ、と村雨。

アイスクリームを食べ終え、店内を物色する2人。

「島キャベツのジュースか……」

どうしようかなと思案顔の村雨に

「お、パラミツ」

と村雨を手招きし、写真を撮る。

「お二人さん、これどうぞ」

とスタツフから、船の中で食べてね。とパラミツのナッツを渡される。

「ご馳走様〜」

と声をかけ店を後にする二人。

「まだ時間はあるけど、待合行く?」

時計が13時を回っている事を確認した村雨が尋ねる。

「そうだな……ちよつと郵便局寄ってから行くか」

「郵便局?」

「そつ。記念切手買つてはがき出して風景印貰うかなつてな。村雨が帰るのが31日でギリギリ間に合う筈だから」

「あ、じゃあ行く」

郵便局に着くとブラインドが下りている事に気が付く。

「あ、今日は土曜で休みだったのか。風景印は諦めて切手買うか」

MARUHIで販売中との表示を見てMARUHIに向かう。

売つてないんですよ。と言う言葉に肩を落とす二人だったが、でも内地でも買えますよ? という言葉で戻ったら買おうと店を後にする。

男が道を渡り、通りの寿司屋に入る。

「まだ食べるの?」

「違う。帰りの船で食べる島寿司を予約していたからね、受け取らないと」

と料金を精算し島寿司を受け取る。

「もう結構いるね」

船客待合所に着くと、長椅子には多くの人が腰かけていた。

「荷物は……まだ来ないな」

「じゃあ、先に乗船手続きしておこうよ」

「……えつとな」

動かない男にピンとくる村雨。

「あ、リュックの中に券入れっぱなしでしょ？」

頭をかいて誤魔化す男に、仕方ないな。と腰に両手をあて溜息を吐く村雨。

「しょうがないなあ。じゃあ座って待ってよ？」

「あ、アンケート書いて置こう」

船客待合所の中にある観光協会の案内所でアンケートを記入する二人。

来島記念のスタンプを押し、返還50周年のクリアファイルを貰う。

「あ、このポスターも貰えるんだ」

A1サイズのポスターを1本づつ貰い、長椅子に座る。

「あ、あそこでもお土産売ってるんだ。海豚屋だつて」

「ああ、あそこで買っても良いけど種類はそんなにはないからな」

そうなんだ。と村雨が周りを見回すと入口にある自販機が目に入る。

「あ、そこで飲み物買ってくるね」

「ん？ あ、そこは駄目だ」

「え？ 何で？」

「そこは高い。同じものが通りの反対側に売ってるから、そっちで買った方が30円ほど安い。外に行くのが面倒ならそこで買っても良いけどな」

「そうなんだ。じゃあ向こうで買ってくるね」

手を振り外に出る村雨。

暫くして、

「買ってきたよ。ハイ」

とペットボトルを渡してくる。

「船、思ったよりは揺れてないね」

外に泊まるおがさわら丸を見て呟く村雨。

「湾内だからな」

「そっか。台風、どこまで行ってるのかな？」

「ん？ 未だ伊豆辺りじゃないのか？」

そんな取り留めのない会話をしているうちに、午前中のツアーに参加していた観光客が集まってくる。

「あ、あれ見て」

同じ宿に泊まっていた親子連れが購入したらしい鯨の髭を指さす村雨。

「あれって薬局に売っていた髭よね？」

「ああ。あれは……7、8万円で売っていたな。んで、向こうの人が買っている髭は確か……5、6万円だな。髭は最低で3万円位だ。これからもっと値上がりするけどな」

と、別の観光客が購入したと思しき髭を指す男。

「お金持つてるんだね」

まったくだと頷く男。

「それで、今持っているのは？」

「……50000円」

「うわ。……二人で25000円？ なにも買えないね、それは」

「アイスとH A H A J I M Aでアップルパイとクロワッサン買ってカクテル一杯頼んだらお終いかな。飲み物は買ってあるから大丈夫だけどな」

14時半近くに荷物が届き、乗船手続きを行う二人。

「良かった、無事に手続き終わって」

半分窘めるような村雨の視線に

「悪かった悪かった」

男が謝る。

待合の外を眺めると、写真を撮る観光客がちらほらと見える。

「あ、見てみて」

と指さす村雨の先には往路では気付かなかった小笠原諸島返還50周年のラツピン  
グが見えた。

待合所を振り返れば案内所の上に中学生が描いた小笠原諸島返還50周年の絵が展  
示されている。

「あ、あそこにもある」

と村雨が、海豚屋の上を指さす。

「今年は記念の年だから、いつもと違って壁も賑やかだよな」

と、男が呟く。

15時を過ぎた頃から乗船時間の案内が流れ、15時20分から700番台から順に  
乗船が開始される。



「あ、呼ばれたよ、500番台。行く」

村雨が男の手を引き、船に乗り込む。

「ふうう。やっぱり船内は涼しいね」

息を吐く村雨を、

「ほら、急いで外行くぞ」

カメラを持った男が急かせる。

「え？ どこ行くの」

6層目の船外甲板に出る二人。

誰もいない甲板の縁に男が陣取る。

「なにかあるの？」

下の行列を眺める村雨。

「あ、あの女の女の人凄い恰好ね。半分以上見えてる」

その言葉にどこだ？ と探す男。

「嘘に決まってるでしょ。スケベなんだから」

村雨が睨むも

「アハハ、男の性って奴だ、許せ。いや、偶には居るからな。……あんな風に」

男の差した指先を辿り、慌てて男の視線を遮る村雨。

視線の先には背負った荷物の所為で服が着崩れ、上から見ると胸の谷間が露になつて  
いる学生と思しき女性がタラップを上がつていた。

乗船した観光客が次第に甲板に集まってくる。

「なんか随分集まつたね。何かあるの？」

「知らなかつたか？ 船のお見送りだよ」

その言葉で下を覗く村雨の目に太鼓が並んだ光景が飛び込んでくる。

「あれって？」

「ん？ あれが航海の安全を祈る見送りの小笠原太鼓。ふむ、今日は南洋踊りは無しか」

ドラの音と共に出航を知らせる曲が流れる。

15:30——おがさわら丸出港。

7月28日——旅行第5日目 夕方——

出航直後からレイが投げ込まれ始める。

二人がその様子を見てみると、船が追い付いてくる様子が映った。

「あれ？ 船が4隻追いかけて来るよ？ あれがお見送り？」

「うくん。そうなんだけど、数がいつもより少ないな。4隻か……」

そんな会話をしている二人。

「今日は着発便だから皆観光に行ってるのか」

そんな声が隣から聞こえる。

「そうか。着発便だと船、こんなに少ないのか」

いつもは着発便ではない為に見送る船が7〜8隻はいるのが当たり前であった男が  
呟く。

「あ、見て見て。上の方に人が集まつてるよ？」

村雨が指を差す。

「え？ 飛び込むのか。この荒れで飛び込むとは思わなかったな。村雨、あの船から飛

び込むからカメラ構えていた方が良いぞ？」  
「そう言いカメラを構える男。」

「うわー。凄い。飛び込んだ」

「村雨が燥ぐ。」

「あ、あの船も」

見送る船は二見湾を過ぎた所で停泊した様だった。

「あ、もう終わりなのね。残念」

「皆飛び込んだからな」

と、男の目に1隻の船が映る。

「おや。向こうから1隻、すごい勢いで来るな」  
男が指さす方向に目を向ける村雨。

「あ。ホントだ」

「あれは……ドリーム号Ⅲか。観光帰りかな？」

見覚えのある船影に目を細める男。

暫く並走した船からスタツフ達が飛び込む姿を写真に収めると、船内へと戻る。

「アイスでも買って戻るか」

展望デッキでアップルパイとクロワッサン、カクテルのサンセットを購入し、船内シヨップに立ち寄り、アイス最中と買い忘れたローゼル塩饅頭を購入する。

「うゝむ。ローゼル塩饅頭買い忘れていたとは不覚。P A S M OとS u i c aが使えるから良いもののちよつと心許ないかな」

「大丈夫？ 夕食とか朝食も食べるんでしょ？」

そんな村雨の問いかけに

「多分食事は無理かな。これから荒れるから部屋で大人しくしている心算だし」

「そうなの？」

「多分、一等甲板はすぐに閉鎖されるから今のうちに見ておいた方が良いでしょう。つと」

横揺れが船を襲う。

「あ、確かに揺れるね。じゃあ、ちよつと見て来るね」

「行つてらっしゃい」

村雨を見送り船室に戻る男。

「あれ？ ……さすが一等。思ったより揺れはないか」

部屋に戻ると島の生協で買っていたアルコールや菓子、船内で購入したパイやカクテ

ルをテーブルに並べる。

「さてと、映画でも観る前に写真でも撮っておくか」

船室の窓にカメラを置き、構える男。

「おっと」

揺れるなあ。と独り言ちる男。

やがて村雨がただいま。と戻ってくる。

「すごかったよ。カツオドリがぼしやつてトビウオ狙つて水面に突っ込んでくるの。カツオドリつて遠征中もあんまり見ないから、面白かった」

ほらほらと写真を見せる村雨。

「お、すごいな」

ソファに座りカメラを見る二人。

「おっとつと」

「意外と揺れるね？ 大丈夫？」

横揺れに身体ごと傾く男を村雨が支える。

「すまん。まあ、そのうち少しは収まるだろ」

父島を出港して30分もすると男がデッキで予想した通り、海面状況が思わしくないため一等船室前のデッキを封鎖すると船内放送が流れる。

「30分で封鎖か。少しは収まると思ったんだが……外したな。思ったより封鎖が早いな。……こりや外部デッキが封鎖されるのも時間の問題かな？」

男の言葉に、

「多分大丈夫だとは思うけど、どれくらい揺れで外部デッキつて封鎖になるの……？」  
男から凡その目安を聞くと、自分の経験からそこまでの揺れではないと判断する村雨。

「でも、夕日は無理かも。水平線に雲が湧いているから」

「そうか。あ。そう言えば洗濯物如何した？ ドラム缶に突っ込んでいた奴」

「あ。ちよつと出してみる」

艀装を展開しドラム缶から洗濯物を確認する。

「んくと、これは乾いている。これも……これも……あ、これはまだね、これもか。……後は乾いているかな」

まだ乾いていない自身と男のスラックスを取り出す。

「これが乾いてなかったみたいね」

「窓辺に置いて置けば乾くだろ。日除けスクリーンを降ろしておけば熱がこもって乾き

やすくなるしな」

窓辺に生乾きのスラックスを並べてスクリーンを降ろす村雨。

「それで、この後どうするの？ もうお金もないんでしょ？」

「ああ。だから、することは一つだな」

そう言うのと男が遮光スクリーンを降ろす。

暗くなる室内。

スクリーンを降ろしソファーに座った男の手が村雨に向かって伸びる。

「え？」

男の手が身体に触れ一瞬身を固くする村雨であったが、男の手はその奥にあるリモコンに伸びる。

「さて、何やってるのかな、船内DVDは」

「……」

無言でクッションを持ち、男に押し付ける。

「ちよつ。いきなり何だ？ 待て、クッションを押し付けるな」

多少のじゃれあいもあったが、揺れを感じながらキンコングを鑑賞する二人。

「ん〜。昔のキングコングと違うのね」

些か不満げな村雨。



「なんか……派手なんだけど——よね。もう少し——ただけだね」

聳島列島の北ノ島を過ぎた頃、陽が落ち始める。

それを船室の窓から眺める二人。

「綺麗……。さつきまで出てた雲もないし、このまま水平線に沈んでくれればいいな」

村雨が沈む夕日を見つめる。

「……そうだな」

見つめているうちに水平線上に雲がかかりはじめる。

「あ……」

「……」

残念そうな村雨の肩に手を乗せる男。

「うん。仕方ないよね」

そう言いながらも、残照を見つめ続ける村雨。

最後の一筋まで消えたところで視線を船室に戻す。

「夕食はどうするのって、これって買ってきた島寿司？」

「そう。いつも帰りの夕食はこれとカクテルで済ませるんだが……」

「私はこれで良いよ？ ステーキとか来るときに食べたし」

夕食を終え、寛いでいる二人。

「なんか揺れが激しくなつて来たね」

「ああ。村雨、シャワー浴びて来るか？」

「憲広はどうするの？」

「浴びてくるつもりだが？ 村雨も嫌だろ、汗臭いのがいると」

「私は気にしないけど？ こんなに揺れてるけど、大丈夫？」

シャワーを浴びに行こうと男が立ち上がった所に横揺れ。

バランスを崩した男を村雨が支える。

「ほら、危ないわよ。今日はこのまま寝ちゃいませよ？ 私が面倒見てあげるから、ね？」

「そうするか……転倒でもしたら大事だしな」

2010年9月の台風の最中での出航を思い出す男。

「済まん。テーブルの上の物を降ろしておいてくれ」

そう村雨に頼み、男がベッドに横たわる。

「ハイハイ。おやすみなさい」

「寝たのかしら?」

村雨が男を覗き込む。

「……ぐつすりね」

男が時々自分にするように寝ている男の頬を突く村雨。

「……後2日か。……仕方ないわよ、ね」

村雨が儂げに微笑む。

「でも、出来ればこのまま、繋がっていて欲しい……な」

村雨の目から雫が一つ、また一つと零れる。

「……明日には話さないとね。穴が消えるかもしれないって。……此方と彼方の強固な

繋がりが、か。難しいよね」

目元を拭い、立ち上がるとスイッチを消す。

「おやすみなさい」

室内が闇に閉ざされる。

寝ていた筈の男の目が開き

「……村雨」

眩きが真つ暗な部屋に木霊する。

## 7月29日——旅行第6日目 未明——

「……むう。眠れん」

村雨の呟きが耳に残り、寝付けない男

寝返りを繰り返すも一向に眠気が出てこない。

「12時か……」

身体を起こし、様子を窺う男。

隣のベッドから規則正しい寝息が聞こえる。

足下の常夜灯を頼りに村雨の様子を窺う。

顔に涙の跡が残るのを軽く拭い、少し落ち掛けていた布団をかけ直す。

「……繋がり、か」

村雨の傍らに膝をつき、その顔に掛かる長い髪を梳く。

「……すぐに別れるからのめり込むなって自分に言い聞かせてたんだけどな……」

出会った日の翌日に村雨の旅行用品を買い揃えに出かけたシヨッピングモールで燥ぐ村雨を見ていると、過ぎ去った昔を思い出して余計なものまで揃えそうになり我に返り呆れた事。

村雨は艦娘、すぐに別れるからのめり込むな。と自分に言い聞かせながら過ごす内に、せめて此処にいる間は艦娘であることを忘れて欲しいと、接し方を変え——。接する内に、この娘の全てが欲しい。と黒い欲望が沸き上がるのを必死で抑える自分がいた。

「……大変だったんだぞ、お前の誘惑を断ち切るのは。何時まで理性が持つか冷や冷やもんだったんだからな」

村雨の頬を突く。

繋がりか。と自分のポケットを弄る。

「……こいつだけじゃ足りない、かな」

あの夜、村雨から言われた問いに対する答えがそこにあつた。

暫く髪を梳いていた男が眠気を催してくる。

「……ようやく眠れそうだ。おやすみ、村雨」

自分のベッドに男が潜り込むと直ぐに寝息が聞こえ始める。

男が深い眠りについた暫く後——。

「……ん」

微かな声と共にカフェオレ色の髪が揺れる。

「？ 未だ1時か。……今どこなんだろう？」

男を起こさないように村雨がTVをつける。

「鳥島の近くなんだ」

スクリーンをめぐる村雨。

「……何にも見えないか。向こうじゃこんな夜遅くに民間船が護衛も付けずに航行するなんてあり得ないのよね。……平和になつたら、こんな風にのんびり旅行するのも良いわね。何時になるかわからないけど」

ふと傍らの男を見る。吹き出す村雨。

「あらら。もう、寝相が悪いんだから」

しようがないなあ。と言いながら床に落ちていた掛布団をかけ直す。

「そっか。提督と実際に出会ってからまだ2週間経って無かつたんだよね」

色んなことがあつたな、と思い返す村雨。

「初めの内は信用できなくてあんまり眠れなかつたのよね……。私用の部屋って言われた部屋にも鍵がついてなかつたから何時入ってこられるか分からなかつたし」

旅行に行けるか分からなかつたのに随分色んなもの買って貰つたから却って信用できなかつたのよね、と男の傍らに膝をついて座り込み顔を突きながら独り言ちる村雨。

男が寝返りを打ち背中を向ける。

でも。と、旅行前の一週間を振り返る村雨。

「提督、優しかつたし色々誘惑しても手を出してこなかったからね。それで信頼できるかなって思えたんだよ？ 艦娘だって判ってるのに、ここにいる間は艦娘じゃなくて普通の女の子だって。来るときも混んでいた山手線で私を庇ってくれてたし。……私ってそんなにチョロかつたかなって思うんだけど、仕方ないよね。……帰って練度上げてもらってケツコンカツコカリするだけでも良いかなって思ってたんだけどなあ」

あと少しでお別れかもって思うと寂しいよ。と泣き笑いの村雨。

「鎮守府に戻っても——大事にするから」

男の頭を撫で、再び眠りにつく村雨。

携帯から流れる音楽。

「……朝か」

男が起き上がり、隣のベッドを見る。

「……良く寝てるな、村雨」

カメラを片手に外部デッキへ向かう男。

「つとつと。……揺れるな」

船が揺れるなか、階段を手摺を伝いながら上る。

デッキの出入口は水密扉で閉ざされ、乗客が数名屯していた。「なんだ、開いていないのか」

暫く待つても水密扉は固く閉ざされ船員が開けに来る気配もない。扉の前に集まっていた乗客も一人また一人と立ち去る。

「帰るか」

男も諦めて手摺を伝いながら部屋に戻り、村雨が目覚めていないのを確認して船室の前にある洗面所で身支度を整える。

部屋に戻り僅かに陽が零れるのを目にしてスクリーンを捲ると夜中に潮を被ったのか窓に白いものが付着していた。

「随分荒れたな」

スクリーンを戻しベッドに戻る。

「……」

村雨の傍らにしやがみ込み。

「良く寝てるな。……後二日か、この寝顔を見られるのも」

そつと髪に触れようと手を伸ばし――。

村雨が目を覚ます。



素早く手を引き、

「お。起きたか？」

と声をかける。

「…………おはよ」

目を擦りながら身体を起こす村雨。

「…………朝日は？」

寝ぼけ眼で窓に近付き——。刹那、船が大きく揺れる。

「キャッ」

「つと。…しまっ」

体勢が整わないまま村雨が倒れ掛け、男が支え——切れずにベッドに纏れ込む様に倒れる。

「…………」

村雨が男の上に重なり、男の手は村雨の背中に廻されている。

自分の状態に気が付き、身を固くする村雨。

「……………」

長い沈黙が室内を包み込む。

村雨が抜け出す様に上半身を男から離す。

そのまま男の目を見つめ――。  
「提督。大事な話があるの」

7月29日——旅行第6日目 午前——

「話……?」

至近距離でいっになく真剣な顔で男に向かい合う村雨。

「うん。大事な話」

男も身体を起こし、抱きしめていた村雨の身体を傍らに降ろす。

「……」

無言で続きを促す男。

何度か深呼吸をして村雨が

「提督の部屋にある私達の世界とつながっている穴の事」

話を始める。

「大淀さんから書き換えが終わった連絡があつた時に一緒にメモ書きを夕張さんから渡されたの。明石さんや夕張さん達が私がこつちに來てからも調査を続けて、その情報を色々と大淀さんが分析していたんだけど、あの穴っていつ消えるか解らない事が判つたんだって。7月中は大丈夫そうだけど、それ以降は解らないって。ただ、私達の世界と此処の世界で何らかの繋がりがあればあの穴って消えないらしいの。精神的なものな

のか立場的なものなのか、それとも……それは解らないんだけどね。……提督、私ね、初めの頃は特に何の関心もなかったの。実はこつちに来る権利を皆でじゃんけんで争ったんだけどね、じゃんけんが始まる前から、夕立が提督の世界に興味を持つちゃってどうしても行くつてすごかったの。でも私は大事な姉妹が一人で知らない男性に会いに行くなんて認められなかった。だからじゃんけんに参加して私が勝とうつて。夕立とは最後まで争ったんだけど何とか勝てたんだ。それで、勝つて良かったつて。それだけだったんだ……」

男から視線を逸らし足下を見つめる村雨。

「それでね……。こつちに来てても、提督がもし私に手を出してきたら直ぐに鎮守府に戻つてこんな男だったつて言つてこつちの世界に幻想を持たせないようにしてやるうつて……。そう思つていたんだ」

でもね。そう言つて顔をあげる村雨。

「提督、優しすぎるんだもん。初めは人から嫌われないように嫌われないようにつていう弱さの裏返し of 偽りの優しさかなつて思つてただけね。違つたのよね。見た目の優しさだけでなく強さも持つていた。覚えてる？ こつちに来てから4日目の夜の事。番組見ていて色々と言ひあつたよね。その時に優しいだけでなくて時には叱つてくれる強さ。んと、柴大将閣下とか……。そこまでは言い過ぎだけどね。でも、そんな感

じの力強さも持っていたのが判っちゃって……」

顔を伏せ、

「ずるいよ……。そんな昔のあの人達を思い出させるような強さ知っちゃったら、私達

……好きになるなっていう方が無理だよ……。？」

目元を拭い、

「だから……。責任とってね？」

無理矢理作り出した笑顔。

痛々しいその笑顔を見ていられずに、

「……村雨」

男が村雨を抱き寄せ——。

室内に、ぐうぐうという音が響く。

あつと顔を赤らめる村雨。

訪れる沈黙。

やがて、どちらからともなく笑いを堪える声が生まれ、

「……プツ」

堪えられずに笑い声が噴き出す。

「ムードぶち壊しだな」

「ホントよ。憲広、こんな時に」

「お腹の虫は、村雨だろうよ」

お互いに笑い合い

「朝食、食べに行こう？」

弾む足取りで部屋を出る村雨。

後ろを向き、

「ほら、早く」

そんな村雨を見遣り、後を追う男。

(……村雨から言わせるのは、らしくないよな。船を降りたら俺の方から言わないとな)  
「判った判った。腕を引っ張るなって。食堂は開いたばかりだからまだそんなには混まない。だから大丈夫だって」

7月29日——旅行第6日目 午後——

「ね、あの島つて三宅島？」

甲板に出た村雨が指さす。

「あれか。うん、……あれは三宅島だな」

村雨の指さす方向を確認し、手元に視線を落とした男が答える。

「さっきから何見てるの？」

そんな男の様子にその手元を覗き込む村雨。

「あ、タブレット繋がるようになったんだ。どれどれ……」

男の肩越しに地図アプリを起動する村雨。

その柔らかなさと香りに男が焦るが村雨は意に介さない。

「ふんふん、今見えてるのが三宅島で、反対側に神津島があるのね。御蔵島は三宅島の隣のあの島か」

暫く男のタブレットを操作していた村雨が

「あ、またつながらなくなっちゃった」

残念そうにつぶやく。

「まだ内地からは遠いからね。湾内まで安定した通信環境はお預けだ」

仕方ないなあと甲板の手すりから海面を眺める村雨。

「村雨、部屋に戻るけどどうする？」

声をかける男にもうちよつといると返事をし、海面を見続ける。

「もう、海鳥も違つてきたんだよね……」

トビウオを狙う海鳥がカツオドリからアホウドリやミズナギドリが中心になり、内地が近づいてくるのを実感させられる。

「海の色も違つてきたし。……もう直ぐ、お別れかな？　でも……」

今朝の一件を思い返す村雨。

朝食から戻り身支度を整える二人。

改めて続きともいかず互いに気まずい空気が漂う。

(さつきは途中でムード壊しちやっただけど、もう一度……)

村雨が呼吸を整える。

「提督。……ううん、憲広、さん。私はあな」

言葉を紡ぎだす村雨の口元を軽く人差し指で押さえる男。



「村雨。その言葉は俺の方から言わせて貰えないかな？」

男が村雨が予想していなかった言葉を紡ぐ。

頷く村雨。

無言のまま暫く時が流れ——。

言葉が出ないことに首を傾げる。

男を見つめる村雨。

「今は言わないぞ？ 金剛だって言ってるだろ？ 『時間と場所をわきまえなヨー！』つて」

男が村雨の額を突く。

「金剛曰く『時間と場所もそうだが、ムードとタイミングも忘れてたらNOなんだからネ……？』だからな」

言外にムードのあるところでやり直す事を約束する。

「金剛さんの真似、似合っていないわよ」

でも。と

「期待しているから」

その光景を思い出し口元が綻ぶ村雨。

「私も部屋に戻ろつと」

踵を返し船内に戻る村雨。

売店で限定版のアイスを買って船室に戻るとアップルパイやクロワッサン等がテーブルの上に並べられている。

「どうしたの、これ？」

「昨日買って食べきれていなかった分。村雨、昼食はこれな。Suicaの残額も630円になったから食堂は無理。船じゃチャージもできないしな」

「別に良いけど……。まだ10時半よ？ お昼には早いんじゃない？」

「そりやそうだ。取り敢えず並べておいただけだから、適当にとればいいさ」

そう言うのと男は窓に近付き

「如何かな？」

自分のストラックスの乾き具合を確認する。

「乾いたようだ、俺のは」

「私のは？」

「触っていいのか？」

「ん。ブラとか触られるわけでもないし。ストラックス触った程度じゃ騒がないよ？」

乾いている様だ。と男が確認し、村雨に渡す。

「それじゃ、着替えちやおうかな」

男に視線を投げる。

「はいよ。デツキに上がるから」

そう言うと男は鍵を持ち外に出る。

階段を上がり第6層からデツキへ。

「うへえ。いきなり暑くなった……」

南国の小笠原から帰ると涼しくなるのが昨年までの恒例だったのだが、今年に限ってはむしろ内地に戻ってくる方が暑くなるという逆転現象が起きていた。

「暑い……」

三宅島は遙か後方に去り、大島は未だ見えてこない、そんな位置。

「うくん、海の色も微妙に変わって来たなあ。位置的には新島も見える筈なんだが……見えないか。今は……11時か。あと40分で大島。2時間もすりや東京湾か。現実に戻される海の色は見たくないんだけどなあ。……洲崎過ぎたら村雨に海の色見せてやろ」

デツキから船内に入る男。ノックをし返事を確認して中に入ると、村雨は行きと同じノースリーブブラウスとアースグリーンのストラックスで船内放送を見ていた。

「あ、お帰り」

男の姿を確認すると、カメラを手にする村雨。

「ね、ここに何処？」

男がカメラを手にする。

「ああ、此処か。あれ？ これ去年のか。消してなかったんだな」

「そうなの？ だから見たことなかったのね」

「大規模作戦で……行けなかったな、小笠原までは」

「そ。だから、ここに何処かなくて」

「ん？ ここは亜熱帯植物園だな。小笠原世界遺産センターの映像であつたら？」

「あ、そう言えばあつた。じゃ、これってノヤシ？」

「そうだな。シンボルのノヤシだ。ンで……これか」

「緑色のキノコ？」

「グリーンペペな。名前の由来が今一解らん。食べたらずでペツペツつて吐き出した事から来たとか、八丈島の方言とか、ペペ爺さんが見つけたからとかガイドさんに色々教わったんだが」

「そうなの？ あ、これが昼間見たグリーンペペね。白いんだ」

「そ。亜熱帯植物園のトイレの脇にあるんだ」

「ここは？」

「ああ、これ？ 前浜の展望休憩広場の奴だな。ゲゲゲハウスって呼ばれている奴だ」

「前浜？ 大村海岸の事？ それとゲゲゲハウスって」

「そ。大村海岸。前浜は島の呼び方だな。ゲゲゲハウスの由来はゲゲゲの鬼太郎の家に似ているから。だそっだ」

「色んなところがあるのね（ゲゲゲの鬼太郎って、アニメのアレよね）」

「ンで、これがおが丸の正面」

「これは？」

「ん？ ああ、青灯台の下だな。魚の影が映ってるだろ？」

「あれ？ ここって、スーパー。こんなのも撮ってたの？」

「ここは生協に……あ、MARUHIまで撮ってる」

そんな中、画像の一つを目にした村雨。

「……これって」

画像の一つを男に見せる。

「これって、どういうこと？」

不機嫌な表情を隠さない村雨。

「あ、これな。これは……」

小港海岸で撮った写真に写り込んでいた上半身裸トップレスに見える外国人女性。

「上の方見てみ。ハチの巣があるだろ？」

「あ、ホントだ。……って、この人危ないんじゃない？」

「うん。だから撮ってみた。面白い構図だろ？ 『寛ぎの時間と気づかぬ危険』って感じで。あ、ハチの巣の事は撮った後にちゃんと教えたから。教えたら慌てて逃げたけどな。ついでに言うところの女性上半身裸トップレスじゃないからな？ ベージユの水着だからな？ よく見てな」

疑いの表情を隠せない村雨であつたが、拡大すると確かに水着を着用していた。

「あ。ホントだ、水着着てる」

「上半身裸の盗撮なんてするわけないだろ？ 少しは自分の提督を信じて欲しいなあ」

「ごめんなさ〜い。反省反省」

ちよろつと舌先を出す村雨。

「つたく。反省してるのか？」

デコピンを一発お見舞いする。

「だって……スケベなんだもん、出航前のこと覚えてるからね」

そんな風に昔の写真を見ていると、レストランが開いたという船内放送が流れる。

「お、レストランが開いたということはもう大島が見えるか。ちよつと見に行くかな」

「あ。私も行く」

デツキに上がる二人。

「あれ？ ……う〜んと。 ……やっぱり軍艦かなあ」

目を細め、遠くの船影を確認する村雨。

「ん？ 軍艦？ どれどれ……あれか。 ……よく見えるなあ」

カメラの望遠を最大にして確認する男。

「だって私、艦娘だよ？ これくらい距離で解らなかつたら轟沈しちゃうよね？」

「そりやそうか。それにしても自信なさげだったな」

「だって、軍艦なんてあつちじゃ滅多に見かけないもん。私達が生まれる前にほとんど沈んじゃったんだって」

話を聞くと、海上自衛隊の艦船は深海棲艦が確認された後に民間船の護衛等に就いたものの隣国中国や朝鮮とその協力者の圧力や野党等の反発等で先制攻撃を厳しく戒められていた為、満足に交戦できず殆どが一方的に沈められたという。

「そのお隣さんはもうないんだけどね……」

艦娘が現れた直後から深海棲艦の攻勢が激しくなり一時期は本土と四国間や九州と対馬・壱岐も寸断されかけるなどの被害があつたらしい。幸い今は本土近海の航路は奪還できたが、それでも夜間航行は認められていないらしい。

「ゲームに無かつたよな、そんな設定……。ンで、中国や半島がもうないってのは？」

「簡単な事よ。深海棲艦に対抗できる艦娘がいなかつたからね。最後の方は慰安婦や南京の賠償代わりに艦娘を寄こせて圧力が内外からあつたらしいけど、被害を受けていた国民が隣の火事より自宅の消火が先だって黙ってなかつたらしいのよ。そのうちに



音信不通になっちゃったんだって。難民船も出たらしいけど対馬にも澎湖諸島にも着いていないから、多分……。台湾には寧海さんとか平海さんとか楚謙さんとかいるんだけど」

昔は敵国の軍艦だったけど、今は好敵手せんゆうなのよね。

そんな話を聞き向こうの情勢に興味を抱く男。

「そんな状況なのか。ここじゃ何だからちよつと船室で詳しく聞きたいな」

デッキから船内へ移動する2人。

船室では村雨が向こうの世界情勢を説明して男が相槌を打つ。そんな状況が暫く続く。

やがて船内放送で洲崎と三浦半島の案内が流れる。

「あ、そうだ。村雨、もう一度デッキに行くぞ」

「なにかあるの?」

そう言いながらデッキに上がる2人。

「……なんか、こう……」

がっかりした村雨に映る海。

「海の色って、こんなに変わるの?」

「現実に戻される色なんだよな……。もっと酷くなるけどな」

「なんか……がっかりだよ。こんなの見たくなかったんだけど？」

「……まあ、南国の夢気分から現実の社会生活に戻るための儀式なんだ」

黄昏気味の男の肩をポンポンと叩く村雨。

「さて、飯だ飯だ。下船の準備は14時頃だからまだ早いけどな」

「はーい」

船内に戻りパンや飲み物、小笠原で買い込んだ缶詰を空けていく。

「何か……眠くなっちゃった」

パンや缶詰を平らげ、船内放送を見ているうちに村雨が眠気を訴える。

「俺も……」

村雨の欠伸を見ていた男も

「……ひと眠りするか」

タイマーをセットし遮光スクリーンを降ろして自分のベッドに転がる。

目を覚ます男。

「……？ ゲッ！ 聞き逃したかつ！」

隣のベッドで寝ている村雨を揺すり起こす。

「……なあに？」

寝ぼけ眼を擦りながら起き上がる村雨に

「起きろ。下船準備だ」

「え？」

村雨が慌てて時計を見ると針は14:40を差していた。

乗船チケットを取り出し、荷物を背負うと扉をあけ放ち下船口に向かう。

「遅かったか」

下船口前を見て男が声を上げる。

既に周囲には多くの荷物が置かれている。

「まあ仕方ないか。……遅くなっても別に構わないしな」

「しようがないよ。荷物置こ？」

「だな」

荷物を置いたところで、男が気付く。

「あ、船室確認してくるな。ちよつと待っていてくれ」

「ん。良いよ。行つてらっしゃい」

男を見送る村雨。

「あ。あの鯨の尻尾、可愛い」

階段の鯨の尻尾——尻尾が出ている水面が喫水線の位置を表している——を見たり、  
「受付台つて南国の海をイメージしてるのね」

荷物に腰掛けながら周りを見回す。そんな村雨に

「お、また会ったな」

声をかけたのは、父島の昼食時に会った二人連れであつた。

「あれ？ 旦那は？」

「あ、忘れ物が無いか見に行つています」

「何だ、一人で居てナンパされても知らんぞ？」

「大丈夫ですよ。すぐ戻つて……あ、来た」

「やっぱり大丈夫だったよ。あれ？」

村雨の傍らに立つ二人に気が付き、

「ああ、父島ではどうも」

「可愛い若奥さん一人にするんじゃないよ、ナンパされて無理矢理どつかに連れていかれても知らんぞ？ 近頃マナー悪いのが多いからな」

「そうですね。昔とは違つてきてますから気を付けなにと」

「そうそう。気をつけろよ？」

挨拶を交わし、

「んじやな。また島であつたら宜しくな」

立ち去る二人連れ。

「何か色んな人に会うなあ。さつき船室の前で宿にいた親子連れに会つたよ。2つ先だつたみたいだな」

「あ、あの人達？ やっぱり一等に居たんだ」

そんなことを話していると、スタッフが水密扉を開ける。

「戻つて来たのが一目でわかるね」

外の景色を見て村雨が心なしか寂しげな声を上げる。

「ちよつと船室から撮つて来たんだが……」

と写真を見せる男。

「うわ……汚いなあ」

「……」

更に他の写真を見せる男。

「ここまで汚いと笑っちゃうね」

苦笑する村雨。

「あ、船だ。何の船だろ？」

「コンテナ船かな？」

「大きいよね……」

やがてレインボーブリッジを通過すると、下船準備にスタッフが慌ただしく動く。

15:20——竹芝栈橋到着。

7月29日——旅行第6日目 夜間——

「とちやちや〜」

タラップを降りると駆け出す村雨。

「早く〜」

後ろを振り返りながら男を急かせる村雨。

「はいよ」

のんびり歩く男の傍らに戻りその腕を絡ませる。

「おっとつと。こらこら、危ないだろうが。一日船に乗っていると、陸に上がった時にどうもふらつくな……」

村雨の頭を反対側の手で撫でつける男。

「こつちは暑いね〜」

歩道が狭くなっている芝離宮庭園の傍を通り過ぎ、駅の改札へ向かいかける村雨を男が引き戻す。

「そつちじゃない」

「え？ 地下鉄で帰るの？」

「言い忘れてたか？ 何時も下船後はホテルで一泊するんだ」

「え？」

キョトンとする村雨の手を引く男。

「え？ え？」

戸惑いながらも引かれた手を放さず絡め直す村雨。

地下鉄の入り口を過ぎ、銀行へ入る。

「ちよつと足りないからな。金降ろさない」と

村雨を待たせて金を降ろす男。

「さてと、5万も降ろせば大丈夫かな」

銀行を出て、ここまで来たからと芝大神宮と増上寺を参拝する2人。

「御朱印は良いの？」

「だから祭りの時に頂いたからね。今年は……いや、頂いて置こう」

金運上昇の神様として、また縁結びの神様として有名な芝大神宮という事で縁結びの千木宮お守りと強運お守りをそれぞれ頂く。

「源頼朝や徳川家康も戦勝祈願で参拝したのは知らなかったなあ……」

「勉強不足ね、お父さん」

縁結びの千木宮お守りを購入してご機嫌な村雨が男の顔を突く。



「村雨は知って……いたようだな」

「当然でしょ？ それにしても、此処も変わっちゃったなあ」

辺りを見渡す村雨が、昔の様子を男に語りながら増上寺へ。

「東京タワーって増上寺の敷地に建ってるけど、どういう事情があったのかしらね。知ってる？」

「ああ。東京タワーの建設関係者の一人が増上寺の檀家だったらしいね。その縁で増上寺がお国の為ならつてことで寄付したらしいよ」

安国殿で御朱印、勝運守りと勝運黒本尊祈願札を頂く。

「さて、戻るか。今日は隅田川の花火大会があるから混むしな」

「見えるかな？」

「ちよつと無理だろうな、此処からじゃ」

増上寺から出た二人は1時間程前に下船した竹芝棧橋まで戻り隣接するホテルに入る。

案内されたのは海に面した、19階にあるツインルーム。

「ふわあ。高そうなお部屋。いつもこんなところに泊まってるの？」

「んなわけあるか。此処で一人一泊15,000円もする部屋なんて初めてだ。村雨が来てからすぐに此処を予約し直したんだ。良かったよ、最後の一室が取れて」

「ええ？　という二人で3万円？　嬉しいけど無駄遣いしちゃだめだよ？　私はもつと小さなところでもよかったのに」

男を見つめる村雨。

「村雨……？」

「それでね、もつと応急修理女神とかを増やしてほしいな〜って」

冗談半分の言葉にどう返しが来るかと村雨。

「そつちが目的か！　……まあ、今後は特注家具職人や母港を拡張するより補強増設と応急修理要員や応急修理女神を増やしていくけどな」

冗談半分に言った言葉に対する男の返事は至極真面目なものであった。

「え？」

目を瞬かせる村雨。

「当たり前だろ？　実際に触れあつたら遊び半分で指揮なんか執れるもんか。練度30以上の艦娘には補強増設と修理要員、30以下の艦娘にも修理要員は乗せていくつもりだからな。……こんな可愛い娘を轟沈なんぞさせてたまるか」

その言葉に思わず抱き着く村雨。

「おつとつと。よしよし、何か急に甘えん坊になったなあ」

陸酔いで些か足を纏れさせながらも村雨を受け止め、砕けた口調でカフェオレ色の髪

を撫でつける男。

その言葉で赤くなった村雨が男の胸に顔を擦りつける。

そんな村雨の背中を無言でポンポンと軽く叩く男。

暫く抱き合っていた二人が、どちらからともなく離れる。

「村雨、素泊まりだから食事は何処か食べに行くかホテルのレストランを利用するしかないんだが……」

「ん〜。せつかくだからホテルのレストランで良い？」

「決まりだな。席が空いてるか確認してみるか」

そう言う男が最上階のレストランに電話を入れる。

暫くして予約が取れたと村雨に頷く。

男が電話を切る。

「昨日の花火が延期になってたから今日は予約で一杯だとき。18時半から45分間だけ取れた。ちよつと慌ただしくなるけどごめんな」

「えっ！ ここから花火、見えるの？」

「見えるらしいな。初めて知ったが」

「この部屋からも見えるかな？」

「ここからか？ ……ちよつと待つてな」

そう言うとも男がタブレットで調べ始める。

「本当に小さくだけど見えるようだな。この部屋からも」

「見えるの？」

その言葉を聞きながら、村雨が窓に近づきレインボーブリッジを眺めていると

「そのこのレインボーブリッジからも見えるらしい。こっちは19階だし上にあるからな、意外な穴場だった」

男が窓辺に歩み寄り村雨の傍に立つ。

眼下に広がる暮れ行くレインボーブリッジを眺めながら互いに寄り添う二人。

最後の一筋が消えるのを見つめる村雨。

「沈んじゃった」

寂しそうにつぶやく村雨に男が声をかける

「さて、そろそろ行こうか」

村雨に手が差し出される。

「うん」

最上階のレストランでコース料理を楽しむ二人。

「父島で食べたパスタも美味しかったけど、此処も美味しいね」

オードブルの後に出された茗荷・大葉・ゆで卵のパスタを楽しむ村雨。

「こんな贅沢しちやって良かったのかな？」

「そう思ってるんなら今は料理を楽しむんだな。8月から白露型で一番扱ってやるから」

「お手柔らかにね？」

運ばれてきたグルノーブル風の鱸のポワレに舌鼓を打つ。

「白い皿に映えるよな、鱸周りの赤色野菜。トマトとパプリカかな……？」

口に含み

「焦がしバターのソースが合うなあ……」

口直しのグラニテを食べ終えるとハーブと白ワインで煮たアーティチョークの炒め物を添えた子羊のローストが運ばれてくる。

「……」

声も上げずに一心不乱にナイフとフォークを動かす二人。

くるみパンと、ティラミスとバナナ・苺のデザートを食べコースの終わりの紅茶を含んだ頃、花火が遠くで上がるのが二人の目に映る。

「わあ。あがった……」

同じ様に窓際に居た客からも声が上がります。

「かなり遠いけど、ちゃんと見えるんだね……」

村雨が次々と上がる花火をうつつりと見つめる。

そんな姿を見ながら男が素早く時計を確認すると19時10分を過ぎていた。周囲を見回すとウエイターが足音を立てずに此方に近づいていた。

「村雨、時間だ」

その言葉に窓から自分の時計に視線を移した村雨。

「もう時間なのね。じゃ、部屋に戻ろ？」

精算を済ませ部屋に戻る2人。

村雨が窓辺に駆け寄る。

「ちよと見難いけど、あそこでやってるのがわかるね。打ち上げ場所ってどこなの？」

「スカイツリーの近くだな。スカイツリーはあそこに見える塔だ」

ビルの間に見える塔を指さす。

「艤装展開して近くに行つて見てみたいなあ」

眼下に広がる海面とスカイツリーに繋がる川の流れを見つめる村雨に男が声をかける。  
る。

「行くなよ？ 振りじゃないからな？ それは本気で勘弁してくれよな？」

「冗談に決まつてるじゃない」

コロコロと口元を押える村雨。

「……OKを出したら行きかねん」

「しないよ」

男も苦笑しながら

「近くじゃ見られないが……ほらテレビで中継やってるぞ」

その声に村雨が大人しくテレビの前に陣取る。

燥ぐ村雨を温い視線で見遣る男。

(こういうところはまだまだ子供だな。……俺も人の事は言えないが)

「村雨、お前の頭で画面が見えん。こつちで座って見なさい」

「は〜い。……よつと」

男の膝に腰掛け背中を預ける村雨。その顔には人の悪い笑みが浮かんでいた。

そんな村雨の悪戯に対し、

「おいこら。見えんだろうが」

と男が抱きかかえる。

「キャツ」

腋下から差し込まれた男の腕が自分の胸を押しあげる感触に思わず声を上げる村雨。

「前にも言ったよな？ 冗談はやめろって」

顔をこれ以上ない位に真っ赤に染めた村雨に

「このまま……どうにかしてくれようか？ ん？」

そんな言葉を耳元で囁く男の声に目の前でカフェオレ色の髪が激しく揺れる。

「つたく。よつこらしよつと」

小刻みに震える村雨の身体を抱え直し自分の脇に降ろす。

村雨を降ろして足を組む男。

(やれやれ……気づかれてないよな?)

その動きは村雨の柔らかくも適度な弾力に反応しかけたモノを隠そうとの足掻きであつた。

村雨を見遣ると顔を赤く染めながら自身の胸を押え息を整えている。

暫くして恨めしげな視線を男に投げかけて来る。

「……に言いつけてやるんだから」

「仕掛けてきたのは村雨だよな？」

互いに画面を見ながらの軽い言葉の応酬。

そんな応酬が数往復も交わされる頃には二人とも画面に集中し始めている。

「花火つて平和の象徴よね」

「そうなのか？」

「元々は鎮魂の為なのは知ってるけど、あっちじゃ中々上げられなかったの」



。花火を見ながら村雨が言葉を紡ぐ。

「打ち上げ花火って作るまでに1年近くかかるのもあるでしょ？ よっぽど落ち着いてる時じゃないと大きなのは中々作れないよ？」

そんな言葉にそう言うものかと納得する男。

「んじゃ、此処じゃウンと楽しまないとな」

そう言つてわしやわしやと男の手が村雨の頭を撫でる。

「もう」

擦つたそんな村雨の顔に笑みが浮かぶ。

花火を楽しんでいる二人。やがて

「テレビでスカイツリーのお色直しだつて」

テレビでは時代劇で一世を風靡した俳優が他の出演者と同じ様な内容を話している。それを横目に窓の外に視線を投げる二人。

「あれね」

「テーマは花か……。うん、いい色だなあ」

画面に目を戻すと、ジョッキに注がれたビールが映っていた。

「あ。ビール飲んでる。……提督？」

「そのリユックサクにオリオンビールが入ってるぞ」

部屋に二人しかいない為、村雨がアルコールに手を出そうとしても制止しない男。  
「良いの？」

そう問いかける村雨に

「貞頼さんで言ってたろ。竣工して20年なんてとつくに過ぎてるつて。二人だけの時は止めないよ、絡みや脱ぎ、脱がせみたいな悪い酒癖はなさそうだしな」

その言葉に村雨が缶を二本持つてくる

「良かった。じゃ、乾く杯」

缶を打ち合わせ、喉に注ぎ込む。

「花火を見ながら飲むビール、最高」

男が画面の中と同じようなことを口にする。

「あ、かすみ草だ」

画面と窓の外を交互に見つめ

「ポケモン？　花火だつて」

窓からは解らない形になっている花火を画面で見ながら手元の缶を空にしていく。

そんな中、花火が最高潮に近付くにつれて村雨の言葉数が少なくなつて行き、ついに沈黙の時間が長くなつて行く。

「花火、終わっちゃったね……」

花火大会が終わる寸前から窓辺に立ち花火を見ていた村雨は、大会が終わっても窓から離れようとしなかった。

「ねえ、提督」

村雨が寂しそうに言葉を紡ぐ。

「今朝、提督が俺の方から言わせて貰えないかなって言った時は期待してたんだ。でもやっぱり、私って提督にとっては子供だったんだよね……。今朝のあの言葉だつてその場しのぎだったんでしょ？ ……花火の間は少し期待してたんだけど、やっぱりダメだったね」

振り返る村雨。

「小笠原で聞いたよね。本当に子供にしか見えないの？ ……って。答え、30日までには聞かせてねって。これが答えてことで良いのかな？」

再び窓を向く村雨の目に光るものがあつたことを男は確かに捉えていた。

微かに息を吐き、拳を握り広げる。そんな動きを2、3度繰り返し、

「……村雨」

意を決した男が背後から抱え込むように村雨を抱き寄せる。

「え？ ていと、く？」

男の腕に力が籠められる。

「不安にさせてごめん。……言葉に出さないとだめだつて判っていたんだがな。外見の年齢差とかを考えると一歩踏み出せなかった……。本当に済まなかった。村雨に受け取って欲しいものがあるんだが、受け取ってくれるかな」

その言葉にハッと顔をあげ振り向く村雨。  
涙で濡れた顔が上下に動く。

その動きに男がホツとした表情を見せ——片手で村雨を抱き寄せる。

村雨を抱き寄せる男の片手がスラックスから目的のものを探り当てる。

「指輪は未だ渡せないから……。これで」

そう言う男が目的のもの——ナンバンアカアズキのイヤリングを村雨の右耳につけ、サメの歯が付いているネックレスを首にかける。

ナンバンアカアズキ——『紅豆南国に生じ、春来たりなば幾枝を発す、君に願う多く採りて櫛せよと、此物最も相思なり』と詩仏王維が詠んだ樹。その別名を相思樹と言い、古より相思相愛の象徴とも言われ、また独身者が異性にこの実を贈る行為は意中の人への「貴方を想う」という意思表示とされている。

そしてサメの歯は勇気の象徴であり、海での安全を願う魔除けでもある。

サメの歯の意味は村雨もよく知っている。そしてナンバンアカアズキの意味と別名も艦時代の乗組員が口にしていたことで知っていた。

身につけられた二つに手を遣り

「……お嫁さんは飛龍さんでしょ？ 飛龍さんじゃなくて良かったの？」

かすれた声で男に問う。

「飛龍か……。もしここに居るのが飛龍だったら意識しすぎて今みたいにはならなかっただろうな。あいつは俺の嫁艦だしな。それにな」

村雨との2人旅は案外楽しかったぞ。と片眼を瞑りながら男が宣う。

「そう、なんだ……。提督、私達って相性いいのかな？」

泣き笑い顔の村雨。頷く男が視界に入り——。

「ごめんなさい、飛龍さん。私」

その言葉を村雨の口に当てられた男の指が遮る。

その指が村雨の頬を流れる涙を拭い、村雨の頤をあげる。

窓から差し込む月明かりの下で二人の影が一つに重なった。

——何処かで人の耳には決して聞こえない硬質の擦過音が響き始めた。

## 7月30日——旅行第7日目 午前——

「夕立、どうだ？ 空間の高さは。相変わらずか？」

緋色の瞳の艦娘が穴の中に降り立つ。

「うん。……あれ？ 昨日より速度がすごく落ちたっぽい。昨日まで300mmづつ高くなっていたけど、昨日とは30mmしか高くなっていないの。なんかあったっぽい」

その声を受け長門が夕立に上がるように声をかける。

「……急に速度が落ちた原因は何だ？ まあいい。それより大淀、村雨は戻れそうだな。高さの速度が落ちた原因は村雨に聞けばよからう」

「ええ。村雨ちゃん、戻れそうで良かった。あ、繩梯子か三連梯子用意しておかないと」  
穴から出た夕立を迎えた姉二人が事情を聴き不安そうな眼差しを穴に向ける。

「村雨、何かされちゃったのかな？」

「村雨の事だから大丈夫だとは思うけど、心配だね。戻ってきたら色々聞いた方が良いかもね」

\*\*\*\*\*

「……朝、か」

薄明りの部屋でカフェオレ色の髪が揺れる。

「そっか……私」

唇を押え、昨夜の事を振り返る。

サイドチェストに置かれているイヤリングとネックレスを見つめ口元が緩む村雨。

（良かった……提督、ううん、憲広さんと絆ができた。これなら鎮守府とこつちも繋がったと思うけど。でも、何となくだけど……鎮守府に戻ったら、まだ駄目そうな気もするのよね）

隣のベッドで眠っている男の姿が目映りふと悪戯気を起こす。

「良く寝てるね」

鼻を軽く摘む。

「提督、起きてよ……」

起こす気もない微かな声でそう呟く。

身をよじる男。

「起きないよね」

そう呟き、ベッドを離れドレッサーの前に行くと緋色の右目に左目と同じヘーゼルブラウンのカラーコンタクトを入れる。

鏡を見て確認する村雨。頬の涙の跡を見つけ、拭う。

「うん。今日も村雨は元気」

大欠伸と共に起き上がる男。その視線の先にニコニコと頬杖をついて自分を見つめる村雨の姿が映る。

「おはよう。早いな……」

「おはよ。何か早く目覚めちゃったんだ。良い朝だから、かしら。昨日は提督の想いも貰ったしね」

そう言つてネックレスとイヤリングに手を添える村雨。

その仕草に、照れ笑いをしながらも

「そうか。……うん？ もうカラコン入れたのか」

と素っ気ない応えを返す。

「ん。……せっかくのホテルよ？ ちょっと散歩行つて見ない？」

そんな誘いに男が

「良いね。おが丸見ながらボードウォークでもぶらつくか」と応えを返す。

「じゃ、早く着替えてね」

ロビーを出て中央広場へ足を延ばす。

「いつ見ても、このマストってでかいよなあ」



「来るときに見えたんだけど……あ、あつた。あそこ、上の方に船乗りがいるんだけど、アレって何の意味あるのかな？」

「さあ？　というか、見えん。どこ？」

男がかがみ、視線を村雨に合わせる。

「ほら、アレ。上から——」

「ああ、見えた。見えたけど……意味なんてあるのかな。見栄えとか雰囲気じゃないのかな？」

「そうだよね。と首をかしげる二人。

「うーん。風が気持ちいい。今日も暑くなるって天気予報では言ってたけど、まだ涼しいね」

ベンチに腰掛けながら伸びをする村雨。

「そうだな……」

周囲を足早に通り過ぎる人を横目にボードウォーク手前で購入したブラックコーヒーを開ける男。

「飲むか？」

村雨に同じものを手渡し、

「今日も36度越えだからな。あ、そうそう、今日は午前中には帰るからな？　午後から

免許更新に行くから」

今日の予定を告げる。

「そうなの？ それじゃ朝食食べたら早めにチェックアウトしないとね」

対岸に見えるお台場と球体を見ながら

「あそこもいつか行けると良いな」

そんな村雨の眩きに

（仕事で何度も中に入ったとは言えんよな……）

無言の男。

ホテルに戻りレストランを訪れる2人。

バイキング形式の朝食を窓際の席で楽しみ部屋に戻る。身支度を整えているうちに時計が9時を示す。

「あ、もう9時ね。……そろそろ出るの？」

「そうだな……。まあ、平日だけでもう山手線も大丈夫だろ」

「あ、そうね。今日は平日だったんだ」

ホテルをチェックアウトした二人。

「芝離宮公園、寄ってくの？」

村雨が男を見つめる

「うくん。寄りたいたいのには山々なんだが済まん。また今度で良いか？」

「……うん。良いよ」

表情を一瞬曇らせるもすぐに笑顔で男に返事を返す。

(……一瞬表情が曇つたな。……昨夜のあれだけだと繋ぎとめるには一手足りなかったのか? ……あれ以上の繋がりとなると——しかないのか? そう行つた理由ではごめんこうむりたいんだが)

腕を引く村雨を見遣り、気付かれないように溜息を吐く。

何度か路線を乗り換える2人。

「やつと着いた」

村雨が男の腕を放す。

「ん? どうした? 入らないのか?」

そんな村雨の様子に疑問を持つ男。

「いいから。私、玄関で待つてるからちゃんと開けてね?」

まあいいかと男がガスと水道の元栓を開け勝手口から家に入る。

ブレーカーを上げて、玄関に。

玄関の扉を開けると笑顔の村雨が、

「ただいま」

男がその言葉を聞き相好を崩す。  
「おかえり」

7月30日——旅行第7日目 午後——

あの空間がどうなっているのかと気になる村雨。男の留守中に覗いてみることに。

「よつと」

納戸の天井に手を掛け様子を窺う村雨。

「えっ? ……こんなに天井高かった?」

視線を上に向ければ、小笠原に出かける前日に見た時より2mは高くなっているのが判る。

「7日間で!」

驚く村雨。そこに縄梯子が下ろされ、三連梯子を背負った夕張が降りて来る。

「あ、村雨ちゃん。戻って来たんだ。どう、元氣だった?」

夕張の姿を確認し、身を乗り入れる村雨。

「はい。元氣で……って、夕張さん、これって」

「ああ、これ? 吃驚しちゃうよね。随分高くなっちゃったでしょ?」

天井を指さす村雨に応える夕張。

「これね、村雨ちゃん達が出かけた直後から昨日まで一日300mmの速度で高くなっ

ていったの。正直言って村雨ちゃんが帰って来られなくなっちゃうんじゃないかって心配してたんだ」

その速度に驚く村雨。

「という事は……。もし戻ってくるのが遅れてたら」

27日の便が欠航した場合、戻ってくるのが8月3日になっていたことを考える。

「3600mmも高くなっていったんだ……。ちよつと危なかったかも」

でもね、と夕張。

「昨日までは300mmだったんだけど今朝は30mmしか高くなってないの。何か心当たりってあるのかな？」

夕張が村雨を繁々と見つめ

「ふふ。そう言う事。皆には黙っててあげるよ」

村雨の襟元と耳に視線を遣る夕張。その視線を感じ村雨が頬を赤らめる。

「……有難うございます。でも、30mmは高くなってるんですね。……このまま行っても3ヶ月程度しか持たないの？ ……繋がったと思ったのに。アレでまだ完全には繋がらないんだ」

考え込む村雨。夕張が優しい視線で見遣る。

「村雨ちゃん。そんなに深く考えすぎちゃダメ。大淀や明石達も考えているから。大丈夫

夫、あと3ヶ月以内には何らかの方法を見つけてみるから。ね?」

「あれ以上の繋がりかあ。……アレしかないよね……」

夕張の言葉が届いていないかのように村雨が小さく頷く。

「ん〜。村雨ちゃんが考えていること、何となくは想像つくけど……」

生温い視線で村雨を見遣る夕張。

「出来るの? 耳・年・増の村雨ちゃん」

色事を自分から仕掛ける分には色々と小悪魔振りを発揮する村雨であったが、実はかなりの奥手であり姉妹艦や親しい艦娘達に事あるごとに揶揄われている事を夕張は知っていた。

「言わないでくださいよ……」

何かを想像したのか聊か頬を染める村雨を姉の様な気分で見つめる夕張が、本当に思ってるならと村雨の耳元で二言三言囁く。

「えっ? そんな事!？」

真つ赤な顔の村雨。

「大丈夫。これで提督はイチコロよ。……出来ないでしょうけどね、村雨ちゃんじゃ」

「ただいま〜」

男が帰宅したのは未だ日差し強い16時過ぎの事であった。

「お帰りなさい、提督。更新終わったの？」

「もち。無事ゴールド免許確定」

「おめでとう」

飛びつく村雨に

「ありがとな」

頭をポンポンと撫でつける提督。

「もう。髪乱れちゃうじゃない」

結わえていた髪を解いていた村雨がどこぞの艦娘の様な台詞を口にする。

後ろを向くとそこにある姿見を使い手櫛で髪を整える村雨。

梳いている髪の間隙から、白く華奢な襟足と少し乱れた後れ毛が一瞬のぞく。

その白く華奢なうなじに一瞬目を奪われる男。

「ん？ どうしたの？」

「いや。何でもない」

(村雨のうなじか……何度か見かけていた筈なんだが、今日は随分色気がある様な気がする……)

「ホントにどうしたの？ 疲れちゃった？」



下から見上げるように村雨が上目遣いで問いかける。

「大丈夫だよ。心配してくれてありがとうな」

よしよし。と村雨を撫でる男。

「また子ども扱い……」

頬を膨らませる村雨に

「おつと濟まん濟まん。贈り物までした娘にする態度じゃなかったな」

苦笑しながら詫びる男。

その言葉を聞き顔を赤らめる村雨だったが、

「……J、じゃあ私を子ども扱いした提督には何かおねだりしちやおうかな？」

「おいおい。旅行帰りの金欠だ。お手柔らかに頼むよ」

「大丈夫。んく……後にするね。それより、帰りに言っただけど家庭菜園の世話しなく

て良いの？」

「そろそろ行くつもりだったんだけど……行くか？」

「うん」

二人で作業服に着替え家庭菜園に向かう。

「前にも思っただけど家庭菜園にしては広くない？ どれくらいだっけ？」

「ん？ 一反七畝（約16・85a<sub>11</sub>約1685・95m<sup>2</sup><sub>11</sub>510坪）。たいしたことな

いだろ?」

「……提督って農家だっけ?」

「ンにや。両親も俺も普通のサラリーマンだが? 一応言っておくか。農家って最低でも、経営耕地面積が10アール以上の農業を営む世帯または農産物販売金額が年間15万円以上ある世帯。って農水省が決めてるんだ。所謂自給的農家って奴だな。村雨が判りそうな言葉だと……飯米農家<sup>はんまいのうか</sup>って言えばわかるか? 序でに言うとならば販売農家、所謂一般的な農家になるには最低でも3反(29.75a $\parallel$ 2975.20m<sup>2</sup> $\parallel$ 900坪)はないとな。昔から言うだろ? 三反百姓、水?百姓って。あれは三反の農地を持つのが農家の最低基準と言ってるんだ。序でに三反程度の稲作収入だけじゃ生活できないって事もな。だからここはちよつと大きい家庭菜園でしかないんだよ(自給的農家に該当するのは言われるまで黙ってるか)」

「そうなんだ。……ところで、前から思ってたけど、この広さを一人で見るのって大変じゃないの?」

「ん? 一人じゃないぞ? あの家は親と同居だからな?」

「え!!」

驚く村雨。

「私、提督の御両親見たことないよ?」

「まあそうだろうな。ルビー婚式で3ヶ月位前から210日の船旅に出かけているからな……」

「そうなの？」

「両親居たら村雨と初めて会った時にどう説明したかな。……会社の後輩かな。いや、鎮守府と繋がるなんて信じてなかったからなあ……まあ、半年後にこつちに来るようなときは注意してな？」

「半年後……」

俯く村雨の様子に、

（やはり繋がりには持てなかったのか……。村雨の様子だと半年も持たない様だな）

と予想する男。

その後はブラックベリーやブルーベリーを収穫し、

「はい、口開けて。あゝん」

真つ赤になった村雨の口にブルーベリーを一掴み分放り込んだり、

「やべ。ズッキーニ、ダメになりかけてる……」

泡を吹きかけているズッキーニの始末や

「喰われたか……」

爪で中身を剥り貫かれて食べられた甜瓜や西瓜、メロンの始末と、

「ねえ、提督。ここに12.7mm単装機銃設置しちやダメ？ 引つかかったら発砲するの。ダメなら7.7mm機銃でも」

と一条丸々食べられた惨状を見て目が座った状態の村雨を宥めながら、かご罨の設置を行ったり、

「ねえ、このトマトって大丈夫なの？ 知ってるのと違うんだけど」

村雨が緑色のトマトミドリちゃんや黒トマトインディゴ・ローズを見ながら首を傾げたり

「アイスプランツ？ 塩害の土地でも栽培できるの？ これ欲しい！ 鎮守府で育てる！ 頂戴！」

日陰でも30度を超えている為枯れ始めているアイスプランツのプランターを車に積み込みながら男が説明したその性質に異様に喰いつく村雨の勢いに、茎を使った挿し木の方法や水・温度管理・重金属があると塩と一緒に吸収するから気を付ける事等の注意点を上げたりと、日が暮れるまで作業をする二人。

陽が落ち切つて暗くなった夜道を男の運転するエブリイで帰る2人。

「いや、助かった。これ一人だったら大変だったわ。ありがとな」

片手で助手席の村雨の頭を撫でる男。

「また。……もういいや」

呆れたように溜息を吐き

「……提督、誰に対してもこんな態度だと結婚できないよ？ 住む世界が違う私たち艦娘とだけの結婚じゃダメだよ？ 家庭菜園。というか畑よね。あれ維持するの一人じゃ大変だよ？ ご両親もいつかは弱っちゃうから、そうなったら……ね？」

心配そうな口調の村雨。

「……何とかなるとは言えんわな。とは言つても焦つて元も子も無くすようでも困るしな。結婚したとしても、畑は嫌いとか売るとか駐車場にしようなんて言われても、な。難しい所だ……」

そう呟いた後、沈黙する男。その沈黙は帰宅するまで続いた。

「さてと……夕飯どうする？ 今から作るか、食へに行くか」

帰宅し、荷物を降ろして軽くシャワーを浴びた二人。

村雨が冷蔵庫を覗き

「あんまり……というか何も無いけど？ 作るなら何か買ってこないと」

「じゃ、食へに行くか。買い物はその後だな。豆乳や乳製品買っておかないとな。ああ、納豆もか」

「お金は？」

「ハハハ。……あまりないが買い物する分考えても、そこの焼き肉屋位なら行けるな。」

確か100分食べ放題で一人税抜き2480円だったはずだ」

「お肉？ いいよ。向こうじゃ高くてもあまり食べられないから」

夕食を終えた二人が貰った飴を舐めながら徒歩で買い物に向かう。

「久しぶりに腹いっぱい食べたなあ……」

「お腹いっぱい。皆にも食べさせたいなあ。飛龍さんや金剛さん達なら喜びそうなんだから」

「あの穴を通れるのは軽巡艦娘と駆逐艦娘って聞いたけど、小型の軽空母とかはどうなんだ？ 大きさ的には龍驤とか」

「あ、ひどい。龍驤さんだって見た目はアレだけど歴戦の空母なんですからね、後で報告しちやおつと。長門さんや飛龍さん達があの穴を見ると小さくて通れそうにないんだって。私達や夕張さん達からは通れそうな大きさに見えていたし、実際通れたんだけどね。……多分、艦時代の公試排水量とかも影響してるんじゃないかって明石さん達の話だけど、それだと明石さんが通れたのは変なんだよね。龍驤さんより明石さんの方が公試排水量はあったから。だから公試排水量と艦種制限なのかな？」

「そうか、排水量の他に艦種制限もか。もし重巡艦娘以上が来ようとした場合は重巡以上の艦娘の目にも穴が広がって見えないとダメなんだな。……それと報告は勘弁してくれ」

と  
外食と買い物から戻りそれぞれ風呂に入る。風呂から出てラフな部屋着に着替える

「提督、小笠原の写真見せて」

村雨がおが丸での事を思い出し、写真をねだる。

「ん？ ああ、あれか。ちよつと待ってな」

ノートPCを持ってくる男。

「んじゃ、早速見るか？」

男が2005年から撮った小笠原の風景を見せ始める。

「これがパパブツシユの植えたノヤシ」

「あ、枯れちゃったっていう……？」

確かにあそこには植え込みがあっただけで、それらしいものは何もなかったと思い出す村雨。

「この隣にペリー提督の記念碑があるんだ。一部が右側に映ってるだろ？」

「え？ あ、これなんだ。そう考えると今は跡がほとんどないね」

村雨が次の写真を見る。

「ハハハハハ」

「ここは母島の北村小学校跡だな」

2007年に訪れた母島の様子を話す男。

「あの頃は港の周辺以外ドコモも繋がらなくてな……宿も圏外だった」

父島に向かう朝、港に着いた途端に仕事場からの電話を受けた事等を面白おかしく村雨に話す。

「そうなの？ そんなこともあったのね」

次の写真をめくる村雨

「ここは？ 霧がすごいけど」

「ここは乳房山だな。この時は気温32度で湿度が98%だったんだ。……ペットボトルの水が無くなりかけてな。あれは参った。頂上で登頂記念の証拠で紙とクレヨンでしっかり登った証拠を写して来たんだがホツとしたなあ」

「へえ。……登って見たかったなあ」

次の写真を見た時、一瞬だが村雨の目が険しくなった。

「この娘は？」

「ツアーで一緒になった中国地方H大学の娘だな。色々とは盛り上がった……のかな



？ 俺一人で話してた気がするが。むしろ一緒にいた男性の方が相性良かったんじゃないかな？ 帰って来た日に泊まるホテルも一緒だったようだしな」

「……」

ジーンと男を見つめる村雨。

「ま、別に良いか、私達がこの姿で生まれる遙か前の事だし。それで、此処は？」

「ん？ ここは小笠原亜熱帯農業センターだよ。ま、この建物はもうないけどな」

「……じゃ、ここは？」

「ここは境浦ファミリーだな。2008年に泊まった宿なんだ。貞頼さんに行く途中にペンションが見えたる？ あそこだ。そう言えばあそこの嬢ちゃん達ももう二十歳前後だよなあ……」

感慨深げな男にムスツとしながら次の写真をめくる村雨。

「……これって、野外ライブ？」

「ああ、2008年はこれを目的に行ったんだ。確か父島出身の歌手のライブだったな。小笠原へは専門の旅行会社で頼んでいるんだけど、そこでも宿が取れなくてな。あの頃

はそんなに宿もなかったからなあ。手配できたのは境浦ファミリーしかなかったらしいんだ。ただ、境浦ファミリーでも一人用の部屋がなくてな。結局12畳の6人用和室を一人で使ったんだ。その旅行会社の依頼じやなきや断ってたよって帰るときに笑いながら言われたよ」

「そんなことあったんだ。……って、この娘達は？」

「こつちもツアーで一緒になった娘さんだな。前のは2007年で、これは2012年の時だ」

「この娘達とは何かあったの？」

「なにもない。仕事は知ってるけどな」

「……何もなかったの？ アバンチュールとか」

「何も無い寂しいツアーだったか？」

その言葉を聞き少しほっとした様子の村雨。次の写真をめくる。

「あ。見たことない船。これって？」

「先代のははじま丸とふじ丸だな。ふじ丸はチャーター専門のクルーズ客船なんだ。これはふじ丸が皆既日食のクルーズで父島に寄った時のだな。ふじ丸は2013年に引退してるんだ」

「こう見ると随分違うのね」

「そりや比べ物にはならんわな」

「これって？ 見送り？」

「そうだな。三日月山から撮ったやつだ」

「ここは？」

「長崎展……違う、初寝浦展望台だな」

「こつちは？」

「こつちが長崎展望台だ」

「これって？」

「ん？ 首無し尊徳像だな。アメリカの兵士が学校にあつた尊徳の首を記念に持って帰つたらしい。色々あつてここに置いたらしいんだが……説明を確か撮つて……これか」

「はいは？」

「ああ、これは保護区域に入る前の泥落としとかだな」

「ふうん。その後はこの写真があるってことは、此処は保護区域なの？」

「ん？ こここは千尋岩、ハートロックだな。ここも保護区域の一つだな。2009年に皆既日食があつたんだけど、ここから日食観察をしたんだ。そう言えば日食から行ったことないなあ……また行ってみるかな。あ、これが

日食途中の写真な。一時的に雲が出てきたから何とか直接見て撮れたんだが、晴れてたら危なかったんだよな。大分欠けてるだろ？ この後も欠けて最大で98.8%欠けたんだ。母島の北港で見ると99.8%欠けたらしいんだがな、此処じゃ98.8%だった。50Kmの差は大きかったな。父タクは朝から船出して母島沖50キロまで行って皆既日食みたらしいが、そのツアーが一番の勝ち組だったな。因みに吐噶喇列島の悪石島って所でも金環蝕が見られる観測ツアーがあつたんだけど土砂降りです散々だったらしい。あ、ピークのはこんな感じでフィルター越しに撮ろうとして

撮影失敗した」

「あらら残念」

そうやって村雨が次の写真をめくると

「わ。これってどい？」

「ああ、ここはウエストの別館だな。今はもうなくなつた。この別館は2人部屋なんだがトレーラーハウスなんだ。んで日食の時に泊まつたんだが、風呂が壊れたらしくてな。風呂はウエスト本館を使ったんだ。翌年には旅行会社の宿泊先リストになかつたな」

「そうなんだ。……これって何？」

見知らぬ人物の後ろ姿が映っている写真を見る村雨。

「ああ、これか。失敗写真だな。南島で鮫池を撮ろうとしたら急に前に立たれた」

男のボヤキ混じりの口調に、あらら。と返すしかない村雨。

「じゃ、此処も南島？」

「南島に上陸すると見晴らしのいい丘に上るんだが、その途中で写したんだ。この下の方に水鳥の巣があつた筈なんだが……微かに写つてるな」

「え？ どいどい？」

村雨が身を乗り出す。

「ほら。根元の……」

男の指を辿り

「あ、これ!？」

「そ。目立たないだろ? 写真だと」

「うん……つてそれは腕次第なんじゃないの? 青葉さん辺りなら上手に撮れると思う

んだけどな」

「なかなか手厳しいなあ」

更に次の写真へ。

「(ハハ)は?」

「ん。扇池を丘の上から撮った奴だな。砂浜に人がいるだろ? 扇池の沖に船が泊まっ

ているのが分かると思うけどそこから泳いで上陸したんだろうな。扇池だけは南島に  
人数制限で上陸できなくても泳いで行けるんだ。これは敢えてだろうけどね」

「(ハハ)は?」

「砂浜からみた扇池だな。さっきの写真に白い砂浜があっただろ? そこから撮ったや

つな。黒い所は岩になつてるんだ」

「そっか……行つてみたかったかも」

「因みに海藻とかで滑るから注意するように言われるんだ。でもギョサンやマリンスューズを履いていてもこけるんだよな。俺もこけた」

その言葉に吹き出す村雨。

クリックしながら写真をめくる。

「ここつて大神山神社だよね？」

「そうだな。因みにこの写真、随分前に撮っていたから今と少し違つたところがあるんだが……解るかな？」

「え？ 違い……。あ、判つた」

男の言葉を受け、しばらくじつと写真を見ていた村雨がポンと手を打つ。

「お。どこかな？」

「手水場でしょ？」

「大当たり。さすが艦娘。細かいところまで見ているなあ」

村雨の頭を撫でまわす男。

「あ、またあ」

笑いながら男の手から頭だけを逃そうとする村雨。

「今の大神山神社は手水場の上が覆われているんだ。鳥が水浴びしないようにな。写真を撮ったのは日食があつた2009年だけど、この頃はまだ覆われてなかつたんだ。覆われたのはいつなんだろうな。台風で逃げ帰つた後だとは思うんだけど」

「台風？」

「そ。2010年は宿に着いたら台風養生の真つ最中。着いた次の日の夕方出港で台風と一緒に帰つて来た。2011年はツアーで参加して台風が来たから1日早く切り上げて出港したんだ」

「今年は早くならなくて良かったね。直撃だつたけど」

「着発だから早まることはなかつたが欠航する危険もあつたからなあ。欠航覚悟だつたけどホント良かったよ」

「ホントに、ね」

複雑な表情の村雨。写真を捲ると、一枚の写真が目に残まる。

「ノヤギ排除のお知らせ？ え？ もしかして道を外れると撃たれちゃう危険もあるの？」

驚く村雨。



「ああ、大丈夫。おが丸入港中は駆除しないから。絶対逸れる奴いるから危ないしな」

次の写真を見せる男。

「良かったあ」

安堵のため息を吐き再び写真をめくる村雨。めくると他にも見覚えのない場所が村雨の目に映る。

JAXA小笠原追跡所のアンテナ。

休業中の森の喫茶店の風景。

兄島海中公園の様子。

「あ、イルカだ。目の前に来るんだね、可愛いなあ」

目を輝かせる村雨。

「これって水中観光船か何かから撮ったの？」

男を見る村雨。

「ん？ ドルフィンスイムに参加した時の写真だから目の前に来たイルカだが？ 小笠原に水中観光船はない筈」

「え？ この右端の影って船のフレームじゃないの？」

「ああ、これか。これはシュノーケルの一部だな。これはウェアラブルカメラで撮ったんだ。貞頼さんで付けてたろ？」

「あ、あの顔につけていた橙色のカメラ？」

「そ。ドルフィンスイムにはあれをつけて参加するんだ。カメラ意識しないで済むからな。そんな時に少しづつかっていたらしいな」

「そうなんだ」

他には何かあるのかなと呟きながら写真をめくる村雨。

ホエールウオッチング中のマッコウクジラとの出会い。

母島沖港。

母島にあつた高射砲。

探照灯陣地。

母島にある都道最南端の標識。

今回行かなかった場所の写真の肩を寄せ合いながら見ていく二人。

「行かなかった所、まだ随分あったんだね」

一通り見終わると村雨がぼつりと眩く。

「母島とか来年行けたらよかったのにな……」

俯く村雨。男が声を掛けようとした矢先に

「提督、お願いがあるんだ……」

「ん？ 何だ？」

「最後だから……髪を梳いて欲しいな」

「最後……？」

「うん。……お昼にあの空間に行ったんだけど、そこで夕張さんから聞いたの。あの空間ってまだ1日30mmづつ高くなつていくんだって。……せつかく提督と絆ができたって思ってたんだけど、3ヶ月しか持たないんだね」

男の目に映る涙交じりの村雨。

「そうか……」

昨夜己の想いを告げた男が村雨を掻き抱く。

男の後髪に村雨の手が伸びる。

「少しだけ、こうさせて」

男の身体に身を寄せた村雨から微かな声が流れた。

暫くして顔を赤らめながらも、村雨が身を離す。

「ありがとう、提督。……残念だなあ」

「どうした？」

訝しむ男に、

「提督と一緒にだと泣き易いから。素直になれるんだもん。もう最後かって思うと、ね」

男が村雨を抱き寄せ、その髪を撫でる。

村雨の双眸から涙が零れ落ち――。

男が涙を拭くと村雨が背を向け、男の膝に腰掛ける。

無言で髪を梳き始める男。

「前にも話したよね。私がここに来た理由。本当のこと言うと、不安だったんだよ。提

督は男性だし、私はこっちに來たら初めの頃は外見通りの力しか出せなかったし……」

「そうなのか？　でも島じゃ艦装は……」

「あれが出せるようになったのはおが丸に乗った後だもん。初めの頃は私用の部屋って

鍵なかったし夜這いされたらどうしようって。襲われたら抵抗できないって怖かったんだからね」

「信用無かったんだなあ」

フツツと寂しげな村雨の声が聞こえるも、直ぐに沈黙が部屋を包み男が髪を梳く音だけが流れる。

「提督、もう一つお願いして良い？」

暫く後、ぽつりと微かな声で村雨が言葉を紡ぐ。

「どうした？」

村雨の髪を梳く手を休ませずに尋ねる。

「一緒に寝よ」

一瞬手が止まり——やがて何事もなかったかのように動き出す。

「わかった。……そうだな。23時も周ったしそろそろ寝るか」

「うん」

立ち上がり、互いに背を向けながら寝間着に着替える。着替え終わると男の寝巻の裾を村雨がチョンと掴む。そのまま寝室に入る2人。

「……いいんだな？」

「うん」

男が明かりを消し村雨をゆっくりとベッドに押し倒す。

男が村雨の傍らに入り身体を固くする村雨。だが男はそのまま身を翻して背を向ける。

長い沈黙が部屋を包み込む。

「意気地なし……」

村雨が微かな声を発し男に背を向ける。

その背中越しに男の手が伸び、村雨の掌を包み込む。

だが応える言葉はなかった。

セミダブルサイズのベッドで互いに背を向けて横たわる2人。

「……提督、起きてる?」

背中越しに男が起きている気配を感じ村雨が声をかける。

「ああ」

男が応えを返す。

「……最後にもう一つだけお願いしても良い?」

「ん。直ぐ俺が出来る事ならな……」

背中越しに聞こえる男の声。

意を決する村雨。

「……抱いて」

男の応えはない。

「お願い……」

長い沈黙が続く。

やがて、深い溜息とともに男が身体を動かす気配がした。

「村雨。……言ってる意味はわかっているのか？ 今なら聞かなかったことに出来る」

村雨も身体を動かし、男と正対する。

「本気、だよ。冗談じゃこんなこと言えっこないもの」

互いに見つめあい、暫しの沈黙が流れる。

「良いよ。覚悟は出来てるから」

そう言いながらも微かに震える声に男が村雨を抱き寄せる。

「村雨……」

生まれたての子鹿の様に微かに震える村雨の頭を胸に抱き寄せ直す。

「あ……」

村雨の目が僅かに見開かれる。

「——わかるかな」

男が掠れた声で

「情けない話だが、お前だけじゃないんだ」

村雨の眉が僅かに下がる。

「提督……」

そう言葉を発する村雨の唇に手を当て

「違うだろ？」

表情を緩める村雨。

「憲広……」

その言葉に男が村雨の頤をあげる。

重なる二つの影。

その夜、二人は心身ともに繋がり――。

――何処かで響いていた硬質の擦過音。

その音に被せるようにガチつと言う連結音が2回響き――擦過音が消えた。



## 7月31日——エピソード——

鳥の囀りと共に男が薄く目を開けると目の前にカフェオレ色の髪が映る。

手探りで枕元の鳥が囀っている目覚ましを止めると、すぐ隣にある髪を梳く男。

その髪を持ち主である村雨は男の腕を自分の肩と枕の間に挟む様に横向きに眠っていた。

「……嫁艦でもない娘に手を出しちまったか。……早いとこ練度上げてケツコンカツコカリ結ばないとな」

村雨を起こさないように静かに数時間前まで月明かりで照らされていた窓の外を見ると黎明の薄らとした明るさが広がっていた。

再び村雨に目を遣り、その肩先の規則正しい上下を確かめ布団を引き上げる。

少し明るくなった窓から目覚ましとは違う本物の鳥の囀りが聞こえる。

後ろから村雨のうなじに鼻先を埋めると、その甘やかな香りを楽しむかのように深く息を吸い込む。

それがくすぐったかったのか村雨がもぞもぞと動き、男が起こさないように梳いていた手を休める。

寝返りを打った村雨が男の懐に潜り込んでくる。

その処女雪のような白い背中を優しく包み込むと

「もう少し寝るか……」

男は小さく欠伸をし再び眠りについた。

こそばゆさを感じ小さくクシヤミをして男が目を開けると、自分の髪を紙こよ縫りり代わりにして鼻をくすぐっていた村雨と目が合う。

「お早う。今日の午後から仕事でしょ？ 早く起きないと。朝ご飯作ったから一緒に食べよ？」

花が咲いたような微笑みを浮かべた村雨が寝起きの男に近づき軽く接吻をすると身を翻し弾むような足取りで部屋を出て行く。

「そうだったな……。今日でお別れか」

言うに言われぬ寂しさが胸を襲う。

階下に降りると用意されていたのは、茶粥、じゃが芋・コンニャク・豆腐・豚肉を具にした御御御付、大根おろしを添えた出汁巻き卵と香の物。

「これは……」

男と村雨が出会った日に村雨が用意していた朝食と同じものがそこにあつた。

「わかる？」

「初めて会った日に村雨が作ってくれた朝食だな。あの時はブランチになっちまったが」

男のその言葉に悪戯気な表情を浮かべた村雨が

「そうそう。あの時の提督ほんとに信じてくれなかったのよね。こおの頑固者お」  
笑いながらも

「最後の日は一番最初に出会った時の食事にしようって何となく思ったんだ。なんでだろうね……」

そうどこか寂しげに呟く村雨。

「会うは別れの始まり、か」

そんな言葉を紡ぐ村雨だったが

「ダメダメ。食事は楽しくなくっちゃね」

そう打ち消し、男もそれに乗って食事の間は旅行や鎮守府での様子などまだまだ話していなかった事を互いに話題に出しその食卓は奇妙な明るさで包み込まれていた。

ごちそうさまでしたと食後の挨拶をして村雨が食器を片付ける。

男が自分が洗うと言うも村雨がやらせて欲しいと首を振る。

食器を片づけ終わると手を拭きながら村雨がリビングでくつろぐ男の下へ。

「ちよつと庭に出るね。見ておきたいんだ、こつちの風景……」

村雨がそう言い残し庭に出る。その姿を見送ると

「……村雨が上りやすいように脚立でも立てて……いや、こっちの手すり付踏台の方が良いか」

と男が裏にある物置から手すり付踏台を持ち出し二階に運ぶ。

「こんなものかな」

納戸の天井の点検口に入りやすいように手すり付踏台を置く。

「あ、ここに居たんだ。……脚立？」

最初に来た時と似たような服装の村雨が姿を見せる。

「ん？ ああ、これは手すり付踏台って呼ばれる奴だな。……それより、もう準備したのか？ DVDとか野菜の種やこっちで買ったものは全部積み込んだか？ アイспラントは持ったか？」

「うん、大丈夫。バッグとかも持ったし。……それより何でこれにしたの？」

「ん？ 脚立とか梯子よりこっちの方が上りやすいだろ？ そんな風にドラム缶に収まらなかつた荷物持つてるときは」

「そう……だね」

言葉が続かず沈黙が流れる。

「村雨……」

「ん？ なあに？」

キョトンとした村雨に男の顔が近づき、ごくあつさりと唇が触れた。

触れるだけのキスだというのに、びくりと細い肩を跳ねさせ相手を上目遣いに凝視する村雨。

「この18日間、楽しかったよ。ありがとうな」

男のその言葉に、

「……私の方こそ。今までありがとう」

男を見上げ、背を伸ばして接吻をする村雨。

唇を離すと男から身を翻し

「色々あったなあ」

天井を見上げたまま感慨深げに村雨が言葉を発する。

「うん。楽しかった。旅行の事、早く鎮守府の皆に話したいな」

納戸の天井を見上げ続ける村雨の言葉。男の胸に「鎮守府の皆」という言葉が引つ掛かった。

（そうか、やっぱり村雨にとっての居場所は此処ではないか。【鎮守府の皆】か。村雨にとってではちよつと長めの休暇だったんだよな）

そう考えかけるが、微かに震えている肩を見遣り、

「村雨……？」

手を置き強引に顔を向けさせる。

「ちよつ！ ……見ないで」

村雨の目には薄つすらと涙が溜まっていたが、見る見るうちに溢れ出し左右へ流れ落ちて行つた。

「最後は泣かないでお別れしようと思つたのに……これじゃ台無しよ。……馬鹿あ」

その顔を伏せたまま男の襟を掴むと胸に顔を押し付け——おさえていた感情が堰を切つてあふれるように泣きだした村雨。

暫く男の胸にしがみついたまま、時間は流れ——。

男の襟を離し、

「服、濡れちゃったね」

照れくさそうに笑う村雨。

「構うことないさ」

男が笑みを浮かべる。

「もうそろそろ……」

咳払いをする村雨。

男が不思議そうな視線を向けるも

「最後までいいはきちんと決めないとね」

そう言つてウインクを決めると背筋を伸ばし

「本当にお世話になりました。色々我儘言つちやつたけど……本当にありがとうございます。提督、ううん。憲広さんの事、小笠原への旅行の事、鎮守府に戻つても忘れません。……ていと、憲広さんも忘れないで下さいね」

笑顔で敬礼をする村雨の眺から零れる涙が頬を伝う。

震える声。それを振り払うかのように礼を解くと一步、また一步と踏台を登る。

そして——。

「それでは白露型三番艦村雨、鎮守府に帰還します。またいつかお目にかかれる時を楽しみにしています」

天井から再度色気のある敬礼をすると村雨が姿を消す。

ぎこちないながらも、村雨に教わつた通りの答礼で最後まで見送る男。

「行つたか……。……さてと、仕事行くかな……」

答礼を解き、のろのろと体を動かす男。

\*\*\*\*\*

「おい、何やつてるんだ！ 旅行ボケか!?!」

職場についていつも通りの業務をこなす男。

だが……

「何やってるんだ！ お前、それやってどうなるか解ってるのか!? データ全部消えただろうが！」

当初は怒り心頭だった上司が最後には心配する位の常になく大きなミスを連発する。

「……金指。お前、もう帰れ。今日はこれ届けてそのまま直帰しろ。振休が余ってるだろ？ 今週一杯休め。疲れがまだ残ってるんだ。ちよつと前まで3週連続での休出が続いてたからな」

心配げに見守っていた同僚が有無を言わさず荷物を持たせて部屋から押し出す。  
「氣い付けて帰れな」

元氣のない足取りで封筒を通勤ルート上の契約先に届け、そのまま帰宅する男。

「ただいま。……って、誰もいないか」

暗くなった部屋の明かりをつけ、惰性でPCを起動する。

「……さて、起動するか」

と、起動させる『艦これ』

おなじみの挨拶中にシャツを脱ぎラフな部屋着に着替える。

ペットボトルのお茶を飲みながら



「そうか……小笠原に行つていた間の旗艦は村雨から変えていたんだつたな」

「そう眩き秘書艦を村雨に変える男。」

母港に映る秘書艦——村雨。

『はいはい、お待たせ！……そう？ ごめんなさい。でも、これからも村雨のうんといいいとこ、いつでも見せたいらるつ！』

いつも通り——ではなく、微妙に台詞が変わつていたが男がそれに気づくことはなかつた。

淡々と情性でデイリークエをこなす男。

時間が過ぎるとともに画面の村雨の表情が微妙に変わつて行くことにも気が付かず

——。

（提督、元気がないね？ そんな時は村雨が元気分けてあげるから。チュツ！ はいっ！

どう？ 元気でした？）

そんな言葉が聞こえてきたような気がして、顔を上げる。

画面には微笑を浮かべているような村雨。

よく見るとネットワークスが掛かっている事に気が付く男。改めて繁々と村雨を見つめると耳にはイヤリングがあつた。

「小笠原に行く前と違うのは、実際に村雨にあげたからか？」

ふと小笠原で村雨と話していた事を思い出す。

同時に昨夜、手にしていた柔らかさも――。

男の胸に黒い欲望が浮かぶ。

「……うりゃ」

村雨の胸元をクリックする。

『提督……』

「ん？ 台詞が違う？ そう言えば、向こうの執務室とこの画面は連動していると言っていたな。それなら……これはさすがに怒るだろうが。……怒りで来ないかな？ なんでな。最後だって言ってたからな。もう会う事もないだろうな」

寂しげに呟きながらも、昔遊んだエロゲーの動きの様にマウスの左ボタンを押しながら村雨の胸元辺りにカーソルを動かす。

「エツ？ アンツ、ヤツ……ハツ。……ツン……ちよつと、いい村雨、呼んだ？」

前半はよく聞き取れなかった台詞。その後半は同じ台詞だが、心なしか息が乱れ声が低く変わったように聞こえる。

「……何か睨まれているような気がするな。試しに秘書艦を変えてみるか」

村雨を外し、時雨を秘書艦に据える。

「僕にも興味があるの？ いいよ、何でも聞いてよ」

時雨の台詞もわずかに変わり、視線も幾分厳しめになっている。

そんな変化に男が気付くことなく演習用の編成を考えていると頭に軽い衝撃が走る。

「ん？ 痛てっ！」

振り向いた提督の顔に丸まったアルミホイールが当たる。

「なんだ？ 痛っ！ 痛っ！」

アルミの礫が次々と当たってくる。

「君には失望したよ」

画面から聞こえる時雨の声。同時に礫の先に見えたモノ——。

「村雨!？」

天井から真っ赤になった顔を覗かせ、アルミの礫を指弾で放つ村雨。

「セクハラ禁止！」

色々な感情が入り混じり狼狽する男。

「もう会えないんじゃないのか!？」

「もう会えないなんて一言も言ってます。昨日のアレでちゃんとつながったんだから。私も戻って初めて知ったから、もう会えないんだってあの時は泣いちゃったんだけどね」

後半の言葉は男の耳に届かなかったが、軽く咳ばらいをすると、あつかんべーと下ま

ぶたを引き下げ、舌を出す村雨。

「まったくもう。元氣出してね？ そりやしよっちゅうは来られないけど、せっかくこつちとあつちがつながったんだから時々皆で遊びに来るからね！ ……それと、さつき見たいなセクハラなんかしたら只じや置かないんだから！」

指で鉄砲の構えをつくり男に向けてパン。と撃つ仕草。

「するんなら私が来た時に堂々としてよね……」

咳払いをすると再び天井の奥に。

呆気にと取られていた男の表情に次第に笑みが戻り、クツクツクツと抑えた笑い声が漏れ、やがて大きな笑い声が変わって行つた。

そして――。

「提督、遊びに来たよ」

ちよつと変わった日常が始まる。

# 小笠原DAY in 2018

## 小笠原DAY——前半——

「うわゝ。前に乗った時と全然違うのねゝ」

乗客が少なくガラガラの車内を見渡す村雨。

「土曜の山手線なんてこんなものだ。時間も早いしな」

「それにしても、小笠原DAYに行くのに乗る車両が小笠原ラッピングだなんてついでるわよね」

「全くだ。まあここ最近は何に付くようになっていたけどな。特に秋口あたりから。返還50周年でなんか人気でたのかな？」

そう考えるとラッピング車両に乗る確率は元々高かったのかもしれない。と内心思う男。

村雨と男が出かける先は、初夏に訪れた竹芝ターミナル。

「へゝ。小笠原DAYなんてあるのか」

そのイベントに男が気付いたのは偶然だった。

「初めて知ったな、こんなイベントがあったのか。12月15日か。土曜日だから行けるっちゃ行けるな」

興味を持った男が昨年イベントを漁るとフラや歌、物品販売が行われることを知った。

「農産物販売するのか……。ふむ。コーヒー結局また来なかったからなあ。……。ここで買えるかな？」

男が7月に小笠原で申し込んだコーヒーは結局届かなかったが、ここ数年届いたことがないので「やっぱりな」という気持ちしかなかった。

だが、このイベントを知ると、ひよつとするとここなら買えるか？ と僅かではあるが期待感が湧いてきた。

「村雨が剥れているからなあ……」

埼玉の小江戸で秋に行われている祭りに名取と一緒に掛けてから機嫌が悪くなっている指輪を贈った艦娘の顔を思い浮かべる男。

「コーヒーが来なかったのにも怒っていたし……。一緒に出掛けるかな」

その日の夜に村雨を呼び出しこの話をする機嫌を直した様子の村雨に男がホッとした表情を見せる。

「だって私以外の娘と一緒にいるところ向こうの知り合いに見られたら大変でしょ？」

とは、ご機嫌な様子の村雨の言葉であった。

「ここに来るのも久しぶりね。あ、大分工事進んでいるんだ」

駅を出て竹芝栈橋に向かう途中、手を翳して上を見上げる村雨。

「2020年かあ、完成するの。あれが完成すると信号とか待たないで行けるのね。楽しみだなあ」

男を振り返り笑顔を向ける村雨だったが、ぶるつと身体を震わせると男の腕にしがみつく。

「寒いんですけどお。こんなに寒いなんて知らなかったよ」

そんな村雨の様子に苦笑する男。

「もうちよつとだ。中に入れば少しは暖かくなるから、それまでは」

そう言いながら自分のコートを村雨にかける。

「良いの？」

かけられたコートを握りしめながら男を見上げる村雨。

「コート以外にも防寒対策はしてるから大丈夫だよ」

そんな男の言葉に

「ありがとう……憲広」

礼を言う村雨。

首都高の高架下を渡り歩くこと10分弱。

「到着つと」

「相変わらずマストが大きいな」

男が持ち歩いている懐中時計を確認すると午前10時50分を周った所だった。

「さてつと。かなり早かったけど……」

「ねえ……結構人がいるんだけど、皆イベントに来た人かな？」

周囲を見回す村雨。

「さすがにそれはないと思うけど……。あ、受付あるな。ちよつと様子見て来る」

受付らしい場所を確認した男が様子を窺う。

(何だ、どこかのイベントか)

レストラン船〔ヴァンテアン〕の名前を確認した男。村雨の下に戻ると

「他のイベントだな。よく考えたら小笠原DAYの会場は夏に行った第二待合所だから

此処に受付はないな」



そう言い村雨の肩を抱き奥の第二待合所に向かう。

「えつと……」

待合所を除くと設営された舞台でトランペットやマイクチェックの音が響いていた。他にも主催の小笠原村観光局の他に小笠原海運やツーリスト各社や東京ヴァンティアンクルーズのブースが準備の最中であつた。

「まだまだ準備中だな」

「そうね。……出る？」

「ん？ ……中には入れるようだから写真でも見るか」

「うん」

中に入りブースの準備を妨げないように硫黄島のパネル展示を眺める。

（村雨、大丈夫だろうな……？）

旅行時の様に泣き出していないか横目で村雨を確認する男。

真剣な眼差しでパネルを見つめる村雨であつたが特に変わった様子はなかった。

暫くパネルや入口脇に展示していたすみだ水族館の水槽を見てから会場を後にする

二人。

「こりや暫くかかるな。少し早いけど昼食摂っておくか」  
「ちよつと早くない？」

時計を見る村雨。

「未だ11時半だよ？」

「11時頃には結構並んでいると思うんだ。昼食の時間も考えたと早めに摂っておきたいんだ」

「うーん。そういうなら、そうしよつか」

第一待合所隣の「東京愛らんど」に入る二人。

「あ、カレンダーがある。ねっ？」

「はいはい。そんな風にも上目遣いで見なくてもちやんと買うから」

見上げる村雨の視線に苦笑で返す男。

「カレンダーの他には……。ふむ、パツシヨンリキュールも買うか。後は……。小笠原のじゃないけど赤イカの塩辛も買っておくか」

「ね、漁師のよくばり沖漬けだつて。これも買わない？」

「ん？ 主材料は……。赤イカ・スルメイカ・金目鯛・目鯛か。面白そうだな。これも買うか」

その言葉に軽くガツツポーズをする村雨。その仕草に目を細めながら村雨の頭を撫でる男。

「あ、またあ」

「おっと。つつい撫でちまうなあ、ごめんごめん」

頬を膨らませる村雨。その頬を突きながら男が謝罪する。

「むう。反省の色がない。ここは奢ってね」

「はいはい」

「さて、何頼むかなつと。……うん、ムロアジメンチバーガーと島唐辛子のチーズドッグに東京島パッションフルーツサ」

「メツ。昼間っからお酒はダメ」

「はいはい。小笠原パッションフルーツソーダにしておくよ」

そんなやり取りを聞いていた店員がクスクスと笑い声を漏らす。

「んくと。私はムロアジメンチのカレーライスと小笠原パッションフルーツソーダにする」

注文を終えた二人が店員の席でお待ちくださいとの声を受けて適当な席に座る。

「まだガラガラだね」

「ま、早いからな。これが暫くすると混んで来るんだ」

壁にかかっている写真を見ながら小笠原での思い出を話す二人。

「おまたせしました」

そんな声とともに注文した品が届く。

「わあ、美味しそう。……でも、お父さん、それじゃ足りないんじゃないの?」

男が頼んだバーガーとチーズドッグを見て村雨が首を傾げる。

「ん? まあ試食コーナーとかあるらしいからな。それに腹減ったらここに来ればいいしな」

「それもそっか」

チーズドッグを食べている男の額に薄らと汗が浮かぶ。それを見た村雨が

「ねっ。汗かいているけどそんなに辛いのか?」

「ん? 思ったよりは辛いな。さすが島唐辛子」

「ちよつと頂戴?」

「ん? 別に構わんが……大丈夫か?」

「少し位なら大丈夫」

口を開ける村雨。

「……まあ良いか」

その口に唐辛子に乗せたチーズドッグを入れる男。すぐに

「辛っ！　これ辛っ！」

村雨の悲鳴が上がる。

「やっばりな」

慌ててソーダを含む村雨。

「これ、すっごく辛い」

「だから大丈夫かって聞いたんだ……」

真っ赤に顔を染める村雨に、やや呆れたような口調の男が席を立ち水を持ってくる。

「ほら。暫く氷を含んでなさい」

コップに入っている氷を含ませる。

「落ち着いたか？」

首を振り村雨が頷く。

「本当に辛い駄目なんだな、村雨」

「うん……ある程度は大丈夫なだけだね。ごめんなさい」

「いや、謝られるもんでもないけどな。そう言えば島唐辛子のチリコンカンもダメだったな」

そんな話をしながら食事を終える二人。

「お、もう12時か」

「ヒトフタマルマル。そろそろ行く?」

「そうだな。土産物見てそのコンビニ二回つてから行くか。誰か早い人が並んでいる頃だろうしな」

土産物を見て大島ゴジラカレーを買い、コンビニで小笠原パッションフルーツと小笠原島レモン壘チューハイを見つけ買った二人。

奥の第二待合所に向かうと大分ブースも揃ってきたがまだまだ慌ただしさが見受けられた。

「あ、そう言えば村雨。そのP A S M O、残金どの位だった?」

村雨が手にしているP A S M Oを見て男が確認する。

村雨のP A S M Oは旅行時に男が村雨用に購入してある程度の額をチャージをしていたものであったが、流石に残額がどの程度であったかは覚えていなかった。

「え? ……帰りの交通費位なら」

「上のファミで、もう少しチャージしていた方が良いな。会場は電子マネー以外使えないから」

「え? そうなの?」

「ああ。会場内でチャージは出来るようだけど、先にある程度入れていた方が良い。俺のは1万入っているけど……一緒に行くか?」

「うん」

上階にあるファミでチャージを終えて戻る二人。

「……しつかし、どっちに並べばいいんだろうな？ 聞いてみるか」

入口が二ヶ所あるが案内表示も出ていない為、どこに並ぶのかわからない二人。

男が忙しく歩き回っているスタッフに声をかけ、場所を確認する。

指示された場所を見ると数名の男女が並んでいた。

「こつちか……」

「もう並んでいるんだね」

二人が列に並ぶ。

「何時ぐらいから並んでいるんですか？」

先に並んでいた人達の会話を聞いていると先頭の女性は朝8時位には並んでいたらしい。

「早い」

「早いですねえ」

男が思わず声を零すと

「そうなのよ。まだ誰も居なくて——」

会話が始まる。それを契機に周囲の人達と会話が盛り上がりはじめる。

話を聞いていると人気の商品がある程度わかってくる。

「Tシャツは先に買っていた方が良いんですね？」

「うん、大人気みたいね。ほら、船に知り合いがいるけどもうかなり売れているみたいよ？」

「そうなんですネ……買えるかな？」

「先頭だから。ほら、受付したら真つすぐブースに行けば大丈夫」

村雨が女性から情報を仕入れる。その傍らで

「何、コーヒー狙いなのか？ コーヒーは今回はないらしいよ。蜂蜜はあるらしいから狙うならそっちにした方が良くって」

「ありや、コーヒーやっぱりダメですか。んくラムはどうですかね？」

「あ、深海ラム？ 結構作っているからね。余裕があつたらで良いんじゃない？ 島に来ればよつぽどのがない限り買えるよ」

同じように男も情報を仕入れていた。

12時半を回るとスタッフが列の整理を始める。

「ここから三列に分かれるので、後ろの人達にも声をかけてください」  
列の先頭でボードを張りはじめるスタッフ。



列から

「えつと……島民と元島民が青か。リピーターが黄色で未だ行っていない人が赤と。……  
抽選かな？」

そんな声上がる。

「お楽しみです」

笑顔のスタッフ。

「もう少しお待ちください」

男がふと後ろを振り返ると既にかなりの人数が並んでいた。

村雨の肩を突く男。

男を振り返る村雨に

「後ろ見てみ。凄い列だ。早く来て良かったよ」

「ホントだ。未だ13時前なのにもうこんなにいるんだね。最初は今頃来る予定だったのよね？ 今頃だったら大変だったね。早く来てよかった」

開場まで、後100分。

列はまだまだ伸びていた——。

## 小笠原DAY——中編——

「ねえ、憲広」

「ん？」

「今1330よね？」

「ああ。開場まではまだあるな。花摘みでも行くのか？」

「違うわよ。さつきよりずいぶん増えてるなって」

「二人の声が聞こえたかのように会場内のスタッフから現在の凡その人数が発表される。」

「うわあ100名も……」

「いや、予想以上だな……。正直舐めてたわ」

二人の感想に

「あれ？ 初めてなの？ これに参加するの」

前に並んでいた人が振り返る。

「ええ。そうなんです」

「今年は100や200じゃ済まないよ。返還50周年でリピーターとか結構来るから

ね。ところで島には何回行ったの？」

「私は2006年から毎年ですね」

「私は去年の貞頼祭が初めてです」

一人が答えると

「えつと、12年連続？ 仕事で？」

「え？ 観光ですよ？ 年1回だけ」

「世界遺産の話題が出る前から毎年？」

「あ、仕事の都合で2013年だけは行けませんでした」

「そっか。随分気合の入ったりリピーターさんもいたもんだ」

「12回なんて珍しくもないと思いますよ？」

「そうかなあ。写真家さんなんかは良く来ているけど、あの人達って仕事だからね。あ、

貴方ブロガーさん？」

「いえ。今はwebもブログとかのSNS系もまったたく」

「え？ Twitterも？」

「ええ。昔はメルマガやっていてドメイン取ってアメリカとかの健康情報を集めて有料配信してたんですけど、もう止めました。今はそのドメインもメールでしか使っていないですよ」

「……もつたいない」

そんな世間話をしながら暇を潰していく。

「まだかな♪ まだかな♪」

どこことなくご機嫌な村雨。そんな村雨を見遣り、他愛もない話をしているとスタッフから案内放送が入る。

「開場まであと30分か。それにしてもすごいね、建物の外まで並んでいるなんて」

放送を聞き村雨が男を見遣ると、男は後ろを振り返っていた。

「すごいな。びっしりだ」

「え？ どれどれ……。わっ。すごい人」

第一待合所に九十九折で並ぶ人の列。

その列を見遣り傍らの男に視線を戻す。

「早く出てきてよかったね」

受付前では島の高校生たちがパンフレットやハンカチタオルの引換券をバックに詰めている。

「高校生かな」

その村雨の言葉を聞きつけ、前に並ぶ女性が応えた。

「あの子たち来年の春に卒業して内地の大学に行く子たちなの。島に居た時はこんなに

小さかったのに、時が流れるのって早いわよね」

手で自分の膝位の位置を示す。

「それは小さすぎるような……」

周囲から苦笑が漏れていた。

高校生たちの動きや受付前のタイムスケジュール表を確認しているうちにスタッフが列の先頭に歩み寄る。

「お待たせしました。これより小笠原DAYを開催いたします。引換券とパンフレットを受け取ったら列の案内に従って受付を済ませてください。それでは押し合わずに進んでください」

その言葉と共に列が動き出す。

「えっと、リピーターは真ん中か」

「はい。これが抽選券になります。それとこの腕輪を点けてください」

受付の高校生から紙の腕輪と抽選用の用紙を渡される。

「赤と黄色と青の腕輪の人と名前を交換してください」

「そういう事か」

顔を見合わせる二人。

受付を済ませ50周年記念ハンカチタオルを無事GETした二人。

「やれやれ。早く出て良かったよ」

「ホント。最初の予定通りだったら貰えなかったかも」

早足で目的のブースに向かう二人。

そんな中、おが丸の到着予定が1530から1600になるという放送が入る。

「遅れてるのね。この季節じゃ黒瀬川も暴れるしね。……黒瀬川、わかるかしら？」

男に悪戯気な視線を向ける村雨。

「黒潮だろ？ その位は解るわ」

「何だ、残念。知ってたの」

目的の小笠原海運のブースに並ぶ。

「色々あるなあ……」

「ホント一杯。目移りしちゃうけど……」

「足りないな」

「足りないわね」

ブースには二人が狙っていたTシャツの他、画用紙やビスケット、タイピンの他にW A O N やタイピン等が所狭しと並んでいた。

「まっ予定のもの買うかな。村雨は？」

「無駄遣いは出来ないもん。予定のものしか買わないよう?」

そう言うのと小笠原海運創立50周年ロゴ入りTシャツ・小笠原DAYロゴ入りTシャツ・小笠原海運創立50周年ロゴ入りフェイスタオルと夏にも購入した小笠原返還50周年記念の瓦せんべいやミント菓子を購入する2人。

「……26cmか。サイズ合わないな」

「23.5cmか。私は合うから買うね」

村雨が創立50周年ロゴ入りの金色ギョサンを購入する。

「むう。もう少し入金しておくべきだったか」

残額を確認し男が愚痴る。

「仕方ないよ。ほら、あっちで入金しよ?」

待合出口付近のチャージブースでPASMOに入金し、くじ引きに並びかけた男が販売中のWAGONに目を留める。

「へえ。返還50周年記念のオリジナルデザインか」

購入するか迷っている男の下に一足早く並んでいた村雨が近づく。

「何やってるの? 早く並ば……。わあ、可愛いカード」

目を輝かせる村雨。そんな様子を見た男が

「このWAGON2枚下さい。チャージは3000円で」

購入とチャージを済ませ、一枚を村雨に渡す。

「ほい」

「え？」

一瞬戸惑う村雨。直ぐに笑顔が浮かび

「ありがと」

「どういたしまして」

村雨の手を取り列に並ぶ。

それぞれ新井式回転抽選器を1回づつ廻すも三等のポケットティッシュと入浴剤1包の詰め合わせであった。

「残念。こういうときは時雨姉さんか雪風ちゃんに引かせたいのよね」

くじ引きを終え再度小笠原海運のブースを見る二人。

「ダメだな、こりゃ」

「ダメね」

「それじゃ、先に黄色の欄に名前を記入しますか」

「はい」

お互いの名前をリピーターの欄に記入する。

100人近くの人が並ぶ列が出来ていることを確認し、暫く列に並ぶ事は諦め奥の試



飲・試食コーナーに向かう二人。

「ただ今お並びになった全ての方が会場に入りました。会場内は今後一層の混雑が予想されます。お子様連れのお客様はお子様の手を……」

放送が流れる。

「うわあ。混んでると思ったら……」

村雨を出汁に赤と青の腕輪をしている人に声をかけ欄に名前を記入して貰いながら列をかき分け奥にある農協のブースへ。

「何だろね、これ？」

「レモネードは買っているけど……あれ？ 新商品か、これ」

渡されたコーヒー牛乳せんべいの試食をしながらスタッフの説明を聞く二人。今年の8月頃に発売された新商品であった。

「いつもの時期だったら良かったのにね？」

村雨が男を見遣る。

「ま、こういう事もあるから面白い。ん？ 良いもん見つけ。ここにあつたのか」

男が手にしたのは瓶入りの島蜂蜜。夏の島ではチューブタイプの小さいものはあつたが、目当ての瓶タイプは品切れだった為購入しなかった。

今回、列に並んでいたときにあると教えられ密かに探していたものであつた。

島で買えなかった島蜂蜜を見つけた男は迷うことなく3瓶購入し、ホクホク顔。

「島蜂蜜？ 珍しいの？」

「昔は買えたんだけど、人気が出てなかなか買えなくなってるんだ。ここ2、3年はチューブしかなかったんだよな。去年は5合瓶サイズで買えたからコーヒーよりはましだけどね」

そんな言葉を聞いた村雨もお土産にと3瓶購入。

残額が少なくなりW A O Nのチャージに向かうと次第に列が長くなっている事に気が付く。

男が9000円分チャージを行いガラポンを回す。

3回目に出て来た球を確認したスタツフがハンドベルを鳴らす。

「お。二等当たったのか」

列から外れ景品のオリジナル巾着を手に後ろの村雨を待つ男。  
ハンドベルの音が響く。

村雨もオリジナル巾着を手に男に寄ってくる。

「二等が当たったよ」

「お。村雨も当たったか」

「二人で当たってよかったね」

舞台ではおがさわら丸の遅れで順番が入れ替わった小笠原海運社長の挨拶が終わりミニライブが始まっていた。

「聞いて行くの？」

「この用紙を入れたら聞きながらブースの列に並び直す」

男の言葉に苦笑を隠せず手をつなぎながら男と一緒に応募箱に用紙を入れ列に並ぶ村雨。

「良い曲ね」

澄み切った歌声にのって『丸木舟』が流れていた。

## 小笠原DAY——後半——

「うう。寒いよお」

髪を海風になびかせながら自分の身体を抱きしめる村雨。

おがさわら丸の出迎えイベントでボードウォークに出た二人。

海風の冷たさに震える村雨に

「ああ、少し風が強いな」

そう言い片手でハンチング帽を押えながら着ていたコートを脱ぎ、かける男。

「あ、ありがと。……寒くないの?」

ホツとした表情を浮かべながらも心配げな眼差しで男を見上げる村雨。

「大丈夫。対策ぐらいしているって言ってたろ?」

そう言う男がベストのポケットから小物を取り出す。

「それって何?」

「これ? カイロだよ」

「え? 使い捨てカイロってそんなに暖かくないでしょ? 冷めるのも早いし」

「いやいや、使い捨てじゃなくて白金触媒のカイロ。ハクキンカイロは戦前からあった筈なんだが。ほれ」

村雨にカイロを持たせる。

「わあ。暖かいね」

「使い捨てカイロの13倍の温かさだ。時間も専用ベンジンをカップ1杯半入れているからあと9時間は大丈夫だ」

村雨から返されるカイロをポケットに仕舞う男。

「でも小さいの1つで大丈夫？」

「あと一つあるから大丈夫だよ」

「それなら良いけど……」

なおも見つめる村雨の顔を挟み

「俺の顔よりも、だ。橋の先、そろそろ見ええないか？」

レインブーツブリッジの方に向ける男。

橋の先にうっすらと船影が見え始める。

「あ。来た来た」

村雨が指さす方向に男が薄型のオペラグラスを向ける。

「おお、見えた見えた」

夕日を浴びながらおがさわら丸の姿が次第に大きくなる。

周囲ではスマホやカメラを構える姿や手に持ったハンカチを振る姿がある。

「あれ？ 思ったよりファンネルが錆びてない」

横付けされるおがさわら丸を見ていた村雨がぼつりと呟く。

「階層も先代とは違って高くなったし、未だ2016年就航だからな」

その呟きを拾った男が応えを返す。

「それに乗っていた時も思ったけど、船体の横揺れもそんなになかったね」

「そうだなあ。3回乗ったけど先代よりは揺れが抑えられていたな」

「だからそんなに波を被ってないのよね、多分」

そう村雨が男に言葉を返すと身をデッキから乗り出す。

「お帰り〜」

村雨が勢いよくハンカチを振り声をかける。

「村雨、少し落ち着こうな」

よしよしと頭を撫でる男。

「ああ。また子ども扱い！」

男を振り返り頬を膨らませ抗議する。

「子ども扱いはしてないつもりなんだがなあ。大切な淑女扱いしてるんだ」

「暁ちゃんじゃないし、言葉でなんか誤魔化されないんだから、もう。人前で頭を撫でるのは止めて欲しいの。……髪を梳くなら良いけど」

一連の遣り取りを見ていた周囲から微笑ましい視線が注がれる。

その視線を感じ取った男の困ったような表情に村雨も我に返り視線を周囲に廻す。

周囲の微笑ましいものを見るような視線に頬を染め、

「い、行っ？」

慌てるように男の手を引いてその場を離れる村雨。男が苦笑しながら引かれるままに建物の中に入る。

階段を降り受付を過ぎると、ハンカチ貰えなかった。という声が耳に飛び込む。

「500枚なんてあつという間になくなっちゃうんだね」

「そうだな」

そう言いながら父島観光協会のブースで返還50周年記念の瓦せんべいを再度購入

する二人。

「美味しかったから人気だったのよね」

「良い味だったな、確かに。買えるのはこれが最後だしな」

「そうなの？」

「そりや返還50周年記念だからな。1月になつたら51周年になつちまう。島なら残つてたら買えるかもしれないが」

「そつか。最後なんだね。次は60周年記念か。どんな風になるのかな」

「前の40周年はそんなに大きくなかつたから期待はできんなあ」

そつか残念。と言う村雨の眩きを聴きながらブースの品物に目をやる男。

「このCDは……持つている奴か。ならこの50周年記念の卓上カレンダーでも買って  
おっか」

残額が心許なくなつたW A O Nに再度チャージしクジ引きする二人。二等と三等を一回づつ当て、島蜂蜜を購入した農協のマルシェ予定場所でウロウロしている。暫くすると視線を遮るように小笠原の風景を印刷した衝立が設置された。衝立が設けられるとほぼ同時に小笠原農協のブースから商品が撤収されていく。

そんな様子を見ながら周囲を見渡すといつの間にか列が出来、前から3番目に並んでいた。



「まだかな、まだかな♪」

些か燥いでいるような村雨を揶揄いつつ準備を待つ二人。

「マルシエ楽しみにしていたあの人達どこ行ったんだらうね？」

ふと開場前に一緒に前にいた人はどこに行つたのか。と周囲を見回す村雨。

「そう言えばそうだな。……後ろにもいないし」

後ろを振り返る男。振り返った先には列が二重になっていた。

20分ほど待つと、お待たせしました。との声と共に衝立が移動される。

二人が素早く視線を動かす

「ジャムとレモンやパッションフルーツのカードと島辣油、蜂蜜の他はプチトマトに島とうがらし、島オクラ、ジャボチカバ、青パイヤ、中玉トマト、ミニトマトね。どれ買うの？」

「コーヒーはないのか、残念。プチトマトが一人2パックか。これは当然買うとして、後はジャボチカバに青パイヤかな。中玉トマトとかミニトマトは要らないし、蜂蜜はさつき買ったからもういいな。カードやジャムは……要らん」

カゴに入るだけの量にしてください。との注意を聴きながら品物を吟味しカゴに入れる二人。

「やれやれ。無事に買えたか」

購入した物をバッグに詰めながら

「ライブにはまだ少し時間があるけどどうするの?」

村雨が男を見上げる。

「そうだな。もう一回あそこに並ぶか」

そう言うと二人で開場直後に訪れたブースに並ぶ。

「何かあるかな」

村雨が楽し気に品物を見る。

「創立50周年ロゴ入りボールペンか。後は……返還Tシャツは買ってあるし、画用紙位だな、買うのは」

「あ、これも買っておこつと」

眩くような村雨の声が耳に入り、男が視線を遣るとネクタイピンを購入する様子が入った。

「コースターか。……村雨、これ買うか?」

「ん。何枚か買っておこうかな」

支払いを済ませる村雨。

目的のものを購入し終わると隣のブースに移動する。

「共勝丸お別れタオル……? あれ? 共勝丸って引退するのか。なら買っておかない

とな。後はペーパークラフトも買っておくか。あ、先代のおがさわら丸ペーパークラフトもあるのか。これも買いだな。後は……トートバックか。……これ面白い図柄だな。買うか」

村雨がタオルやペーパークラフトの他にCDやカレンダーを購入し支払いを終える。  
「ん〜。満足満足」

大きく伸びをし、男の腕をとる村雨。

「どうする？」

壁の時計に視線を移し、

「そろそろフラの披露があるから座るか」

「は〜い」

フラダンスを踊るナア・プア・ナニ・オ・マクア。

「あ、おがじろうだ」

その脇からおがじろうが現れ一緒にフラを踊り会場を盛り上げる。

そんなおがじろうに向けて小さく手を振る村雨。

おがじろうに向けて声が飛び、おがじろうが応える。

「あ、こっち向いた。可愛い」

相変わらず村雨の感性はちよつとわからんと感じる男であった。

フラ披露の後に小笠原村観光局が開設したクチコミサイトが紹介される。

「投稿してみたら？」

「どうするかなあ。……気が向いたらしてみるかな」

暫く座席でのんびりしていた二人の前では小笠原アカデミー第一弾と銘打ったイベントが開催されている。

若い女性整備員が慣れた様子でスライドを交えながらおがさわら丸の整備の様子を紹介している。

アンカーを下ろした船体と下から見上げた写真を写しながら

「私達でもあんまりこの角度から見ることにはできないんですよ。下は危険ですから」

楽し気に裏話も交えながら紹介していく。そんな言葉から思わず村雨を下から見上げた姿を想像する男。

「……うん。確かに危険かもな」

「なに想像したのかしら？」

「ん？ 何、村雨を下から見上げた時の姿について！」

男の二の腕を抓起上げる村雨。

「いや、確かあったんだよな……ニコかどこかで」

「そうなの？ 後で探してみよっと」

第二弾として、すみだ水族館からの魚の生態クイズが始まる。

魚の名前当てや写真の場所当てなどで盛り上がる会場。

「あちゃ〜。間違えたか、残念」

男が席に着くも

「お。さすが村雨」

「当然でしょ」

正解し続ける村雨。

「あ。そろそろ少なくなってきたから止めるね」

残りが10名前後になったところで着席する。

「どうした？」

男が不審げに問うも

「だって……目立ったら色々大変でしょ？」

それもそうかと納得する男。

最後は勝ち残った子供と大人でじゃんけんになり、子供が勝ち商品のシロイルカのぬ

いぐるみと水族館の入場券を受け取る。

「面白かったね。色々知ったし」

「そうだな。JAXAのアンテナの愛称がオレンジペペだったのは初めて知ったな」

クイズの最中に男が購入してきたホットドッグを食べながら話し込む二人。  
肩を叩かれ振り向くと、

「あ、先程はどうも」

開場前に話していた人と再会する。

「マルシエどうだった？ お。無事買えたんだね、ミニトマト」

「ええ。前の方にいた物で。そちらは？」

「危なかったけど買えたわよ。蜂蜜とかも買えたし」

「それにしてもまだまだ混んでいますね」

「知り合いのスタッフに聞いたんだけど1000人近くいるみたいね」

「それは凄い」

「それじゃ、ね。次のミニライブ、色々良い曲があるみたいよ」

そう言いながら前の方に花束を持ち移動する人を見送る二人。

「何が聞けるのかな？」

「あ、丸木舟だ。良いよね、この曲」

「アオウミガメの旅ね。この曲、どうしても鎮守府の皆を思い出しちゃうのよね」  
「そうなのかな？」

「そ。だから貰ったプレイヤーで遠征中とかによく聞いてるんだ」

「次は……オハナワラワラか」

「あ。レモン林……」

「ウラメか」

何処か聞き覚えのあるような曲に村雨が首を傾げる。

「これって南洋踊りの？」

「そうだな。これに合わせていることが多いな」

道理で。と呟くとそのまま目を閉じ曲に集中する村雨。

「これって……父島を出港する時に聞いた曲だね。僕たちのパラダイスって言うのね」

「最後にBoninの島を持つてくるか。王道と言えば王道だけど……」

しみりとした口調で呟く男。

「良い曲ばかりだったね」

「そうだな。買ったCDに新曲も入っていたな。帰ったら早速聞いてみるかな」

「一緒に、ね？」

時間が過ぎ去り、いよいよ最後の抽選会。

「漢字で書いていませんよね？ 漢字の名前は失格ですよ」

司会者の注意と確認を聞き

「あれ？ そんなこと書いてあつたつけ？」

と男が首を傾げる。

「書いてあつたけど……あ、まさか」

村雨が男の失敗に気が付く。

確かに自分の名前を漢字で書いた覚えのある男。失格だった事に気が付いた。

「あくあ。やっちまったなあ」

「もう。ドジなんだから」

「まあ、どんな景品があるのか最後まで見ているかな」

そのまま帰るかとも思った男だったが。傍らの村雨が目を輝かせて舞台を見ている事に気付く。

「村雨は名前書いたのか？」

「もちろん。しつかりと『かなさしむらさめ』って書いたよ？」

悪戯気な表情で強い絆を結んだ自身の提督を見遣る村雨。

「おいおい。……当たるかな？」

「時雨姉さんか雪風ちゃん辺りなら当たったかもね。私はどうかなあ？」



島レモンチューハイ、ダース、パツションフルーツのサワーダース、非売品であるアルコール濃度25%の深海ラム6本やヴァンテアンクルーズの食事券、おがさわらの往復券が読み上げられる。

「なかなか当たらないね」

「いよいよ一等のおがさわら丸特二等のペアチケットの当選者が読み上げられる。」

「どうかかなどうか」

村雨が紙を握りしめる。

「残念。外れちゃったか」

言葉ほど残念そうな表情を見せることなく

「じゃ、帰ろ?」

男の腕を取り、入口に展示している水槽を一巡りし広場に向かう。

「うわあ。綺麗」

広場のマストがライトアップされ冬の夜空に映えていた。

「村雨、そつちに立って」

「え? はい」

男がカメラを構えているのを見ると、マストに近付き――。

「今日は楽しかったね」

男に寄り添いながら駅に向かう村雨であつた。

旧【艦娘と提督の小旅行】 あとがき

後書き——旅行 その裏で—— 題名変更前の【艦娘と提督の小旅行】のあとがきなので読まなくて結構です

??：「第一夫人と提督の後書きコーナー♪」

提督：さて、始まりました誰も見そうにない後書きコーナー。裏話や現実との違い等を発表！

あの日、あの時あの場所で（爆撃音）

飛龍：危なかったあ。うちの提督が馬鹿な事しかけて失礼しました。第一夫人の飛龍です。

（転がっている物体を足蹴にして喝を入れる飛龍）

飛龍：……提督、起きて？

提督：痛てて。全く、ちよつとしたお茶目……。

飛龍：もう一回行く？ いやならさっさと進めましょうね。

提督：あ、ハイ。

飛龍：最初から気になるんだけど、この話ってどう考えても【小旅行】じゃないわよね？

提督：そこか。うん、そうも思っていたんだけど、一週間程度なら小旅行かなと。

飛龍：そんな訳ないでしょ。普通に旅行つてすれば良かったのに。【艦娘と提督の〜】も

艦娘が村雨ちゃんなら【村雨と提督の〜】でも良かったんじゃないの？

提督：あ、それ無理。今回マジでランダムだったから。

……夕立が来ると思ったんだけどな、正直なところ。

飛龍：何で？ あ、夕立ちゃんだけ加点したのね。

提督：そ。トーナメント形式で決めようとしたらまさかの結果。決まった時大爆笑だったわ。

飛龍：慢心はダメ、ゼツタイ。よ、提督<sup>あなた</sup>。

それとあらずじの中身、変なフラグ立てたわよね？

【2018/07/21追記：台風逸れました。……サイパン方面で発生しなければ良いな。】

つて。見事に25日にサイパン近海で台風発生したわよね。

提督：あ、あはは。

飛龍：何やっているんだか。ま、始めましょ？

提督：だな。さて、プロローグから色々話しますか。

飛龍：そうね、まず……何で私達が対象外だったの？ 行きたかったのに！

提督：しゅ

飛龍：趣味とか言ったらロリ・ペド提督って鎮守府中に言いふらすからね？

提督：や、やだなあ……。ソナシユミダナンテソナワケアルワケ

飛龍：さっさと進める（弓を構えつつ）

提督：まじめに話すとだな、飛龍と一緒にだとラブラブものにしかならない。他の艦娘だと

余所様にもいろいろあるじゃないか、蒼龍や大和達が出る話。駆逐艦も暁型とかあるし、

ネタ被りしなさそうなのは軽巡か白露型位しかないじゃないか。

飛龍……態々スタイルのいい白露型を選択する辺り作為的なんだけど、良いわ。

提督：名取を指名したら逃げられたし……。天龍を指名したら龍田がイイ笑顔だったし。

飛龍：名取ちゃんが逃げるのはあんな話書いたからよね、五十鈴ちゃん達もカンカンだったし。

提督：そんな訳で村雨になったんだが、プロローグ、もう少し増やす予定だったんだよな。

仕事忙しくて書けなかったから仕方ないと言えば仕方ないんだけど……。

飛龍：うん、少し村雨ちゃんがチヨロイン化していたものね。因みに予定だったのは？

提督：買い物、艦これの指揮に家庭菜園の手伝い、よくある風呂<sup>風呂</sup>トラブルを除いた日常生活。

飛龍：書かなくて良かったんじゃない？ 書けそうにないわよ？

提督：ゲフツ。……確かにそうかもな。うん、書かなくて良かった良かった。

飛龍：それじゃ、第一日目から見えていきまじょうか。

提督：……一日目って特に書くようなこともないなあ。

飛龍：そう？ 満員電車で村雨ちゃん、あちこち触られたって。怖くて震えていたら

提督に庇って貰えたって。庇えて貰って嬉しかったって言ってたわよ？

提督：……あんまりそれは触れて欲しくなかったかな。気が付いても相手を睨みつけて

身体割り込ませる位しかできなかつたしな。

飛龍：うゝん、私はそれだけでも良かったって思うけど提督がそう言うんじゃないこの話

はお終い。

二日目……ね。

提督：朝から酷い目に……飛龍、どこ行くんだ？

飛龍：ちよつと聞いていなかっただ事があるからオ・ハ・ナ・シ。

提督：（飛龍の襟首持ちながら）今はこつちが優先。

飛龍：でも……。提督<sup>あなた</sup>、眼福だったでしょう？ あの子スタイル良いから。

提督：（目逸らせ）あの時は焦りしかなかつたわ。何時手を出したんだって……。

酒に飲まれて無理矢理襲うのはどんな事情があつたってダメだろ。悪ふざけでよかつたよ。

飛龍：あ、村雨ちゃんを組み敷いた提督<sup>あなた</sup>にも少しお話があるから。後でね。

提督：（……飛龍の目がこ、怖い）

飛龍：後、ドラム缶とお土産の事だけど、鎮守府の皆に行き渡らせるには少ないのよね。

これは？

提督：飛龍、知ってるよな。まあ良いか。村雨が鎮守府に帰つた後、明石や夕張がふ

○ーるミ

ラー擬きの機械で増やしたって聞いたぞ？

飛龍：何だ、知ってたんだ。うん、美味しく頂きました。提督の菜園土産もね。ご馳走様でした。

それと、二日目以降村雨ちゃんが涙を浮かべることが多いのは何で？

提督：しゅ……ゴホン。この話では乗組員の色々な想いが艦娘の感情になつて現れるという設定。

んで、村雨の乗組員の中に小笠原に縁がある人がいたという設定。決して趣味ではない。

飛龍：ふくん。【趣味】ではないのね。

提督：違うな（見えないところに汗をかきつつ平然と）

提督：さて、ここからは本格的に現実との違いを出していくかな。

飛龍：……出しちゃうのね？ 打ち合わせの時から私はそれ反対してた事、覚えておいてね。

提督：早速なんだけど、二日目の夕食時の出来事、実は大幅に変わっているんだよな、現実と。

飛龍：どこが？ あ、着発便って書いていなかったわよね。その事？

提督：現実には宿に着いた直後に台風で27日東京出航便が欠航になるって言われていたんだ。



言われてそのまま15時の便で帰った人もいたな。

飛龍：え？ 何で提督は帰らなかったの？

提督：振休まだ4日分あったし、足りなかったら有給使っても良いし。天候じゃ仕方ないよね。

この時期に小笠原行った目的が26日の貞頼祭だから猶更。

飛龍：酷いなあ……。信用無くしちゃうよ？

提督：うん、帰れなかったら実はやばかったことが出社して判った。トラブルっていたらしい。

飛龍：……。電話とかしないで出社するの待っててくれた会社の人に感謝しないとね。

提督：全くだ。ンで、3日目。提督が早朝外に出ていた場面で書き直しがあつたなあ。

飛龍：雨を見ていた所ね。書き直す前はさつきと部屋に戻って村雨ちゃんの着替えを覗い

ちゃって声をあげられる前に飛び掛かって口を塞ぐ場面よね。変えたの

何で？

提督：解ってるよな？ そんなことになったら信頼度がた落ちで話続かなくなるだろ

うが。

公開して3分でデータごと削除したわ。

飛龍……想像すると危ない場面だものね、お話しのにも。

提督：そう言う事だ。後、現実と違うのは村雨絡みの台詞位か。此処は仕方ないわな。他の玉串奉奠中に急に晴れたのは事実だし、神輿を担いだのも事実。急に晴れるなんて

ると神  
ご都合主義って思われるかもしれないんだが、事実なんだよな。こういう事があ

の直前  
様の存在を信じなくなるわな。祭の終わりの頃に降り出すのを実際に見たり、島

で台風の進路が急に逸れたりしたのを見ると。

飛龍：そして宿に帰って夕食の場面。かなり書き直してなかった？

提督：自宅に戻って現実と鎮守府世界の繋がりを無くすか繋がたままにするか迷い始めたからな。

飛龍：初めは？

提督：一旦完全に無くす予定だった。繋がっても現実時間で半年後位に不安定なまま

2〜3日で

消える予定で。

飛龍：迷い始めたのは？

提督：小旅行じゃないよね、これって。と気が付いてから本当の小旅行も付けようか  
なつて。

飛龍：これが小笠原旅行を書きたいだけで、後は行き当たりばつたりだった結果なの  
ね……。

それじゃ、4日目だけ……。

提督：午前中の事か？ 穴の消え方で色々迷走していたな。ん？ ……違うのか？

飛龍：それもあるけど、村雨ちゃんとのマツサージ。これについての釈明は？

提督：ありません。序にこの日は随分書き換えたなあ。具体的には後編。初めは提督  
が村雨に

マツサージする場面を具体的に書いていたんだが、R—15以上になりそうな気  
がして2時間

ほど後で削除。その場面の代わりが風呂場の場面だな。……前に投稿した話の  
流用だけ。

飛龍：……マツサージとお風呂についても後で3人で「お話」ね。私も一緒に入った  
ことないのに……。

提督：んで、5日目か。……現実に出かけた所と話の場面はリンクしているし、特に  
差はないな。

ただ、話を繋げたりして大幅に変更したな、具体的には7月28日の昼間と午後。

飛龍：分割していたのを一つにして、追加部分を分けたんだっけ？

提督：そ。海洋センターと港の場面を一つにして、出航までを大幅に追加して一つの話にした。

それ以外は特に変えなかつたけどな。

飛龍：村雨ちゃん絡みの所以外はほとんど一緒なのよね。店員さんとのやり取りとか。

提督：そりゃ細かい所は違うけどな。……一緒にしていたらすぐに身元バレするわ。

飛龍：流石に10年以上毎年行く人なんてほとんどいないでしょ？

提督：今後増えるかも……増えると良いな。

飛龍：それと、5日目の深夜というか6日目の未明。穴の事なんだけど……。

提督：ん？ 最後の方と違うのは、まだ消え方について迷走していたからだな。手直しして

食い違いが出ているかもな。

飛龍：それと、二人で見えていた写真だけ……

提督：あれが一番の違い。あの写真の殆どが2008年頃の奴だからカメラに入っていないの。

話の都合で昨年の写真を消し忘れたようにしただけ。軍艦も去年撮った奴だから。

今年は会わなかったんだ。ちよつと向こうの情勢も入れて見たくなつたから出した。

飛龍：細かいところで随分違つてきているのね。この辺は帰つて来てから大分経つたから？

提督：そうかもな。

飛龍：……もしかして下船前の寝坊とか昼食時に会つた人に出会つたとかも？

提督：まあ、寝坊はしてないんだが出会つたのは本当だな。話の内容は全然違うが。

鯨の尾とか受付台とかは2016年の就航3ヶ月目の頃のだ。今年は写真撮り忘れていた。

飛龍：大井ふ頭の写真は？

提督：去年の。他の人とうっかり話し込んでたら写真撮り損ねていた。

飛龍：6日目の竹芝到着後んだけど、芝大神宮の千木宮お守りと強運お守りに増上寺の勝運

守りと勝運黒本尊祈願札。これって重要な鍵になる筈だったわよね？

提督：あれな……。初めはこの4つと村雨への贈り物で完全につながる予定だったん

だ。

公開前に知り合いに見せたら、ご都合主義だの神様転生並みに質悪いとか散々だった。

んで、あの場面に繋がっていくと。

飛龍：ふくん。それでホテルなんだけど……。ねえ、提督<sup>あなた</sup>。少しお話良いかな？

私への贈り物とか新婚旅行のお話ってないし私の事どう思ってるの？ 本当に私が第一

夫人で良いの？ 他の娘にしたいんじゃないの？

提督：何を今更。飛龍、うちの鎮守府で初めての空母は君だっただろ。それこそ初期の頃から

一緒だったよな？ 沖ノ島海域やら、リランカ島やらで助けてもらったしな。

……言葉にしてなかったから不安だったか？ 飛龍、君と一番最初にケツコンカツコカ

りを結ぶために後から来た赤城や金剛が追い付かない様に色々調整したんだがなあ。

やっぱり態度で示さないとダメだったか。……その件はゆっくりと、じっくりと

話し合

いたいな。二人で朝までな（手ワキワキ ジリジリと近づく）

飛龍：えつと……その話はあとで、ね。ちよつと、こつち来ないでつて。ちよつ……つ  
あぁ、

めっ！ 艦載機が落ちちやいますからあつ！

提督：ふう。……相変わらずこういうのに弱いなあ。ほら、こつち来い。後書きの続き始めるぞ。

飛龍：多聞丸に……つてあぁ、違うの？ 誤解？ なら大丈夫ね、本当？（怯え）

提督：ほら、早くしなさい。

飛龍：うん。……つてやつぱりい（提督が飛龍の腕を掴み膝に乗せ、後ろから手回し抱きしめ）

提督：これから先は色々とおあるからな。話をどんどん進めるには必要だからな。

飛龍：ひくん。提督が強引だよ。助けて、多聞丸うぐ。

提督：んで、この日の夜なんだが……暴れるなつて。

飛龍：（ジタバタ）

提督：ナンバンアカアズキのイヤリングとサメの歯が付いているネックレスをいつ買ったのかと

いうと、実は2日目に村雨をB・I・T・C.に行かせた時という……。 （飛龍

の耳に息吹きかけ)

飛龍：フヤウ。……。

提督：落ち着いたか？ ……大人しくなったところで続き行くか。あ、ホテル名は出さないから。

すぐわかるだろうし。……飛龍？

飛龍：……やっぱり村雨ちゃんの言つてたのは正しかったんだ。……信じてたのに……。

提督：おくり、戻ってこくり。

飛龍：提督が色魔だったなんて……。

提督：ちよつと待てい。何だ、その色魔つて。

飛龍：え？ 嫌がる村雨ちゃんの唇を強引に奪い舌を割り込ませてからの接吻……。

提督：一寸待てえ！ 村雨がそう言つたのか!?

飛龍：ううん。村雨ちゃんが何か思い出したみたいに真つ赤になりながら頬を押えてたのを見て

蒼龍と話してた時のオハナシ。秋雲ちゃんと一緒に問い詰めて盛り上がったなあ……。

村雨ちゃん涙目で逃げちゃったけど。



提督：飛龍、頼むから脅かさないで……。

飛龍：實際のところはどうだったのよ？

提督：ノーコメントで。あ、でも一言だけ。無理矢理なんてするわけないだろうが！

飛龍：でも、この体勢で無理矢理しないなんて言い訳出来ないと思うけど。離そ？

提督：い・や・だ。

飛龍：えつと……。提督が良いなら、まあ良いか。私はちよつと恥ずかしいけど……。

提督：？ んで、この日はそのまま寝た……。ベッドは別な？ 一応言っておくけど。

飛龍：ほんとかな？ 後で聞いてみようかな。白状するなら今のうちよ？

提督：この日は普通に別々のベッドだ！

飛龍：この日〔は〕ね。

提督：あ。……。

飛龍：語るに落ちたわね。それじゃ、いよいよ7日目ね。

提督：普通に家に帰っただけじゃないか……

飛龍：提督の戯言はさておき、まずは、繋がっている穴からかな。

提督：それからか……。

飛龍：そ。穴のある天井と床とが段々開いているってお話よね。その程度じゃたいし

たことない

んじゃないの？ 縄梯子とか三連梯子とかあるわよ？

提督：うちの屋根裏を何だと思ってるんだ。民家の屋根裏に20キロ以上の梯子なんて常設できる

か！ 5mの三連梯子で20キロ近くあるんだ。20mも高くなったら行き来は無理だろ。

……ん？ 待てよ？ 鎮守府から縄梯子を降ろせばいけるか？

飛龍：縄梯子20mを上り下りするの？ 提督は無理なのは当然だけど私達も少しきついかも。

……やっぱり大規模リフォームよね。ね？

提督：おい！

飛龍：えく。そこはほら、愛する私達のために、ね？ 大規模リフォームを！

提督：ね？ じゃない。無理なものは無理。序でにリフォームしたら穴が消えたなんて事になつたらどうするんだ？

飛龍：あ、そうね。空間が変わつちやうから消えちやうこともあるのか。うん、やっぱりリフォーム

ムは無し。……じゃあどうするの？ そのうち出入口は見えても段々行来が難

しくなつて、

そのうち出入口も見えなくなつちやうの？

提督：この時点では3ヶ月位で行来が難しくなつたわな。

飛龍：村雨ちゃんも解つてたのよね。だから「アレしかないよね」つてなつちやつたのよね。

あ、そう言えば「夕張が、本当に思つてるならと村雨の耳元で二言三言囁く」つてここ。

後で村雨ちゃんに聞いたんだけど、夕張ちゃんつたらえげつない事させようとす  
るわね。

提督：夕張が何か言つたのか？

飛龍：耳元で囁くのやめない？ ちよつと……。

提督：ん？ ……夕張が村雨に何か言つたのか？（息吹きかけ）

飛龍：キヤウン。……教えてあげない！ あ、ちよつと、膝で揺さぶるのダメえ。

提督：なら教えなさい。ん？（膝上下に動かし）

飛龍：ヤン。絶対ダメ。村雨ちゃんとの約束なの。ダメエエ。

提督：約束……仕方ないなあ（揺さぶり止め）約束だと飛龍は絶対言わないからなあ。

……判つた、これ以上は聞かない。

飛龍：ハアハア……ありがと。それで、家庭菜園？ の事だけど……。

提督：ああ、実際の規模は一反以上三反未満とだけ言っておくわ。生業が農業でない事も。

とあり  
畑は二反でも良かったんだけどな、なんと無くひねって見た。んで、一反五畝だ

きたりだから一反七畝五歩にしたかったんだけど当時は畝の下が分からなかったから諦

めた。因みに作物は色々育ててはいるけどな。今話題の翠王やシモンは2005年には植え

ていたしアイスプラントも2010年頃植えてみた。ペピーノとかキワーノは出た当初育て

てみたけど、美味くなかったから止めちまったなあ。カックロールは育たなかったんだ

よなあ……。モーウイは彼奴らアライグマ達に喰われたからもうやめた。作中のフェイジョ

アはカ  
カポとかウイキトウとかアポロとか植えているけど本格的には難しいな。ま、それはポ

ポーも同じか。

飛龍：ストップ！ 語りだしたら止まらないんだから、もう。

提督：おっと。いかんいかん。

飛龍：ま、そのおかげで私達も色々甘い果物食べられたし。あのブルーベリーつて言う紫の小

さい実、皆から大人気だったのよね。……提督う。

提督：金剛の真似しなくても持つて行つて貰う心算だったからな？ ラビットアイ系とサザン

ハイブツシユ系で苗木を2種類2本づつ。良いな？

飛龍：そう言われてもよく分からないけど、美味しいのよね。うん、うん。提督大好き！

提督：こいつう、調子いいなあ（満面の笑み）

飛龍：だ〜い好き。だから、この手放してくれるともっと嬉しいんだけどな？ ダメ？（上目遣い）

提督：そつかあ……。つと、ダメだ、ダメだ。

飛龍：チエツ。惜しかったなあ。

提督：アブね。ンで……。夜か。

飛龍・夕食の場面ね。それにしても、【村雨が冷蔵庫を覗き】ね。村雨ちゃんたら提督の家が

すつかり自宅になったみたいね。……ところで、提督。

提督：ん？

飛龍：私も100分食べ放題行ってみたいなあ……？

提督：出て来られるのか!?

飛龍：ん。まだちよつと無理みたい……。提督がこつちに来るみたいにも私も行ければいいん

だけどね。

提督：いつかは行来できるようになるさ。

飛龍：ん。そうね……。

提督：……

飛龍：ごめん、ちよつとしんみりしちゃった。次は写真を一緒に見る場面よね。

提督：こう見ると随分いろいろな所に行ったなあ。壊れたNASにある写真データや水中用の

【写ル〇です】で撮ったのや動画も合わせると結構溜まったなあ……。

飛龍：43代米国大統領が植えたノヤシみたいは今も無いものもあるんでしょ？

こういう

のは、ちゃんと保存しないと。

提督：そうだな……光学メディアに保存するか紙に印刷して保管するか。そのへんも

そろそろ

考えないとな。

飛龍：次は……。あ……。

提督：この時間か……。

飛龍：……。

提督：……。

飛龍：……村雨ちゃんの大切な思い出よね。止めましょ？

提督：跳ばすか。

飛龍：（無言で頷き）

提督：ンで、翌朝。

飛龍：あ、その前に一つ良い？ 耳貸して？

提督：ん？ 何？

飛龍：このヘタレ！ 甲斐性なし！ 女の子の覚悟何だと思ってるの！ 「一緒に寝

よ」なんて言

わせてベッドに入ったら背を向けた？　そこは提督がリードすべきところでしょ！　おまけ

に「意気地なし……」なんて村雨ちゃんに言わせちゃて！　おまけにそれに応えもしないっ

てどういう事!?　何考えてるの！

提督：いや、村雨を思つて……ゴニヨゴニヨ

飛龍：ん？　何？　そっちの方が傷つけるってまだ解らないの？　挙句の果てに「……抱いて」

とか「お願い……」なんて言わせちゃつて！　この卑劣漢！　卑怯者！　村雨ちゃんに謝り

なさい！

提督：そこまで言……。いや、確かにな。傷つけるって頭では判っているんだが……。飛龍：行動が伴わなかったら意味ないでしょ！　今度村雨ちゃんが遊びに行ったら確りと謝りなさい

い！　返事は!?

提督：ハイ！

飛龍：ン。結構。……ホント、お願いよ？　それと、あの子の練度も考えて行動して



頂戴。

提督：ああ。練度も十分だしな。……そろそろ渡すには良い機会だよな。

飛龍：村雨ちゃんの前に渡さなきゃいけない子も一人いるのを忘れちゃだめよ？ 無

邪気そうに見

えて案外傷つきやすいんだから、あの子。

提督：そうだな。順番間違えないようにしないと。

飛龍：一応確認させて。渡す順番は？

提督：夕立、村雨の順だな。

飛龍：宜しい。それでこそ私の旦那様。後は、大和さん、赤城先輩、武蔵さんかな？

時雨ちゃん

も同じ位ね。今回と同じようになったら今度は同じ間違いないでね？

提督：……大丈夫、だ。

飛龍：ホントかしら……信じてるからね。じゃ、気を取り直して。いよいよ最後の日

ね。

提督：別れの、（飛龍が提督のつま先踏み付け）

飛龍：全く。懲りないんだから。……よつと。やつと抜けられたけど……これはこれ

で良いかも。

偶には良いか（座り直し）

（……あの子たちに見せつけちゃおっと）

提督：痛たた……。思いつきり踏んでくれたなあ。

飛龍：提督が悪いんでしょう？ 話進めるわね？ えつと「ちよつと庭に出るね。見ておきたいん

だ、こつちの風景……。この時何で一緒に外に出なかつたのよ。村雨ちゃん、一緒に来

てもらえるかなつて思つていたつて。何も言わないで後ろか横にいるだけで良かつたのに、

この唐変木は……。

提督：……。沈黙は銀、雄弁は金。というけどここは沈黙が金だな

飛龍：オマケに村雨ちゃんの荷造り手伝つてあげればいいのに自分で他の作業しちやつて……。

村雨ちゃんの荷造り手伝つてそれから二人で踏台出しなさいよ……。村雨ちゃん、少しでも

一緒に居たかつたんだから（首振り）……今からでも艦娘心の教育しなおそうかしら。

提督……………

飛龍：でも【キョトンとした村雨に男の顔が近づき、ごくあっさりと唇が触れた】とか【手を置き

んの強がり 強引に顔を向けさせ】た此処はよくやったって褒めてあげようかな？ 村雨ちゃん

をしっかりと見破れたし。でもね【昔遊んだエロゲーの動きの様にマウスの左ボタンを押し

ながら村雨の胸元辺りにカーソルを動かす】って、な・に・や・つ・て・い・る・の・か・

し・ら、ね！（膝抓り）

提督：痛い！ マジで痛い！

飛龍：まあ村雨ちゃんも【するんなら私が来た時に堂々としてよね……………】なんて言っているあた

り、もう落ちちやつてるから大目に見てあげるわ。

提督：大目に見て貰っても抓られるのか……………。

飛龍：当然でしょ！ ……そろそろ終わりかしらね。

提督：そうだな……………。

飛龍：あ、そうだ。今後の予定ってどうするの？　せっかく小笠原を章立てして  
 いるんだから、

バスツアーとか茨城のあんこう鍋食べに行く時とかお祭りに出かけるとかの日  
 帰り旅行を

此処に乗せても良いんじゃないの？

提督：うーん。そこなんだよな……。次の小笠原旅行は乗せるとして、珍しく纏まっ  
 たからなあ。

この話を「村雨と提督の小笠原旅行記」みたいにして、「艦娘と提督の小旅行」を  
 新たに作

るか。とか考えちゃうんだよな……。ホントどうするかなあ……。日帰り旅行  
 は未定か

なあ。

飛龍：うーん、そこは提督次第？　としか、私からは言えないかな。

提督：ま、追々考えれば良いかな。……そろそろ終わりにするけど、飛龍、何かある  
 か？

飛龍：ん？　私からはないかな。

提督：じゃ、締めめ挨拶にいくか。ほら、立って。

二人：このようなお話に最後まで目を通していただき誠にありがとうございました。  
感想も御三方

から頂き、またお気に入りも70名を越す等思いがけない反響を頂きました。

この場をお借りして厚く御礼申し上げます。この小笠原旅行の話はこれにて完結とさせて頂

きますが、来年問題なければ続編（多分ドルフィンスイムとホエールウォッチは確定）を掲

載する予定です。日帰り旅行については未定とさせて頂ければと思います。

（二人深々と頭をさげる）

\*\*\*\*\*

??：（パチパチパチ）

提督：？ お、お前ら!? ……いつから居た？

??：えっと、提督さんが飛龍さんを膝に乗せた時からっぽい。

??：あと青葉さんがカメラで鎮守府中に映像を流してたよ。独占生中継だつて。

提督：……生中継!?

飛龍：だから言つたじゃない。離そつて。

提督：知っていたのか？

飛龍：もちろん。髪の毛が窓から一瞬見えていたから。

??：さつきも食堂で大盛り上がりだったわよ。——としては大騒ぎになる前に早

く帰った方が良いと思うけど、ね？